
安奈

ナガス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安奈

【Nコード】

N2997D

【作者名】

ナガス

【あらすじ】

心を語る、心に問いかけるお話。雪の降る季節、草木も眠る真夜中、男はゴミ捨て場で薄汚れたブラウスを一枚だけ羽織っている少女と出会った。目は薄く濁り、口は半開きのその少女は、死なないために、生きていた。「愛して、愛して、愛して」伝わった試しは、無い。

第一話：後ろを歩く、地球の裏側の人（前書き）

はじめまして。小説『安奈』に目を留めていただきありがとうございます。作者のナガスです。

このお話を読む前に、ひとつだけ誤解がないように言っておきたい事があるので、少しだけ注意文を書かせていただきます。

このお話はジャンルとしては恋愛小説に分類されると思うのですが、作者自身その自覚がありません。

ですので、甘ったるいものが読みたい。という方にはあまりお勧めはいたしません。そういう表現が無い訳ではありませんが：甘い恋愛小説のつもりで読んでくださった読者様はがっかりしてしまうのでは無いだろうか：？と心配になってしまいます。

かと言ってほかにジャンルも思いつかないので、恋愛に分けさせていただきました。ご了承ください。

あくまでこの作品は「心を語る、心に問いかけるお話」です。

第一話：後ろを歩く、地球の裏側の人

2005年、初冬。

場所は日本では北国と呼ばれている地域。

ホテルから出てきた俺達の目に飛び込んできたものは、この冬になって初めての雪だった。

乾燥した空気ではある。だけど同時に澄んだ空気でもあった。

少しだけ良い気分になる。火照った自分の体には、これくらいが丁度いい。

「……寒いですね」

後ろにいる少女が口を開いた。

「……ああ」

俺はそう言って両手に息を吹きかける。

本当は別に寒く無い。

「あの」

再び少女が口を開く。

「ん？」

「その……つま……んか？」

「……何？」

「手……」

「手？」

「……手、繋ぎませんか？」

「……」

別に拒否する理由も必要も無い。

……無いはずのだが……

「いや」

そして、繋ぐ理由も、また無い……

無いと、自分に言い聞かせる。

「そ……そっか……あ、別に気にしないでくださいね。なんか……すみません」

「……別に」

少女は何故謝ったのか。俺には理解できない。

少女は照れくさそうに、差し出しかけていた左手をそつと体の背に引っ込め、うつむきながら喋らなくなった。

俺はその姿を横目で見ながら自分の手をコートのポケットにつっこみ、もう一度少女のほうをチラっと見たあと、自分が住んでいる安アパートへと向かい歩きだす。

俺は振り返らないで、少女の足音を耳で確認する。

しっかりと、一定距離を保ちながら付いてきているようだ。

これが、俺と安奈の形。

時には恋人のように体を求め合う。

しかし時には他人以上に無関心。

肉親以上に親密ではあるが、同時に地球の裏側に住んでいる、自分とは無関係な人間のような、そんな関係。

これが、俺と安奈の形。

「……ねえ、松本さん……」

ホテルからの帰り道、安奈は突然話しかけてきた。

どうやら安奈は歩みも止めているようで、足音も聞こえてこない。俺は面倒くさがりながらも後ろを振り返り「…何？」とだけ聞き返した。

「……」

「……何だ？」

「……」

安奈はうつむきながら立ち止まっている。

俺が買い与えてやった薄い安物の黒いコートが風に吹かれてひらひら揺らいでいた。

「置いてくぞ……」

この台詞は、半分本気だ。

「置いて…… かないで……」

「じゃあ早く来い。雪が本降りになるだろ」

「……」

安奈はうつむき黙ったまま。

俺は相当面倒くさくなってきた。少しずつイライラもしている。そう思う事になっている。

何故、こいつのために立ち止まらなければならないのか。早く帰りたい。そう思う事にする。

「……置いてくわ」

ガキじゃあるまいし、一人で帰って来れない事も無いだろう。

俺は前を向きなおしてゆつくりとまた歩きだした。

「ヒックツ…… 置いて…… グスツ…… かないでえ……」

……面倒くさい。

勝手に泣けばいいだろう。俺には関係無い事。

俺は歩くスピードを上げた。

「……グスツ……グスツ……」

泣き声は、しっかりと俺の後ろから付いてきているようだ。

その声を確認できて、俺は少しだけ、安心していた……

これが、俺と安奈の形。

第二話：掴んでくれる人の居ない、さし延ばされた腕

私は、元々野良犬だった。

ホテルのチェックアウトを終えて、私と松本さんはホテルの外に出た。

相変わらず、私は松本さんの5歩後ろを歩いている。

外に出ると、積もりはしない程度の雪がちらちらと舞っている。もう冬なんだなあと、私は思った。

……ふと、ある曲のフレーズが頭をよぎる。

昔聞いた歌。なんて曲名だったかは忘れてしまったけど、たしかこんな内容の歌。

6

『この寒い季節だから貴方の側にいられる
冬の風はより一層 二人の距離を短くした
貴方の右手から感じるぬくもりは 心も 体も 私を温めてくれる』

私は、小さく声を漏らしていた。

「……寒いですね」

実はそんなに寒くは無かった。

さっきまで暖かい部屋にいたし、何より松本さんの体温を感じていたから…

それでも私は、寒いと言っていた。

「…ああ」

そう言って松本さんは自分の手に白い息を吹きかける。

今日こそは……と、心の中でつぶやいた。

「あの……」

松本さんはチラッとこちらを見た。

その眼は、声をかけられた事を疎ましく感じている眼だった。

「……ん？」

ああ、今日もダメだ……

さっきまで私をあんなに激しく求めていたのに……松本さんの眼は、もう、冷たい。

「……その……手……つなぎませんか……？」

私は小さく、松本さんに聞こえないようにつぶやいた。

言う前から、答えは解っていたから……

断られるのが、怖かったから……

「……何？」

松本さんはやっぱり聞き取れていなかったらしく、面倒くさそうに聞き返してくる。

私は目を合わせる事も出来ずに、うつむきながらごにごにと声にならない声を漏らした。

「……チツ」

松本さんはイライラしてきたのか、小さく舌打ちをした。

ああ……このままじゃ余計松本さんの心境を悪くしてしまう……

私は断られるのを覚悟で、松本さんに思いを伝える事にした。

「手……」

「手？」

私は左手を小さく差し出した。

「……手、繋ぎませんか？」

「……」

私が松本さんと外出するのは、これで何回目だろう……

大体はホテル。だけどその数も10回や20回ではすまない。

この一年間、一週間に2回か3回は通っているはずだ。

それなのに松本さんは、ただの一度も手を繋いでくれた事は無か

った。

私は月に一度だけ、ものすごく寂しい気持ちになった時だけ聞いている。そのたびに、「嫌」と一蹴されるだけで終わっている……そして私は、もっと寂しい気持ちになる。更なる孤独を感じる。

……それでも私は聞いてしまう。

断られるって解っているのに……

もしかしたら……って、期待してしまう……

「……嫌……」

「そ……そっか……あ……別に気にしないでくださいね……」

松本さんは私の顔をギロツと睨み、また小さく「チツ」と舌打ちをした。

私は小さく「なんか……すみません……」と呟き、左手をそつと松本さんの視界に入らないよう、自分の背中にまわした。

私はいつも松本さんの五歩後ろを歩いている。

はぐれないよう、松本さんの背中を見ながら歩いている。

この不自然な二人は、周りの人達にはどんな風に見えているのだろうか？

恋人同士には……見えていないんだろうな。

友達ですら並んで歩くというのに……私はいつも五歩後ろ。

松本さんは話しかけない限り決して振り返る事は無い。

そして私も、滅多に話しかけるような事はしない。

どうして、こうなったんだろう……

いつから、こうなったんだろう……

なんで手を繋いでくれないのだろう……

なんで冷たくされるのだろう……

それなのにどうして、私はあのアパートを追い出されないのだろう……

私は、松本さんにとって、どういう存在なんだろう……

近くにいるはずなのに、すごく遠くに感じるよ……松本さん……

息をついた後「……置いてくわ」と言って歩き出した。振り返りもせずに。

私から逃げるように。歩き出した。

振り返りもせず……

気にもとめず……

逃げるように……

本当に、置いていった……

「つく……ヒック……うううう……」

「……」

「ヒックッ……置いて……グスッ……かないでえ」

それでも松本さんは、もう止まってはくれない。

「ックッ……ヒックッ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

この寂しさは、私への仕打ち……

……私が悪いんだ……私が松本さんを試そうとしたから……

私が悪いんだ……

私が全部悪いんだ……

第三話：責任と罪悪感

私は今14歳。

本来だったら、中学校へ通っているはずの年齢。

学校へ通って、退屈な授業を受けたり友達と手紙を回したり。

放課後、部活をやって汗を流したり、友達とお話して笑っていたり。

なんでもない日常を送っているはずだった。

だけど私は……

「いらつしゃいませ。こちらは暖めますか？」

だけど私は毎日、偽りの笑顔を作りながら、コンビニのレジ打ちをしていた。

ピッ……ピッ……ピッ……という機械音が規則正しいテンポで私の手の動きにあわせて鳴り響く。もうこの行動で戸惑う事は一切無い。

「3点で880円になります。1000円からでよろしいでしょうか？」

本来、14歳ではコンビニでのアルバイトなんてしてはいけない。せいぜい新聞配達程度の仕事しか出来ないのが普通だ。

でも私の場合は、松本さんが店長を説得してくれて、なんとか働かせてもらえる事となった。

時給は……500円という破格ではあるけど……

家賃と食費を払えないのは本当に申し訳ない気持ちになってしまふから、私は別にこの待遇で構わなかった。

少しでも松本さんの役にたっていられるというなら私は頑張れる

……

「ありがとうございます」

私は店内に残っていた最後の客を偽りの笑顔で見送った。

「ふう……」

朝のラッシュが終わって一息つき、なんとなく時計を見てみると9時を回っている。

松本さんはちゃんと起きて大学に向かっただろうか……なんて事をぼんやりと考えていた。

コンビニの仕事は以外とやる事が多く、客が居ない間にも荷物の仕分けや掃除、棚の整理などの作業がある。

人の居ないこの時間に出来るだけ多くの作業をしておく必要があった。

とりあえず私は店長の奥さんの仕事を手伝おうと思い、売り場へと歩いていく。

「お疲れさまです」

「あら、安奈ちゃん。どうしたの？」

私はしゃがみながら荷物の検品をしていた正美さんに話しかけた。美人な人ではないし、少し太り気味の奥さんではあったけど、私に優しく接してくれる人。松本さんの次に好きな人だ。

「今お客さん居ないので、私もお手伝いします」

「あらホント。もう9時過ぎてるのね」

奥さんは立ち上がり「ん」と背伸びをして腰をトントンと叩いて「いたた…」と声を漏らす。

私は奥さんのその仕草を見て思わず「クスッ」と笑った。

「安奈ちゃん悪いんだけどさ、この仕事やっておいてくれないかな？」

「あ、はい。いいですけど、正美さんは？」

「私ちよつと出かけなくちゃいけないくて」

え……？

「ごめんね、一時間くらいで帰ってくるから。お願い」

「え……でも……」

居なくならないで欲しい……

「ん？」

「いえ……やっておきます……」

「本当にごめんね。帰ってきたらお昼ご飯おごるからさ」

奥さんは私の頭を優しくポンと叩いて「それじゃお願いね」と言い、足早に店を出て行った。

お店のドアを開けた時のピンポンピンポーンという音が悲しく響

く……

「……」

私は鳥肌を立たせていた。

「安奈ちゃん」

事務所のほうから、店長の大きな声が聞こえてきた。

「安奈ちゃん？おいでよ」

「……」

体が小刻みに震える……

歯がガチガチと音を鳴らす……

「安奈ちゃん？何やってるの？」

ガタガタツと店長が乱暴に椅子から腰を上げる音が聞こえた。

「あつ……い………今いきますっ！」

私は震えを必死に押さ込み、嗚咽をかみ殺し、ゆっくりと事務所へと向かって歩き出す。

これから起こる事に対して……私は血が出るほど唇をかみ締めながら、松本さんと正美さんに心で謝罪した……

ああ……いやだいやだいやだ……

なんで？なんで私なの……？

ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……

ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……

生きるためにではなく死なないために……店長に犯される事を……

…許して松本さん…

そう、自分に言い聞かせた。

第四話：心と体

朝目覚めると8時30分だった。

これから身支度をして大学へ行かなければならないと思ったら嫌になる。

「……………」

面倒くさい……………が、浪人してまで入学した大学だ。休む訳にはいかない。

俺はノソノソと布団から這い出て、洗面台へと向かった。

うちの部屋はワンルームトイレ風呂付。洗面台はリビングから出てすぐの所にある。

あるのだが……………そのちょっとした距離を移動するのも面倒くさいと感じてしまう。

そのうち生きてるのも面倒くさく感じてしまうんじゃないかと思うと、面倒くさいながらも動かなければならない。と、少し思っ恐怖する。

……………いささか大袈裟な表現かも知れないが、実際『思ってしまった今』があるのだ。

いっとう感じるかなんて、わかったもんじゃない。

「……………くっそ……………」

小さく言葉を発し、ようやくたどり着いた洗面台の鏡を見た。

なんとも……………覇気を感じない顔が俺と目を合わせる。

「……………」

ああ……………こりゃあ本当に危ないかも知れない……………直感的にそう感じた。

青白い顔に目の下のクマ。少しこけた頬に無精髭……………

最悪の印象。まさにろくに生きていない顔だ。

「……………どういっつもりなんだ……………？ ころ……………」

俺は鏡の中の自分にそう問いかけた。

数十分かけてようやく身支度を済ませて外へ出た。冷たい空気が一斉に襲い掛かってくる。

「……」
バイクの季節はもう終わった。路面にうつすらと雪が積もっている。

一面雪景色というほどではないが、バイクに乗るという事は自殺行為。バイクは少しの積雪でもすぐにタイヤが横滑りを起こしてしまふ。すつころぶだけならまだいいのだが、そこに車にでも突っ込まれたら一貫の終わりだ。

さすがにもう無理だろう。

これが何よりも俺を憂鬱にさせる。学校へ向かうのにわざわざ電車に乗らなくてはならない。

「……どういふつもりなんだ……？ ころ……」

俺は空を見上げてそうつぶやいた。

時計を見ると8時50分。

少しのんびりしすぎたようだ。

「……」

俺は走って駅へと向かう……ような事はせず、もうすでに第一科目はサボる事に決めていた。

こつという所が俺の悪い所だとは解っているのだが、どうしてもやる気が起きない。

ああ……ここで走っていれば少しは生きる実感が湧くだろうに……なんて思いながら、ゆっくりと駅へと向かって歩を進めた。

「……」

次の電車は10時過ぎまで無い……これだから田舎は嫌になる。

俺のボロアパートから10分くらい歩いた場所に俺がアルバイトしているコンビニがある。

そこは駅までも5分くらいの距離でかなり利便性のいいコンビニだ。

「どうせ……」一時間目はサボる事にしたし……今はちょうど、安奈が働いている時間でもある。

俺はそのコンビニで立ち読みをしてから学校へと向かう事にした。

……歩いている最中、ちょっとだけ……本当にちょっとだけ、心が躍っている自分に気づいた。

思えば、安奈の働いている姿を見た事が無い。

いつもならバイクで学校へ向かっていく時間だし、何より、興味が無かった。

アイツへの興味と言ったら……顔と体……ぐらいのものか……

「……」

いいや、違うか……

安奈に興味を持たないようにわざと自分を制御していたのだろう

……

俺は、昔を恐れている。

必要以上に仲良くなり、その相手が突然消えてしまう事を恐れている……

前の彼女がそうだった。同じ大学に入ると約束したあいつの事が、少しだけトラウマになっている……

受験に失敗した俺をアイツは突然見限り、その後一切の連絡が取れなくなったのだ。

電話をしても、出ない。メールをしても、返事をよこさない。家に行っても、居留守を使われる……

……そんな疎外感を、もう感じたくは無い……だから、安奈の事も必要以上に興味を持つてはいない。持つてはいけない。

安奈が前の彼女のようにならないとは、限らない。安奈は元々根無し草。野良犬……前の彼女以上に危険な存在のような気がする……

「寂しいだろう……それは」

ボツリと、独り言をもらした。

「安奈と仲良くしようか」

今呟いた事は、何度も思い返していた事。

感情を制御してきてはいたが、安奈とはもう一年近く一緒に暮らしている。

少しだけ、安奈が俺の生きがいになってきているようだ。

大袈裟ではなく……安奈が居なかったら、もしかしたらもう俺はこの世に居なかったのかも知れない。

……今更なんて思わず、ちょっとだけ、勇気を持ってみようか。

第五話：感情と、理性

「……なんとか言えよ……」

時計を見てみる。時刻は10時を過ぎたあたりだった。

「何キヨロキヨロしてるんだ」

そういえば洗面台の電球が切れている。あとで取り替えておかなきゃ。

……あ、冷蔵庫の中に食べ物残ったかな……買出し……松本さん
ついてきてくれるかな……

「ねえ松本さん」

「んだよ」

「あとで面白い物行きたいんだけど」

「ああっ!？」

ビクツと私の体がすくみあがった……まさかここまで怒るなんて

……

そんなに私と歩く事が嫌なのか……それもこれも私の外見のせい
なんだろう……私は異形の人間だ。

「あ……いえ……すみません」

「チツ」

あ……また舌打ちされた……

やっぱりダメだなあ私って。

少しわがままなのかも知れない。気をつけないとアパート追い出
されちゃう。

「お前、俺の言った事聞いてたか？」

「……」

聞いてたよ……

「お前と、店長は、いつからあんな仲になったんだよ。なあ、大声
出させるな。わかるな？」

……

あ、いけない、洗濯しないと着る服がなくなっちゃう。

私は腰を上げて急いで洗濯機のところまでかけていった。

「洗濯しなきゃいけないよね。洗濯するね」

「……っ！ あんなあああつつっ！！」

松本さんは鬼のような形相で私を追いかけてきて、思いつき私の両肩を掴んだ。

ビリビリと、私の肩に痛みが走る。

「いた……痛いよ松本さん」

痛みを与えるのはやめて。痛いのは嫌いなんだから……

「安奈……お前……」

「……？」

「お前おかしいよ……」

「……」

「……しつかりしろよ……安奈……」

松本さんがまっすぐな目で、私を見つめる……

松本さんがうつすら涙を溜めて私の顔を見つめる……

だめだ……やめてそんな目をしないで……

考えたくない……認めたくない……信じたくない……

問い詰めるのはやめてやめてやめてやめて狂う狂ってしまう……

放棄させて……思考を。事実を。現実を。

ああ……ああ……引き戻さないで思い出させないでそんな目で私を見ないで……

「……グスッ……うん……グスッ……ごめん……なさい……」
松本さんの指から、力が抜けていく……

「……グスッ……ごめん……ヒクッ……ごめんね松本さん……ごめんなさいいいつつ……ううっ……ううううつつ……わあああ
んつつっ……！！」

私は、思いつきり泣いた。

松本さんの体にしがみついて、泣きじゃくった。

狂わないように、すべての想いをぶちまけるように。

松本さんが、離れていけないように。思いつきり力を込めて松本さんを引き寄せながら……

泣いた。

「わあああつつつ……！！ わあああああんつつつ……！！」

泣くという行為は、ストレス発散のためにとっても重要だと、アイツが言っていた。

だから私は泣く。私のストレス発散方法は、泣くか、狂うか。

だけど胸を貸してくれる人なんて、そうは居ない。だから私はよく狂う事になっている。

「……」

松本さんは、しがみつかれる事を拒否はしなかった。だけど決して抱き返してはくれない。

それでも私は泣き続ける。

狂わないように。狂わないように。松本さんの胸をびちゃびちゃにししながら、泣き続ける。

「……本当の事言ったら松本さん許してくれるの？」

「……いいから話せよ」

私たちはリビングに戻り、座布団なんて気の利いたものが無いので布団の上に座りながら話した。

松本さんはあぐらで座って、私は別に命令されてではなく、自主的に正座をしている。

「……」

「眼、見れよ」

見れる訳無い……

私はうつむいたまま黙り込んでしまった。

「はあ……あんな安奈」

松本さんは足を組みなおして私の顔を掴み、無理やり自分の顔を

見させた。

ああ……私にはもう、余所見をする権利すら無い。

「……」

「……俺が、怖いのか？」

え……？ 怖い……？

「俺は、お前に、暴力を振るつた事があるか？」

……無い……一度だって……無い……

「俺は無いと思っている。それなのに、何が怖い……？ 何を恐れ
ている……？」

私は……

「何が怖いのか、言ってみろ」

「私は……」

私は、一人が怖い。

一人になって、寂しくなるのが怖い。

屋根のある場所や、風を通さない壁が無くなるのも怖いけど、や
っぱり一番怖いのは、一人になること。

「私は……」

第六話：性と情

蒼黒い空から、白くおおきな粒の雪が降っている。

白い息が風に乗って遠くまで伸び、空気と混ざりあって消えていった。

本格的な冬がこの町にも訪れてきて、ほんの少しだけ憂鬱になる。

……本当に、少しだけ。

安奈に「嫌な癖」だと言われた舌打ちが出ない程度の憂鬱さだ。

「えへ…えへへ…」

安奈はにへらと笑い、俺の右隣を歩いていた。

だらしなく口を半分開き、斜め上を向きながら歩いている。頬は寒さのせいかな、ほんのりと赤い。

……いや、もしかしたら俺の右手を握っているせいなのかも知れない……なんて、少し思っただけにやけそうになった。

「……何笑ってるんだよ」

「へへ……んん……あつたかいなあ……」

安奈はそう言い、俺の右腕に両腕を絡み付けてよしかかっていた。

「お……おい……」

「えへへ……漫画とか、ドラマとかで……よくある風景じゃないですか……」

安奈は俺の眼を見る。

「私、こういう事は一生出来ないものだと思ってたんですよ」

「……」

俺と安奈はスーパーへと買出しに出かける途中であった。

スーパーまでは歩いて20分ほどかかる。普段ならそんな雑用はすべて安奈にまかせている。

一緒に買い物なんて、一年前安奈の普段着を買いに行ったきりだった。

それ以降、俺は買物自体あまりした事が無い。

すべて、安奈にまかせていた。

「ひそかに、あこがれてました」

安奈はニコツと笑い、腕をぶんぶんと前後に揺らし、スキップをする。

……その姿は、本当にただの、14歳の少女だった。

「よく考えたらよ、お前って俺の5歳年下なんだよな」

「そうですねえ、まあ5年なんてすぐですよ。すぐに追い抜いてみせます」

「……馬鹿か」

「あはは、冗談ですって、冗談」

安奈は野良になってから3年間、屋根も壁も無い場所で過ごしていたらしい。

年端もいかぬ少女が、3年間野良で生きていくという事は、どういうものだったのか……

安奈は頑なにその時の話をしつたがらない。俺もその話を無理に聞き出す事はしなかった。

せつかく閉じかけてきた傷口をわざわざ開くような事なんだから

……俺にはもう聞けない。

ただ、想像はしてしまう。

おそらく……残飯を食らい、公園で寝泊りし、人目を避けて、運命を呪いながら生きてきたのだろう。

寒い日も暑い日も、耐えて……耐えて……

普通に過ごしている人間を疎ましく思い……

心が汚れ、世の中を憎み……

誰も信用できずに、一人、もがき続けていた……

今笑顔で居られる事が奇跡のような、そんな人生を歩んできたに違いない。

……いや、これでもまだ考えが甘い。

おそらく安奈は、不特定多数の男に抱かれている。

安奈は幸か不幸か、美人だ。

安奈は……それを利用していたに違いない……
利用しない、訳が無い。

俺と安奈が最初に結ばれたのだって……安奈から誘ってきたのだ

……

……俺を性で、繋ぎとめていた。

「……？ 松本さん？」

安奈はいつの間にか俺の顔に自分の顔を近づけていた。俺の顔を覗き込んでいる。

俺は少しびっくりして顔を遠ざけた。

「あ……なんだ……？」

「何か考え事してました？」

「いや、なんでもない」

「嘘だあ。だって難しい顔してたもん」

「……」

「ね？ね？何考えてたんですか？」

俺は後ろを振り返った。

そこには、新しく出来たばかりの足跡が、ふたつ平行に並んで続いている。

「……さて……な……秘密だ……」

第七話：混沌と、光明

「ねえ松本さん、何が食べたい？」

私は松本さんの右隣に居る。

「何か、作れるものあるのか？」

「ん〜……料理はあんまり……した事ないなあ」

「……出来るもんでいいよ」

私と松本さんはアパートから歩いて20分の場所にあるスーパーへとやってきていた。

このスーパーには良く一人で来ている。というより、近所と呼べる場所でスーパーはこのお店以外には無い。

いつも一人でやってきて、大体3日ぶんの食料であるお惣菜と冷凍食品を買っていき、いつも一人で帰っていた。

いつも、いつも、一人だった……けど、今日は違う。私の左は、暖かい。

「……いつも、ごめんねえ……安売りのお惣菜と冷凍食品ばかりだったよね」

この機会に料理でも始めようか……と私は思う。

「……よし、今日はお鍋にしません？栄養いっぱいだし、暖かくなるし」

私はキムチ鍋セットの前で立ち止まる。

キムチ鍋に必要な材料すべてが揃っていて小型のお鍋もついてきて2000円ちょっと。少々高い気もするが、カップラーメンを作るためのヤカンしかあのアパートには調理器具と呼べるものは置いていない。これくらい増えても邪魔になる事は無いだろう。

「そうだな、作るのも簡単そうだな」

「んじゃ、今日はお鍋ね」

私はキムチ鍋セットを持ち上げようと力を込めたが、これがなか

なか重たい……

私の腕はお世辞にも太いとはいえない……むしろ虚弱を絵に描いたような腕をしている。

今までの買い物だって、この鍋セットよりはるかに軽い荷物なのにいつもヒイヒイ言いながら荷物を運んでいた事を思い出した。

「お……重……」

「……いいよ、持つ」

松本さんはそう言い、左手に持っていたカゴを私に預け、キムチ鍋セットを軽々と持ち上げた。

「なんだ、言うほど重くないな」

「……そうなんだ。あはは、なんかすみません」

「謝る癖は、直らないんだな」

「……あはは」

そう言われて、私は苦笑いを浮かべた。

そういえば、今日でちょうど一週間……

私と松本さんが喧嘩して、ちょうど一週間。

私と店長の……行為を……松本さんに目撃されて、ちょうど一週間経った。

その時の私は、謝ってばかりだった気がする。

私は松本さんに、すべて打ち明けた。

店長には、松本さんと関係を持つより前から、抱かれていた事。

それは店内に正美さんが居ない時限定で、月に1、2回だったという事。

はじめは働く条件として、その後はすべて脅されて……仕方なく抱かれていた事。

私が松本さんを誘ったのは、もちろんあのアパートに居つくためでもあったけど、一番の理由は、浄化して欲しかったから……罪滅ぼしの意味もあった、という事。

……どうせ私の心は汚れている。いろいろな色を合わせた、混沌に、真っ黒に。

だから最初は店長に抱かれるのも、実はそんなに抵抗は無かった。むしろ「当然」だと思っていた部分もあった。

だけど……松本さんとの生活は、私の心を少しずつ綺麗にしていたようだ。

店長に抱かれるのが、この上なく嫌になっていつてる自分に気が付いた。

店長に抱かれてる時は「汚されてる」と感じるようになり、松本さんに抱かれてる時は「浄化されている」と感じるようになっていた。

そのすべてを、打ち明けた。

松本さんはこんな話を聞かされているにもかかわらず、声を荒げるような事はせずと「うん……」と「それで……？」とだけ言っていた。私はその素っ気無さから「ああ、私は捨てられる」と思っ、話の節々で泣いていた。

だけど松本さんの判断は「しばらく大学は休む」という事と「しばらく家から出ないで安奈と一緒に居る」というものだった…

私は、謝りながら大泣きした。

「もう、あんまり謝るな」

松本さんは、少しだけ頬を赤くして「次、いくぞ」と言って歩を進める。

私は満面の笑顔を作って「うん。やさしい、松本さん」と言い、松本さんの右腕にしがみついた。

第八話：過去と、業

10ヶ月。

人が腐るのに、10ヶ月という月日は十分すぎた。

「……寒い」

今日も朝は寒かった。

12月中旬。もうすっかりと季節は冬となり、俺は少し憂鬱を感じている。

朝起きるのもだるいし、外を歩くのもだるい。

灯油を買いに行くのもだるいし、学校へ向かうのもだるい。

何もかもに、やる気が起きなかった。

もう一度布団にもぐりこんで、昼まで寝てやろうか…という気になっってしまう。

「……」

俺は隣でまだ寝ている安奈の寝顔を見つめていた。

スヤスヤと、安堵に満ちた顔で幸せそうに眠っている。

「……」

……くそ……無職はいいやな……なんて少し思っ、軽く起こさない程度にデコピンを食らわせた。

そして俺は安奈を起こさないよう、ゆっくりと静かに布団から這い出て、洗面台へと向かい、冷たい水で顔を洗い頭を起こす。

この時期の水道水は冷蔵庫の中にしまっておいたミネラルウォーター並によく冷えている。眠気なんてこれで一気に覚めてしまう。

「……」

鏡の中の自分は、少し顔色が良い。以前のように青ざめた不健康男のそれでは無くなっていた。

少しは……生き返ってきた。という事だろうか。

このアパートはワンルームトイレ風呂付。ワンルームなのでリビングは寝室もキッチンも兼用。

着替えをするためにはまたリビングに行き、眠っている安奈に気を使いながら静かに着替えなければならぬ。

以前までなら別段気にかけず、安奈が眠っているようが関係なく、遅刻しそうな時は特にドタバタとあわただしく準備をしていた。

そのたびに安奈は「うん……」と言いながら起き上がり「あ……」

「……ごめん……」と意味不明な言葉を発する。

そして俺は「……掃除と洗濯」とだけ言って部屋を後にしていた。

「……」

以前、毎週火曜日と金曜日、安奈は早出のバイトに行っていた。

その時安奈は、俺を起こさないよう、気を使いながら着替えをし、ゆっくりと玄関の開け閉めをしていたはずである。俺は安奈が支度をする音で目覚めた事は一度も無い。

「……」

……やっぱり前の俺は、腐っていたらしい。

俺は物音で安奈を起こさないために、リビングを出て廊下で着替えをする。暖房の無い廊下の床は靴下を履いていない足にはかなり堪える。

冷たいというより、むしろ痛い。俺はまず靴下から履く事にした。

着替えが終わり、ふと時計を覗き込む。

まだ7時50分……電車が来るまであと1時間ある。

いつもならテレビでもつけてニュースを見る所だが……

「……」

俺はもう一度リビングへ戻り、安奈を起こさないよう、ゆっくり

と静かに、眠っている安奈の隣に座った。

相変わらず、ぐっすりと幸せそうに眠っている。

……幸せそうに、眠っている。

……何故、幸せそうに眠れるのだろうか……俺は、こんな奴なのに

俺と一緒に居る事が、安奈にとって、何故浄化に繋がるのか…

俺なんかよりマシな人間は山ほど居るだろう……それなのに安奈は、俺と一緒に居ると、俺に抱かれると、浄化されて行く、と言う。

「……………」

よっぽど、飢えていたんだろう……そして、汚れていたのだろう

……

こんな小さな体で、俺なんかの想像を遥かに超えた業を、過去を、背負っている。

俺は特に深く考えず、安奈を抱いてきた。

正直、俺は安奈の事を『いつでも抱けてこの上なく便利なストレス発散のためのはけ口』としか思っていなかった……最近良く聞くナントカフレンドというものか思っていなかった……

「……最っ低の、クズ野郎が……」

自分で自分に毒づいた。

第九話：毒と、自分

眼が覚めると、松本さんが隣に座りながら私の顔をじつと見つめていた。

「……ん……あれ……松本さん……」

起きたばかりのボーっとした頭のまま、なんとなく時計を見てみる。

だけどその時計を見てびっくりしてガバツと飛び起きた。もう午前10時を回っている。

「あ……ちよつと松本さん??何やってるの早く学校いかなきゃ!」

松本さんは今日からまた大学へと通うと言っていたのだ。たしか今日は午前中から授業のある日。もう遅刻は確定である。

それでもやつぱりせつかく入った大学、単位が足りなくて留年や中退は私もして欲しくない。今からでも出席して欲しい。

「もお……着替えて準備できてるのに、なんで行かなかったの?今からでも向かってください」

「嫌」

「い……嫌とかじゃ……なくて……え……つと……」

松本さんの眼はすごく穏やかな目をしていて、私はつい言葉を詰まらせた。

「こんな松本さんの眼は、見たことが無い……」

「……なんだ?」

松本さんは少し首をかしげてうつすらと笑みをこぼす。

私は次に言おうと思っていた言葉がうまく口から出てこず、モニモニヨゴニヨゴニヨになってしまっていた。

「……あ……う……そ……そんな眼しないでよう……」

「ん……?今の俺はどんな眼をしているんだ?」

「……う……」

凜とした態度の松本さんを見ているとなんだか私のほうが浮いて

いるような感じがしてきて 急に恥ずかしくなり、うつむきながら枕をギュツと抱きしめた。

その行為を見て松本さんは小さく「はは」と笑っている……

「……なんで行かなかったんですか……？」

「なんで……って言われてもな……」

松本さんは腕を頭の後ろで組み、壁へともたれかかった。

それでもけつして、視線は私をはずしはしない。

「……正直に言ったら、お前はきつと笑う」

「え……？ じゃあ笑わせてくださいよ」

私は冗談を言う松本さんを見た事が無い。おそらくは本当に笑える理由なんだろう。

着替えてから二度寝してしまったとか、もしくは一回は学校に行ったが休講になっていている事に着いてから解っただとか。

松本さんは「……はは……」と小さく笑った後、咳払いをひとつした。

「……お前に、見惚れていた……って所かな」

「……ん？」

「……ん？」

「……お前って、美しいよな」

「……え……？」

「……お前は、俺の知るモノの中で一番美しいよ」

「……あははははっ」

私は笑った。

というか、笑う事しか出来なかった。

だけど多分顔は笑っていなかったと思う……

「ほら笑った」

「何を急に言うんですか松本さん。どうかしちゃったんですか？」

松本さんは今日始めて私から視線をそらし、布団の上にゴロンと転がった。

「いいよ別に信じなくても。信じてほしいなんて思っていない」

松本さんは笑顔のまま眼を閉じ、自分の腕を枕にしながら黙り込んだ。

こんな松本さんは、一年間同じ屋根の下で暮らしているのに初めてみる。

「……別に信じないって訳じゃなくて……なんていうかその……信じないんじゃないって、信じられないっていうのかな……」

「冗談に聞こえるか？」

「ん……冗談っていうか……」

なんだかものすごくやりにくい……

私はこれまで松本さんに褒められた事なんて一度も無い。

それなのに松本さんは急に私をベタ褒めしてきた……

「冗談っぽく言ってくれればまだ良かったのに、松本さんは真顔で私を『美しい』と……」

意図がわからない。松本さんは本当にそんな理由で大学をサボったのだろうか。

「ねえ松本さん、なんで、私なんかに見惚れてたの……？」

「なんでって……さっきも言っただろ」

私が美しいから……

「……なんで、私が美しいの？」

「……俺とは正反对だから」

「正反对……？」

松本さんはいつの間にか、涙を両目から流している……

私はそれを見て、ものすごくビクリした。

「ま……松本さん……??」

松本さんは「はは」と笑い、続けた。

「俺は……醜いよ……ろくに生きてなかったし、怠惰の塊だし、腐ってた……」

「え……? あ……いや、そんな事無いよ」

「……お前の評価はそうかも知れないけど、自分で自分を見つめなおした結果、そう思っただ……」

「……………」

私はこれ以上言葉を発せられなかった。

自分の中で自己完結されたら、もう他人は何も言う事が出来ない

……

「それに比べてお前は、偉いよ。生きるために、必死になって……

あ、違うか。死なないために必死になってた……だったな」

「……………」

松本さんは続ける。

「それに比べて俺は別に……いつ死んでもかまわないとさえ思ってた……だから無頼に振舞って好き勝手やってきた……あまつさえ、お前をどれだけ汚そうとも……かまわないと思ってた」

……

「こんなに……うつ……美しい……のに……俺は……」

松本さんは、泣いている……

「俺には……もう……お前を汚せないよ……」

……………

よごしてなんか、いない……

なんで、口に出ないんだろう……

第九話：毒と、自分（後書き）

ここまでがこのお話のプロローグ的なお話です。お楽しみいただけ
たでしょうか？

さて、プロローグを終えた段階でとりあえずのあとがきを書いてみ
ます。お時間があればお付き合いくださいませ。

他人を見て、自分がどれだけちっぽけで、どれだけ無知で、どれだ
け恥ずかしい存在だったのかを思い知った事がありますか？

自分は、あります。

…この小説の主人公の一人「松本」のこれまでは、自分の投影とも
言える人物です。

ものすごく卑屈で、卑怯で、最低…これは、少し前の自分そのもの。

この小説の主人公である松本は、他人に興味を持てないでいました。
言うなら、人を砂のように感じています。

他人に対して『うざい…邪魔…消えろ…』そんな風に感じて同居し
ている安奈に対しては『利用』これに尽きました。

…自分にも、これは経験あります。

形は違えども、同じように感じて居ました。

…異常であり異質です。普通の人には理解できない感情かも知れま
せん。

自分の場合はれっきとした彼女だったのですが、自分は彼女の事が
好きではありませんでした。…言うならば「いつでも抱ける、都合
の良い女」のように思っていました…

「好きだ」と言ったのは嘘…それは自分が寂しくならなかったために

いた嘘…

居なくなったら、寂しい。一人は、嫌。だけど、どうしても、好きに、なれない…

…でもやっぱり、思い知るものです。自分は、なんて、最低なんだ、と。

…このお話の主人公である松本。ここまでは、自分のその経験に基づいて書かれているキャラクターです。もちろん自分とは経歴は全然違うしシチュエーションも全然違います。価値観も感受性も自分とは多少変えています。

ですが、ここまでは本当にあったようなお話です。この後です。自分の本当の創作は。

つたない自分ではありますが、この作品を最後まで見守ってくださいますよう、お願い申し上げます。

最後まで、目を、そむけないでいてください。

第十話：幸せの値段

昨日、松本さんは言っていた。

「もう俺はお前を抱かない。もうお前を汚したくない」

よごしてなんか、いない……

松本さんは、私をよごしてなんか……

松本さんはそれから何も語らず、私も何も言う事が出来ず、静寂が5分くらい続いたあと松本さんは思い出したかのように「行ってくる」とだけつぶやき、部屋をあとにした。

私は小さく「……行かないで……」とこぼしたが、それは松本さんの耳にはきつと届いていない。

松本さんは昨日、夜中まで帰ってこなかったらしい。

私は睡魔に負け、松本さんが帰ってくるまで起きていられないでいた。

私は次の日の朝の8時に目が覚め、慌てて松本さんの姿を確認したのだが……

そこには松本さんの姿は無く、まだぬくもりが残っている寝巻きが折りたたまれて置いてあって、その上に「買い物に行っておいてくれ」という意味なのだろう、5000円札が置いてあった。

帰ってきていた事に対して安心したと同時に、どうしてその時に起こしてくれなかったのかと、悲しくなった……

「……」

私はその後部屋の掃除をし、軽く食事をした後、特にやることが見つからず、一人で本屋さんへ来ていた。

昼間の本屋さんというのは本当に人が居ない。暇そうな大学生らしき風貌のグループが静かに立ち読みしている以外、お客さんはいない。

私は一通り店内をプラプラ歩いた後、思い出したかのように求人

情報誌の置いてある本棚へと向かった。

以前は日中アルバイトをしていたのだが、もうそのバイト先へ行く事はおそらく無い。

もう無いのだから、私は別の働く場所を探さなければならなかった。

「……………」

お仕事探さなきゃなあ……………でも私ってまだ14歳だし普通だったらどこも雇ってもらえない……………」

これは朝から数十回と繰り返し思い悩んでいた事だった。

以前のバイト先は運良く松本さんのコネで同じ職場で働かせてもらえたが、次を探すとなったらそうはいかない。

並大抵の事では私のような「この世に存在しているはずの無い存在」を雇ってくれる所なんてあるわけが無い。

ましてや……………私のような異形の人間なんて……………」

「はあ……………」

それでも私は求人情報誌を舐めるように見続けていた。

何回も何回も同じ場所を見返して、ため息をつく。

「やつぱ、無いなあ……………」

私は求人雑誌を本棚へと戻した。

「お金……………かあ」

お金というのは、こんなにも手に入り図らいものなのか……………」

今まで……………少しだけ舐めていた……………手に入れたと思ったたらずぐに手に入った。

「お金……………かあ」

私は同じ言葉を繰り返しつつばやいていた。

これ以上松本さんに迷惑はかけられないし、なんとかしなければならぬ。

……………身売りは、もう二度としたくない。だから、新聞配達でもなんでもして、働かなきゃ……………」

私はそう決意し、何も買わないまま本屋さんを後にした。

外に出てすぐにビュウという冷たい突風が私を包む。

あまりの冷たさにビックリし、思わず異形の耳をピクピクと動かしてしまった。

「あ……いけない……」

そう、この耳は動かしてはいけない。

この耳は、あくまでニット帽についている耳。付属品。アクセサリーみたいなもの。

私は帽子を直しながら、誰かに見られていないかあたりを見回した。

「……」

……バス停で、バスを待っているであろう若い女性がひとり、私を見ている……

30メートルくらいは離れているだろうから、微妙に動いただけのこの耳には気づいていないはず……だと思っ……

気づいてないはず、気づいてないはず。

……それなのにその人は、私のほうを見続けながら、少しずつ近づいて来ていた。

「……来ないで」

私は異形の耳を両手で隠しながら、駆け出していた。走りながら呟いた。

「松本さん……会いたいよ……」

第十一話：幸せの価値

「別に、気にするなよ」

俺はしんみりしている安奈に向かってそういった。

安奈はどうやら生活費のことについて悩んでいる。

俺に言わせると、元々安奈にアルバイトをさせて生活費を入れてもらおうなんて考えていなかった。

「でも……生活費とか大丈夫なの？」

俺は「ふう」と安奈の顔を見てため息をつく。

「……あのな、俺とお前毎日バイトしてたんだぞ。俺とお前合わせで一日15時間。それこそ日曜日も祭日も」

「うん」

「正直に言つて、かなりあまっている。俺は贅沢しなかったし、前は半額になつてゐる惣菜ばかり買つてきていた。家賃だって安い。増えていく一方だったよ」

安奈はキョトンとして「え？ そうなの？」といった。

「預金みたら多分ビビるよお前」

「はあ……そうなんだ……」

そう言つて安奈は正座の姿勢からようやく足をくずす。

そう、俺の口座には現在130万以上の現金が入っている。

二人分のバイトの給料、そして親からの仕送りを合わせて月に35万近くの現金を手に入れていた。それなのに俺たちは一ヶ月の生活費を10万以内で抑えている。

別段欲しいものも無かつたし、安奈も何かが欲しいとは言わなかった。

洗濯機は買ったが、そのほかに高い買い物は一切していない。

金は、どんどん溜まっていっていった。

「うひゃあ!？」

安奈は通帳を見て度肝を抜いていた。

「な?ビビッたる?」

「いちじゅうひゃくせんまん…じゅうまん…ひゃくまん…」

「はは」

「そっか…ちよつと安心したな」

そう言っ て安奈は通帳をパタンと閉じてテーブルに置いた。

そしてなにやら難しい顔をしながら腕を組んで考え事をしている。

「でも松本さん、どうしてアルバイトしてたの？」

「生活費のためではあつたけど……息抜きの意味もあつたかな」

「……ふうん」

本当に、それだけの理由だ。

浪人時代から俺はこのアパートに住んでいる。実家に居ても家族の目が痛い。

それと友人や当時付き合っていた彼女は皆大学生や社会人になつて地方へへ行つてしまい、地元に住てもなんの意味もなくなつてしまった事をきっかけに俺は一人暮らしを始めた。

親からの仕送りだけでも十分やつていけるような生活を送つていたのだが……

やはり、閉鎖された空間は人を駄目にしてしまう。

俺は寂しさや悔しさでとことん腐つていった。

そこでたまたまコンビニで買い物をしていた時、俺はアルバイト募集のチラシが店頭に張られていたのを眼にし、気晴らし程度に始めたのがきっかけである。

本当に、たいした理由は無い。

「……まあ、なんだ」

俺は口を開く。

「……今まで、悪かつたな」

「ん……?何がですか?」

「お前が働く事に対して意味はそれほどに無かった……確かに『働きたい』と自主的にお前が言ってきた事ではあったんだが」

安奈は俺の言いたい事がわかったらしく、少し暗い顔をした。

「……止めておけば、良かったな」

「えへへ……馬鹿だったなあ私」

安奈はそう言っただけによりかかってくる。

「でも……もう、いいの」

安奈の手が俺の腰に回り抱き寄せる力を感じた。

俺はそれを感じながら安奈の異形の耳をなでる。

安奈は嬉しそうに耳をピクピクと動かし、「えへへ」と笑った。

「へへ……もういいんだ……私、こうしていられば幸せだから」

「……」

「それに……あの出来事が無きや……今頃私……寂しくて死んでた。

こんな事、絶対出来なかったもん」

安奈はぺろつと舌を出して、微笑を浮かべる。

俺も、きつと、微笑んでいるんだろう……

チラッと窓を見ると、外は大粒の雪が降っている。

……本当に、安奈と出会って一年が過ぎようとしていた……

「あ、そういえば」

安奈は思い出したように口を開いた。

「松本さんは……私の耳と尻尾……どう思ってますか……？」

第十二話：幸せの形

「ふんふんふん」

私は鼻歌をうたいながら料理の本を片手にキッチンに立っていた。今日は12月24日。つまりクリスマスイブ。

いつもどおりのお惣菜を買ってきていつもどおりの夜にはしたくない。

今日は初めて本格的な料理に挑戦しようと思っていた。

ケーキはさすがに買ってきただけ……夕食はせめて私の手料理を松本さんに食べてもらいたい。そう思うと俄然やる気が出てくる。

「喜んでくれるかな」

私は躍る心を声に出して言ってみた。

もうひとつ……心が躍る理由がある。

今日は聖夜。つまり日本ではカップルのための夜。

プレゼントを貰ったりあげたり。人目を気にせずイチャついたり。

私は今夜の事を思うと、自然に顔がにやけてしまう。

松本さんは朝から今年最後の授業を受けに大学へ向かった。たしか今日は午後になってすぐに帰ってくる予定。

帰ってきたら……松本さんにいっぱい甘えよう……

そういえば、後二週間後か……私と松本さんが最初に出会って一年が経つのは。

私は炊飯器にお米をセットしボタンを押して一息つく。

私と松本さんの出会い……それは真冬の白い奇跡……なんて言うのはちよつと大袈裟だけど、私にとっては本当に、人生の変わった瞬間だった。

あれは真冬の寒空の下。雪は静かに降り積もり、私の履いていた

ブーツよりも積雪が高くなっていた。

当時この土地に来てまだ間もなかったので頼れる人もおらず、移動費や今までの宿泊費などでお金も底をついていた。

私はその日の寝床が見つからず、私を買ってくれる客も見つからず、仕方ないのでこの日は公園の屋根のついているベンチで夜を明かす事にしたのだ。

持っていたカバンを枕代わりにし、公園のベンチに横になる。膝を折ってお腹を冷やさないよう丸くなる。

さて寝ようかと思ったその時、おなかの虫がグウと鳴る。思い返すと丸一日何も食べていない事に気が着いた。

面倒くさいけど……死なないために、何かを食べなければならぬ。

私は少ない荷物を持って、この公園から最寄のコンビニへと向かう事にした。

コンビニというのは、賞味期限の切れた食べ物を惜しげもなく捨ててしまう。そしてコンビニはゴミ収集業者と個人で契約してゴミを出している場合が多い。

どうせ捨ててしまう食べ物だ……私が貰っても誰も困らないだろう。という、勝手な理論を自分の中に打ち立てていた。

死なないため死なないため。と、心の中で誰に言うでもない言い訳しながらコンビニへと歩を進める。

数分後、コンビニの隣にあるゴミ捨て場へたどり着き、「さあてと……」と意気込みの言葉を呟きながらさっそくゴミの山を漁り始めた。死なないため死なないため。と心の中で言い訳をしながら。あまり人に見られたくはない姿だし……早々に立ち去りたいのだが……。

しかしそこには漁れども漁れども食べ物らしきものは見つからな

かった。

「もう……」

せっかく来たのに……

私はそこから移動するのも面倒くさくなり、なによりも空腹感より眠気のほうが強くなってきたので臭いけれど屋根があるのでここで朝まで待つ事にした。

壁があるぶん公園のベンチよりはマシだろう……と自分を納得させる。

私は少しでも体を温めようと膝を抱えて自分の体どうしを密着させてゴミ捨て場のすみっこで座っていた。

一時間くらいその状態だっただろうか……私の頭は眠気でボーっとしており意識はうすれかけていたのだが……

突然「わっ……」という男の人の小さな驚きが聞こえてきた。

それが、松本さんだった。あの時の驚いた表情の松本さんの顔は今でもしっかり思い出せる。

だって、驚きの顔をしたあとすぐに、目は汚いものを見るような冷たいを通り越した冷たい目に変わったから……たまに思い出して、寂しくなる。

……しかしなんというか……思い出してみても、本当にたいした出会いでは無かった。

白い奇跡は言い過ぎた……むしろゴミ臭い出会い……最悪の印象

……

でも、それから私は松本さんの厄介になっている。最初はお風呂だけ貸してもらった予定だったのだが、それからなんだかなし崩的に松本さんのアパートに居座ってしまった。

「感謝しても、しきれないなあ」

私は声に出して言ってみた。

今日はクリスマスイブ。今夜は聖夜。
私は初めての料理で松本さんを喜ばせたい。
そう思うと、俄然やる気が沸いてくる。

第十三話：幸せな過去

今年最後の講義を終え、俺は一息つきながら出口に殺到する人ごみを眺めていた。

相変わらず、見ているだけでいい気がしない。

何故そんなに競って教室から出て行こうとするのだろうか。一体何をそんなに急いでいるのか。

俺には理解できない。

今日がクリスマススイブだからとか、そんなの関係なくこいつらはいつもこんな感じだ。

俺はひとつ「ふう」とため息をついて、ゆっくりと教材を片付け始めた。

そういえば、一ヶ月ほどの冬休みのあと、すぐに試験が待っている。

勉強は別に嫌いではないが、自分はそんなに頭が良い方ではない。それにこの前初めて一週間も大学をサボってしまった……

進級できるか、かなり不安だ……

俺は教室を出てからすぐに英語の教材を取り出し、読みながら駅へと向かう事にした。

そう、勉強は嫌いじゃない。覚える事が苦手なだけ。

俺がブツブツと英単語をつぶやきながら駅への道を歩いていると、ふいに後ろから「えい いちゃん」という大きな声で俺は昔の愛称で呼ばれた。

後ろを振り返ってみると……高校時代、俺の彼女だった彩子が大きく手を振りながらかけよってきていた。その後ろには彩子の友達らしき連中が3人いて、何やらボソボソと会話している。

「ねえ いちゃん、一人で帰るの？」

彩子は息を整えながら俺の顔を見上げる。彩子の身長は147センチしかない。

「……ああ」

「あ、じゃあさ、私たちと一緒に帰らない？　っていうか、一緒に遊ぼうよ。そうだ、えいちゃん友達とかも呼んでカラオケにでもいかない？」

……俺は、この女のこういう所が嫌いだ。

いつも勝手に予定を立て、俺の予定の事は何も考えず振り回す。自分勝手に我侭で、思い通りにならない事があつたらすぐにふてくされる……

本当に、今でも嫌気が差す……

「……いや、いい」

「えゝ？？　なんでさゝ？　いいじゃん今日ぐらい。お互い一人ものじゃないのっ」

彩子は「あはははは」とド派手に笑いながら俺の背中をバンバンと叩く……

「あの子らもさ、今日の予定無いんだって」と言いながら彩子は親指で後ろの友達連中を指し「助けると思ってさ、友達誘って合コンしようよ。ね？」と続ける。

よく、こんな奴と付き合っていたな……と思いながら俺は冷めた眼で彩子を見つめた。

「……あゝ、今もしかして怒ってる？　凶星つかれて怒ってる？」

……俺の顔に、気安く指を指すんじゃないねえ……

「……別に」

「なんだよゝ、えいちゃんなんか暗くなつたねゝ。昔はこんな時喜んでオツケーしてくれたのに」

俺は時間の無駄だと感じ、無言のまま英語の教材に眼を移し、彩子のもとを去ろうとする。

しかし彩子は俺の腕をひっぱり、引き止めた。

「はなさないぞゝこらゝ」

何か嫌な事があつた時、俺は耳の後ろをぱりぱりと掻く。

この行為は『爆発しそうなイライラを抑えてくれて冷静になれる』と、小学校の頃に読んだおまじないの本に書いてあった。

俺は小学校の頃遊び半分で行っていたこの行為が、今や癖となっている。

俺は、耳の後ろを掻いた。

「……しつこいぞ」

「暗いえいちゃんをこのまま帰してなるものか！ 私たちと遊んで昔のえいちゃんに戻してやる」

彩子は、ぐいぐいと引つ張る……

ああ……早く諦めてふてくされてくれ……

「なんなんだお前……俺とお前はもう」

「うるさあいなあっ！ そんなの関係ないじゃない。私たち友達でしょ？ 困ってるんだから助けてよ」

俺は耳の後ろを……血がにじみ出るほどに、爪で突き刺した……
「うるせえのは……オメエだ……」

小さく、歯を食いしばりながら聞こえないようにこぼした。

第十四話：幸せな気持ち

「……えのは……だ……」

えいちゃんは何かを小さくつぶやいた。

その声は低く、とても棘のある印象……

なにやら様子がおかしい。本当に怒っているのかも知れない。

私はハッとなって掴んでいた腕を放した。

「……ねええいちゃん、怒ってるの？」

我ながら思う……なんてナンセンスな質問だろう、と。

怒っていない訳が無い。だって様子が変だもの。

「……」

えいちゃんは私のほうをととても怖い目でギロリと睨み、「チッ」

と小さく舌打ちをした後、何故か慌てて手で口を覆う。

そして着ていたコートのヨレを直し、再び英語の教科書に目をむけゆっくりと無言で歩き出した。

「なっ……なによっ……！　せつかく誘ってあげてるのに……！」

えいちゃんは、私を追ってこの大学に入ってきたんじゃないの？
せつかく……せつかくまた一緒の学校になれたのに。

そりゃ……私は大学に入ってからえいちゃんをないがしろにした

……

そればかりかサークルで知り合った大学の先輩と浮気し、えいちゃんには連絡を取れなくなり、自然消滅の形で破局した。

それでもえいちゃんはこの大学に来たじゃない。それは私がまだ好きだからじゃないの……？

私はえいちゃんがこの大学に入学してきたって聞いて、すぐに先輩とは別れたんだよ？

おっかない人だったけど、勇気を出して別れを告げたんだよ？

私はこの機会に、よりを戻しても良いって思ってるんだよ？

そのために、必要以上にえいちゃんに馴れ馴れしくしてたんだよ。ウザがられてるのは解ってたけど、いつかまた私になびいてくれるって思ってた。

なんで、それが解らないの？なんで、もう私を見てくれないの？

「……っ！！ ば……かつっ！！」

私は小さくなっていくえいちゃんの背中に向かって大声で叫んだ。

「ねえ彩子、栄太くんいつちゃうよ？」

かけよってきた友人の一人が話しかけてくる。

「せっかく彩子が誘ってるのに。断ってきたの？」

もう一人の友人も話しかけてきた。

そうだよ、断られたよ……

「あゝああ。また今年も一人のクリスマスかあ」

うるさいなあ……そんな事知らないよ。

「私なんか19年間ずっと家族とのクリスマスだよ。あはははは」

うるさいなあ……どうだっていいよそんな事。

「彩子はいいいねゝ、可愛いし、今まで寂しいクリスマスなんて過ごした事無いんじゃない？」

うるさい……お前に関係無いだろ……

「まあまあ。断られたものは仕方ないよ。今年は私ら4人で」

「……はあ！？ 何言ってるの？」

私は声を荒げた。

3人ともびつくりし、キョトンとした目で私を見ている。

私は3人の顔をそれぞれ睨みつけた。

……この3人の顔を見ているだけで、ふつふつと、怒りがこみ上げる……

「私が……なんであんならなんかと……クリスマスを過ごさなきゃいけないの……？ ばっかじゃない？」

「ちょ……ちょっと彩子、どうしたの??」

友人は私の肩をそつと掴む。だけど私はその手を振り払い、再び大声をあげた。

「汚らしい手で私に触れないでっ！！ 私まで汚らしくなっちゃうじゃない！！」

私は埃をはらうように触れられた肩をパンパンと叩いて「もう二度と、話しかけないで」と言い、三人の顔をそれぞれ睨む。

さすがにこれ以上この三人も言葉を発する事は出来なくなったらしく、うつむきながら黙り込んだ。

私はそれを横目で確認し、えいちゃんの後を追うようにして走り出した。

悔しい……なんでこの私があんな扱いをされなきゃいけないの……？

えいちゃんは、昔は私の言う事は何でも聞いてくれた。

えいちゃんは、昔は私の言う事はなんでも賛同してくれた。

えいちゃんは、昔はものすごく明るくていつも私を楽しませてくれた。

……なんであんなになっちゃったの？

悔しい……

……悔しい……

……悔しい……って……

どれだけ心の中を模索してみても、私の心には今「悔しい」以外の感情が無かった……

悔しい、だけ。

「はっ……はっ……あはは……」

よく考えたら、私は人を本気で好きになった事なんて……

「あはは……あははははは」

それでも私は走り続けた。

どうせ悔しいしか無いのならとことんぶつけてやれ……と、黒い感情が私を包み込む。

「あはは……あは……は……」
えいちゃんの後姿が見えてきた。

第十五話：幸せのため

高校2年生の8月だったか……このうざったい女と付き合う事になったのは。

付き合い始める前まではただの仲の良いグループ内の一人でしかなかったのだが、いつの間にか俺と彩子の有りもしない噂が流れるようになっていたのだ。

その時は……嫌な気はしなかった。

詳しく彩子の性格を知っている訳でも無かったし……いや、知っ
ていても付き合っていただろうな。彩子は明るくて元気で美人だ。
優しくは無いしぶっきらぼうだが、クラスのマドンナのような存在
でもあった。

その彩子と俺が付き合っているという噂だ。悪い気はしない。

この噂が流れてからすぐに彩子は「しょうがない、本当に付き合
うか」と言ってきて、半ば強引にだが、俺たちは付き合いだしたの
だ。

実際、俺は彩子の明るい部分に助けられたような気もしている。

根の部分が暗い俺に、いつも笑顔で接してくれていた。

友人の少なかった俺を彩子のグループに誘ってくれたのも彩子自
身だったし、予定の無い休みの日にはなんの気兼ねも無く電話で俺
をデートに誘ってくれた事も何度もある。

強引だが、我侭だが、優しいとは言いがたい性格ではあるが、そ
ういう社交性というか、こいつの持っている自然と人を引き寄せる
魅力というか……そういう部分に助けられていた。

俺の高校時代は、確かに明るかったし、楽しかった。まだ19年
しか生きては居ないが、間違いなくあの頃が一番俺は充実していた
だろう。

その反動だったのだろうか……こいつと連絡が取れなくなったら俺は腐っていった。

以前のように暗くなるだけならまだよかったのだが……俺はだんだんと自分が腐っていくのを感じていた。

安奈と出会うまでの10ヶ月間……腐蝕を繰り返し、多少の自傷もし、心を自身で汚し、自暴自棄になり、自分が、他人が、すべてが、嫌いになった。

しかしまあ……だからと言って、彩子の事は恨んじやいない。恨んじやいないんだから、もう、かわらないで欲しかった。

「どういづつもりの？」

「……何が」

彩子はわざわざ走って追いかけてきた。そして大声で俺の名前を叫び、強引に腕を掴む。

俺はもう駅の前までたどり着いている。周りには帰宅途中の学生が沢山いる。

皆、見ている。くそ、面倒くさい。

「だからっ……！　なんで断るの？？」

「……別に」

「別にじゃないでしょ！？」

ものすごい剣幕で彩子は俺を睨む。今のこいつは周りが見えていないようだ……

「おめえ声でけえよ……皆見てるじゃねえか」

「はあ！？　そんなの今関係ないでしょ？？」

耳を、かきむしる。

「なんで？？　なんで私からの誘いを断れるの？？」

彩子は俺の腕をぐいぐいとひっぱり正面を向かせようとする。やめてくれ……もう本当にやめてくれ……

周りからの目も気になるが……そろそろ電車の発車する時間。安奈が待っているんだ。

あの健気で美しい安奈が待っているんだよ。

お前なんかに、時間を割いている暇は、今日の俺には、無い。

「安奈が……」

「安奈！？」「

「安奈が家で待つてゐるんだ……もう離してくれ」

「誰それ？？ 何あんた同棲してるの？？」

「てめえ……声でさえっていつて」

「どうせしょうもない女なんでしょ！？」

……

殺意すらが、沸く……

皆、見てる……が……

もう……限界だ……

「声がっ……！！ でかいつて言つてゐるだろ！！」

俺は大きな声でそう言い、彩子の腕を乱暴に振り払い彩子から3歩離れた。

当の彩子は俺の眼を鋭い目で睨み続けている。

「なんなのよっ！！ なんだっていうのよっ！！」

彩子はヒステリーを起こし、持っていたバツクを地面へと叩きつけ、それをめちやくちに踏みつけた。

高そうなバツクなのに…… 本当にこいつにはもう周りは一切見えていないようだ。

「……俺もう電車乗らなきゃなんねえから」

俺は彩子に背中を向け、ちらほらと群がってきていた野次馬の間をかきわけながら駅の階段を上りだした。

「私はっ……！！」

うしろから聞こえてくる声には、もうかまっていられない。

第十六話：うたかたの幸せ

ピンポンという電子音がお肉を焼いている音に割って入る。

よし、時間ぴったり……なんて思ってた私はにやけていた。

とりあえずコンロの火を小さくし、フライパンに蓋をしてから「ちよっと待ってね」と大声で玄関にむけて叫んだ。

私はひそかに買っておいだクラッカーを取り出し、いそいそと玄関へと駆けていく。

部屋の鍵をはずし「鍵あけたよ」と扉の向こうにいるだろう松本さんに声をかけた。

ドアのノブがまわり、ゆっくりと玄関の扉が開かれる。

私は心の中で「今だ」と叫び、クラッカーの紐をひっぱった。

「ハッピークリスマススイブ！」という私の声とともに、勢い良く飛び出す色とりどりの紙ふぶき。

ああ……今……涙が出るくらい幸せ。

思えばどれほどのひと時を待ち焦がれていた事か。

野良になってから一番嫌な季節は冬だった。だって冬は、寒いから。

だけど今は違う。今は私を暖めてくれる人が居る。大事にしてくれる人が居る。愛してくれる人がいる。

そして、今日は愛し合う二人にとって、特別な日……

早く、早く松本さんにしがみつきたい。

「松本さん……おかえりいっ……」

！？

「どうもお。貴方が安奈ちゃん？」

確かに、松本さんは帰ってきた。

松本さんはビックリした顔をして私の顔をぼーぜんと眺めている。「あらら、本当に可愛い子ね」

でも……誰……？

……あ、そうだ。私料理してたんだ。

急いで準備しなきゃ。

失敗は出来ない。だって私にとって初めての……

……初めての……っ……

「うつ……うつ……うつ……」

松本さんが、悲しそうな目で、私を見る……

「うわああああんつつっ!!」

膝から崩れ落ちて、その場で泣いた……

第十七話：屑のような幸せ

二人はまだ玄関先にいた。安奈つて子は未だワンワン鳴いている。えいちゃんは小さい声で「ごめん、今日だけだから……」を繰り返しながら安奈つて子の頭をなでていた。

「今日だけ……だから……」

……はは。そうだよ。今日だけは私のえいちゃんなんだから。だから、早くこつちに来てよ。いつまでその安奈つて子に構っているのよ。

なんてね……別に全然かまわない。もともとこのような展開にするために来ているのだから。

「えいちゃん、このステーキもう食べごろだよ？食べていい？」

安奈つて子は私のこの言葉を聞いてより大きな声で鳴いた。

「お前っ……！」

えいちゃんが叫ぶ。

「あはは、うそうそ」

……はは。怒られた。

……

なんだかスツキリしない気分のまま、この部屋をぐるりと一周見渡してみる。

まず真つ先に目に飛び込んできたものは綺麗に折り畳みである布団。布団が二つ並んで置いてあった。

……ふうん。別にいいけど。

その他には向かって左側にタンスがひとつと本棚ひとつ。右側の奥にテレビがひとつと手前にテーブルがひとつ。正面に電子レンジがラックの上においてあってその下に炊飯器がひとつ。その隣におそらく備え付けの小型の石油ヒーターがひとつ。

他に目につくものは何も無い。

なんともまあ……良い言い方をすると、スツキリとした部屋。

これじゃあDVDも見れないしCDも聴けない……

「……無趣味すぎ」

私はテレビの電源をつけて椅子も座布団も無いので畳んであった布団の上に座った。

えいちゃんはまだ玄関で安奈って子をなだめようとしている。

なんだかな「もう」って気分だ。

……意地だけで、あんな事を言っちゃった事を、今は少し後悔している。

あんな姿のえいちゃん、見たくなかった。

犬の耳の力チューシャをつけた、私とは何の接点も無い、訳のわからない境遇の、女の子……

今はその子がえいちゃんを独占している。

来なきやよかったな……そんな風に思ってしまった。

私は、意地だけで生きてきた。

意地を張ったら、良い事があるって。思い通りになるって。

そう信じて生きてきた。

実際、意地を張っているとすべてが自分の思い通りになる。

意地で進学校へ入学したし、意地で生徒会に入り皆に尊敬されたし、意地で仲間を集めたし、意地で超倍率だったえいちゃんを手に入れたし、大学でも超倍率だった先輩を手に入れる事が出来た。

振り返ってみても輝かしい、すばらしい過去。

今更生き方は変えられない……けど、最近気づいた事がある。

意地を張っていたら、自分が、自分でなくなっているって事……

辛い事を辛いと思わないようにし、意地を張って切り抜ける。

弱音を吐かず、いつも気丈に振る舞い、強い女でいる。

つまり、誰にも弱い私は見せられない。

だって私は、我侭で、傲慢で、高飛車で。だけど強くて頼りになる。いざって時の行動力決 断力は人一倍……そう思われるように

振舞ってきたから。

別に、良い。今更、いいよ。

だけど今……

私って、意地を張ってこんな事がしたかったのかなぁ……って、思っちゃってる。

まいったなぁ……意地を張ることで嫌な事が増えちゃうなんて。

「ねええいちゃん」

私は少しだけ声を張った。

えいちゃんはまだ安奈って子をなだめている。多分、気づいていない。

「私、このままでいいのかなぁ」

返事は無い。

第十八話：狂う幸せ

気休めでしかない言葉しか、思いつかない。

「本番は……明日じゃなか……」

安奈……安奈……

大袈裟じゃなく、安奈にとって俺との時間が『全て』……

大袈裟じゃなく、安奈を正気に保たせておくためには、俺という存在が不可欠なんだ。

安奈は、喧嘩したあの日おかしくなっていた。まともにも物事を考えられなくなり、思考が飛躍し、正常では無くなっていた……

焦点が常に安定しなくなり、キョロキョロとして、突然笑ったかと思うと次の瞬間に立ち上がり、またその場に座り……

何の脈絡も無く「テレビつけません？」と言ったり「ちよつと部屋暑くありません？」と言ったり「買い物に付き合つて」と言ったり「洗濯しなくちゃ」と言ったり。

ようやくマトモに話が出来るようになったのは安奈が大泣きした後、部屋に連れ戻してから一時間以上経過してからだった……

もう……あんな姿は見たくない。

「頼む安奈……顔を上げてくれ……」

何をやっているんだ、俺は……

「わあああつつつ！！ わあああああつつつつ！！」

電車に乗りこむ寸前、あの時彩子は駅の階段をものすごい勢いで上ってきて、俺と同時に改札をくぐり、同じ電車に乗ってきた。

俺は肩で息をしている彩子に向かって「もう、構ってられない」と告げた。

しかし彩子は「今日だけでいい」「今日が過ぎたら、もういい」「今日は私の我俣を聞いて」「そのあとはもう干渉しない」「約束する」と、息を整えながら言ってきた。少しビビった。あのプライ

ドの塊のような彩子が……折れた。

「だから、今日だけ、私の彼氏に戻って」

今日が、何の日なのか分かっているのか？と問い詰めた。

「分かっている……分かっているから言っているの」

……俺は「肉体関係は持たない」「安奈を挑発しない」「今日は安奈の目の届く場所にしか俺は行かない」「暗くなる前に自分で帰る事」という事を条件に、家までの同行を許可した。

俺には彩子の言う「元鞘」という意識は無かった。

これっきりで済むなら悪くない……なんて……甘かった。

まさか彩子が「元鞘」なんて言葉を使うとは思ってもみなかった。
俺は安奈の頭に手を置く。

振りほどかれるかと思ったが、安奈は依然手で顔を覆いながら大声で泣いている。

「安奈……ごめんな……」

安奈は泣いている……

愛してと叫んでいるように見える……

俺は優しく、頭を撫でる……

「ごめんな……安奈……アイツ、やっぱり今から叩き出すから……」
俺は安奈の横をそつと通り、震える小さな背中をポンと叩く。

「……もうちょっとだけ、待っていてくれ……」

そう言っ俺は靴を脱ぎ、部屋の中へと入っていった。

っただけ外出しようって思っただけ。

松本さん……今何やってるんだろう……

きつとあの元鞘と……なんて思っ「愛して、愛して、愛して、
と呟いた。

それにしても、寒い……

手がかじかむし、お腹も冷えてくる……

トレーナー一枚で外に出てきた事を後悔した。

どうせなら去年松本さんにプレゼントしてもらったコート着てこればよかった……

今からでも取りに戻ろうかな……って思った。さすがにこの寒さは洒落にならない。「愛して、愛して、愛して」愛し合ったら、暖めあえるなあ……なんて思う。

そういえばステーキ……今頃もう真っ黒になっちゃってるかな……どうしよう……すっごく高かったのに。松本さんに怒られちゃう。せっかく今日のために特別なものをつて思ったのに……

あ、そういえば鳥の丸焼きはうちにオーブンが無いからやめたんだっけ。作り方も難しそうだったしなあ……って、そこは勉強するしかないか。

料理を勉強するならやっぱりもうちょっと良い電子レンジが欲しい。うちにある電子レンジは暖める事しか出来ない。今度松本さんにおねだりしてみようか。「愛して、愛して、愛して」愛してくれているなら、買ってくれるだろう……なんて思った。

ああ、それにしても愛が欲しい。

愛さえあればもう何もいらな

愛を手に入れた瞬間に死んだってかまわない。

とにかく、愛。愛。愛。だ。

松本さん、愛して。

愛して。

愛して。

愛して。

「愛して、愛して、愛して」

さつきから愛という単語ばかりが頭に浮かぶ……

愛して欲しいなら、愛してあげなければならないだろう。それが世の常だ。

私の頭は『愛して』って考えているけど、私は、安奈は、人を愛した事があるの？

『お金をくれる人だけが人間』って、誰の言葉だっけ？

私は、安奈は、寂しいだけなんだ。

寂しくなければ、松本さんじゃなくても、いいんだ。

「狂わないで……狂わないで……狂わないで……狂わないで……」

私は耳をふさいで、その場にうずくまった。

冷静な安奈が私に問いかけ続ける……

「松本さん……助けて……え……」

私は、安奈は、松本さんじゃなきゃ嫌だって……思い込もうと努力してる。

愛そうと努力する愛は……愛？

自然と心惹かれるのが……愛？

じゃあ……私のこの感情は……？

松本さんを奪われて、半狂状態になった私のこの感情は……？

これは、嫉妬という感情。

でもそれはきつと、愛ゆえに……

「もう……わかんない」

第二十話：静寂

「わりいんだけどよ、お前、今日は帰ってくれないか？」

そらきた……と思った。

だいたい察しはついていた事ではあった。こんな状況になっちゃったんだから。

「いいの？」

私はえいちゃんに向かって笑顔でそう言ってみせた。

元々、私はそろそろ帰るつもりであつたのだが、このままじゃあなんだか悔しい。

最後に少し困らせてやろう。そう考えていた。

「お前よ……なんでそこまで俺にこだわってるんだよ」

こだわっているというか……正直に言つと、えいちゃんは友達に自慢できるような容姿だからだ。

彼氏にしたつてだけで箔がつく。長身で痩せ型。今でこそボサボサの頭をしているが、整えたら超格好いい。芸能人でたとえると岡田准一のような顔をしている。

えいちゃんは入学してからすぐに友達の中で話題に上つた。「彼格好いいよね」とか「超タイプ」だとか。

そりゃ、こだわらない訳が無い。

「……別に。意地つてやつ？」

だけど教えてあげない。悔しいから。

「お前さ……別に俺の事好きじゃないだろ」

好きじゃないというか……なんて表現すればいいんだろう。

人間としては、昔のえいちゃんは好き。明るかつたし面白かつたし。

でも男としてと言われると……疑問符が出る。そもそもそういう感情が私にはいまいち解らない。

そう思いながらぼりぼりと頭を掻いて「ん」と唸ってみせた。

「もうよ、かかせられるだけの迷惑かけたる？」

……鋭いな。

どうやらえいちゃんは私の魂胆にはもう気がついていようだった。

さすが、私の性格を知り尽くしているだけの事はある。

「あはは」

私は大きな声でわざとらしく笑ってみせた。

と、同時に……

あれだけうるさかった安奈って子の鳴き声がピタッと止まった。
しいん……と、静寂が続く。

私もえいちゃんも、動く事さえ許されないような……時間を奪われてしまったような……そんな静寂。

カチ……カチ……と、目覚まし時計の秒針だけが静かに音を立てていた。

「ありえない……」

静寂が続いて30秒ほどたってから、ようやく私は即座に思いついた言葉をそのまま発していた。

だって……ありえない……絶え間なく続いていたあの泣き声が……ピタッと止まった。

水道の蛇口をキュツと閉めたように、いきなり……

私が「ありえない」と口にしてすぐえいちゃんは時間を取り戻し、ハッと気づいたように玄関へと駆け出していた。

私もつられるように立ち上がり、玄関へと駆け足で向かう。

「……安奈……？」

さっきまでそこに居たはずの安奈って子が居なくなっていた。

そう……さっきまでこの玄関で膝をつきながらワンワンと泣いていたはずなのに……

「えいちゃん？」

えいちゃんの顔が、ものすごい顔になっている……

どう例えればいいのか……鬼……？悪魔……？とにかく……怖い

……
「あんなああつつつ！！」

ビリビリと……鼓膜にえいちゃんの叫びが響く……痛いほどに響く……

こんな大きな声を出すえいちゃんは初めてみる……いや、音にしても、生涯聴いた事が無いほどに大きい……

「どっ……どこ……いつちゃったんだろうね……」

何故こんな言葉をかけてしまったのだろうか……思った事をそのまま口から発する私の癖が疎ましい。

そんな事、えいちゃんが一番知りたいはずなのに……
「うるせえ黙ってろ」

血走った目で私をギロリと睨みつけた。

私は思わず息を呑み、うつむき黙る……

えいちゃんは私が黙った事を確認すると靴も履かないで飛び出していき「安奈あ！！安奈あ！！」と叫びながら、アパートの前の路地まで駆けだす。

曲がり角を曲がって、えいちゃんの背中が消えた。

「……」

私はその様子を見届けたあと、少しの間立ち尽くしていた。

一体、何が……？

第二十一話：搜索

安奈が……消えた。
居ない。

「……安奈……？」

泣き声が止んで、何が起こったのかと思い急いで玄関までかけつかたのだが……

もう、安奈は居なかった……

「えいちゃん……？」

うるせえ黙ってろ。

「安奈!？」

大声で呼んでみる。

しかし、返事はない。

「どこいつちやったんだろね」

「うるせえ黙ってろ」

彩子は黙った。

アパートから出て少し辺りを見回してみる。

しかしそこは下校途中の中学生やら高校生やらが歩いているだけで、どこにも安奈の姿は見当たらなかった。

「はっ……はっ……」

たいして走ってもいないのに、息切れがする……

ドクンドクンと、心臓の音が高鳴る……

胸が苦しい……体が震える……

「ああ……ああ……」

居ない……消えた……

安奈が消えた……

「マジかよ……」

安奈はもしかして、まだ誤解しているんじゃないだろうか……？

泣いてる最中、俺がかけ続けていた言葉は、きつと安奈の耳には届いていなかった。

つまり彩子の言葉をそのまま信じて……

あいつはもうあの部屋には居場所がないと……

それで……出て行っただけ？

「お……おお……」

落ち着け……まだそんな遠くに行っている訳がない。

取り乱すな、キレるな。

探せ。きつと、まだ近くに居る。

俺は急いでアパートに戻り、バイクの鍵を取り出す。

雪が多少積もってはいるが……仕方ない。

「彩子お……」

俺はぼけつとしながら布団の上に座っている彩子に向かって怒鳴った。

彩子は目をぱちくりさせて俺のほうを見る。

「お前は、留守番だ。絶対そこを動くんじゃねえぞ」

「は？」

俺はそれだけを言って外へと駆け出していった。

後ろで彩子は何かを言っていたが、もうかまっていられない。

安奈は俺の生きがい……

とても強い反面、とても壊れやすい安奈……

天使のように純粹で、とても健気で、したたかで、この上無く美しい。

絶対に連れ戻すから。お前の帰る場所は、ここしか無いんだから。見つけたら、言ってやるよ……

初めて「愛してる」って言ってやるから。

「見つけられるよ……」

エンジンに、火が入る。

第二十二話：誰でも

私は公園のベンチに座っている。

ベンチには雪が積もっていたけど、親切な人がほろつてくれた。さつきまではものすごく寒かったけど、この親切な人が自分の着ていたコートを貸してくれているので、今はそれほどでもない。

そして私は今、少しだけちらついている雪をながめながらこの親切な人の話を聞いている。

「寒くないですか？」

「……うん」

私は5度目の同じ質問に相槌を打った。

親切な人は「はいこれ」と言いながら私に温かい缶コーヒーを渡してくる。

私は「ありがとう」と言いながらそれを受け取り、ちょっと微笑んでみせた。

親切な人は照れているらしく、小さく「はは」と笑いながら頬を赤く染まらせる。

「……座つたら？」

私は自分の右隣の席をポンと叩いて親切な人を促した。

「あ……う、うん」

親切な人は「い……いいのかな……」と言い、おどおどしながらも私から少し離れた場所に腰を下ろす。

「いやでも本当……安奈さん突然辞めちゃうんだから、皆ビックリしてましたよ」

どうやら私は、ちょっとした有名人だったらしい。

中学生が登校する時間、私はほぼ毎日コンビニでレジ打ちをしていた。

頭に黄色のバンダナを大きなリボンのようにして巻きながら笑顔を絶やさず仕事をしている。私の姿は、思春期である中学生の憧れ

の的だったらしい。

可愛さと大人っぽさが混合している……だなんて……よくもそんな事を言えるものだ。恥ずかしい……

男子ばかりか女子までもが一緒になって隠れて私の姿を見に来ていたそうだ。

いつしかフアンクラブ染みたものが出来、毎朝私がレジ打ちをしている時間を見計らっては仲間同士競うように私のレジに並んでいたと、この人は言っている。

どうりで忙しかった訳だ……

「でもさ、まさか僕と同じ年だったなんて……思っても見なかったなあ」

「……そうだよね」

「うん……うん……そう」

私は、雪を見つめていた。

「ぼ……僕の名前は長谷川啓二……って言います」

ちよつと髪の毛を茶色に染めている童顔のこの男の子はそう名乗った。

「私は……知ってると思うけど安奈」

私はコーヒーを一口すすって小さく深呼吸をする。

「松本安奈っていうの」

「松本って言うんですか、知らなかったな」

啓二君は「よし」と小さくガッツポーズをしている。

「……何？」

「えー？ あ、いえ」

そう言って啓二君はまたおどおどする。

落ち着くためだろうが、一度コーヒーをすすった。

「いや……だつてさ……僕の学校じゃ誰も安奈さんの苗字なんて知らないから。なんか、得したなあって」

……そうだった。

私がコンビニでアルバイトをしている時、私のネームプレートには苗字ではなく『安奈』と書かれていたのだ。

それは……本当は私に苗字が無かったからなのだが……

「……ふうん……」

「……うん……うん……はは」

啓二君は決して目を合わせてはくれない。

いつもおどおどして、私が顔を見ようとするとすぐに目をそらしてしまう。

……普通の中学生って、こんななんだ……なんて、しみじみ思っていた。

「……啓二君はあれだね、純粹だね」

「へー？え……？何……」

私は、雪を見つめていた。

第二十三話：パーティー

最初はビックリした……

だって、歩道で華奢な女の子が頭を両手で抱えながらうずくまっているから。

僕は今日が終業式だったからこれから友人たちと遊ぶ約束をしていた。

男子も女子も混合で。パーティーじみた事をやる予定だった。それに向かう途中だったのだが……出会ってしまった。

始めは無視して通り過ぎようと思っていた。厄介な事に巻き込まれるのはゴメンだ。

だが、普段見る事の無い光景。どうしても気になってしまい、その女性をよく見てみた。

そして同時に驚愕した。それは、皆の憧れのアイドル、安奈さんだった。

ものすごく、ビックリした……引越してもして居なくなっと思われていた安奈さんがあんな所でうずくまっているなんて。

僕は思わず話しかけた。「大丈夫ですか？」月並みな言葉だったが、それ以外の言葉は思い浮かばない。

安奈さんは僕の声が聞こえていないようで、小さな声で何かをブツブツと呟き続けていた。

そして何より驚いたのが、安奈さんの両手の先にあるもの……

それは、紛れも無く、犬の耳だった。

「……啓二くんはあれだね、純粹だね」

安奈さんはそう言って空を見つめていた。

……やっぱり、安奈さんは……ものすごく美人だ……横顔もすごく素敵。

「……っへ!？」

僕は声を裏返して無意識の内にそう言っていた。

……だってこの人、今なんて言った？

純粹って言ったのか……？僕の事を……？

……やめてよ……そんな顔で褒められたりしたら……

ドキドキと……心臓が高鳴る……

「え……？何……？」

僕のこのすつとんきょうな声を聞いて安奈さんはいたずらっぽく「えへ」と言いながら微笑む。

なんだ、からかわれたのか……と思う反面、その笑顔にものすごく、ドキドキする。

「私なんてさあ……」

そう言って安奈さんはちょっと暗い顔をしながらうつむく。そしてそのまま、黙り込んでしまった。

「私なんて……？」

僕は聞き返す。

「……うつん、なんでもない」

安奈さんはうつむいたまま少し微笑んでそう答えた。

「安奈さんは、これからの予定って何かあるんですか？」

僕は是非とも安奈さんにパーティーに来て欲しかった。

安奈さんを連れて行ったというだけで、僕は今日ヒーローになれる。

だって安奈さんは皆のアイドル。憧れの的。男子だけじゃなく女子にだって大人気だ。

それになんだか……安奈さん、元気ないみたいだし。パーティーに参加したら間違いなく主役になってもてはやされるに決まっている。そうしたら、元気になるはず。

「……うつん、無い」

「じゃあ、だったら、一緒に来ませんか？学校の友達と遊ぶんだけど。ちょっとしたクリスマスパーティーみたいな事をするんですよ。

安奈さんがきたら皆大喜びしますよ」

僕は言いたい事を一気に安奈さんに伝えた。少し興奮気味になっていたようだ。

しかし安奈さんはやっぱり浮かない顔をしている。どうやら、あまり乗り気じゃないらしい。

「……あはは……私なんか行っても、迷惑だよ」

安奈さんはうつむきながら悲しそうに笑う。

コーヒーの缶を持っている安奈さんの手に、力がこもるのが解った。

……

「そんな事ないよ！絶対に！保障するから！」

僕はいつの間にか立ち上がって両手を広げて強い口調でそう言っていた。

そう、迷惑な訳が無い。皆今日がクリスマスパーティーだという事を忘れて安奈さんに夢中になるはずだ。

それほどまでに、安奈さんの存在は僕らのクラスで大きな存在である。

「ね？一緒に行きませんか？」

「……………」

安奈さんは小さく、「松本さん」と呟いたような気がする。

第二十四話：二重人格…？

……何かが、おかしい。

あの安奈って子、絶対におかしい。普通じゃない。

私はえいちゃんの部屋の中で、一人布団の上に座っていた。

えいちゃんが出て行って30分くらい経っただろうか……二人はまだ帰ってきていない。

「何やってんだ私……」

深くため息をつき、携帯電話を取り出した。

着信が3件、メールが5件……

いずれもあの女友達から。メールを読んでもどうやら心配しているらしい。

はぁ……勢いつて、怖いな。

我を失うほどの事でもないだろうに。おとなしく彼女らと一緒にカラオケにでも行っていれば良かった。

そう思い、また深くため息をつく。

そしてふと、小さな窓の外を眺めてみた。やっぱり、雪が強くなっている……

えいちゃんが飛び出して行った時、もっと強く止めて置けばよかった。

こんな雪じゃバイクなんか到底無理……事故起こすに決まってる……

「あぁ……」

私は頭をグチャグチャとかきむしった。

罪悪感がふつふつと……湧き上がってくる……それを振り払うようにグシャグシャと髪をかきむしる。

それでもやっぱりぬぐえない。いてもたってもいられない感じが……体が寒いのか暑いのか、解らないこの感じ……

なんとも……不快……

くりかえす。グチャグチャと、グチャグチャと、何度も何度も髪の毛をかきむしる。

「だつてさ……まさかこんな事になるなんて思わないじゃない」

安奈つて子を、少しだけからかつてやろうつて思つてただけだ……本当にそれだけ……それだけでおとなしく帰るつもりだった。

だけど……その安奈つて子が普通じゃなかったのが私の誤算……

えいちゃんに依存している事は電車に乗った時、えいちゃんから聞いた話で大体解つていた。実際に見てみるとやはり彼女にとってえいちゃんが『全て』つて感じだった。

えいちゃんを取られたと感じてあそこまで泣いて……そこまではまだ普通と言うか、私の思惑通りだったのだけど、その後。

突然ピタツと泣き止んだかと思うと、何の物音も立てずに、突然姿を消した。

……普通なら、怒つてかち込んでくるか、落ち込んだままその場で黙つて事の成り行きを見守るか。

走つてどこかに行くにしても、足音くらいするだろうに。

急いだ様子も無く、足音も立てず、彼女は忽然と姿を消した。

「……普通じゃないよ、それって」

えいちゃんが彼女から目を離れた時間は、本当にちょっとした間ではなかったはずだ。

とてもすばやく、頭の切り替えをしたとは思えない。

さつきまでワンワンと泣いて悲しみに暮れていたのに、パツと、思考を切り替えて、まるで散歩にでも行くように……

「まさか……二重人格じゃあ、無いよね……？」

……もし二重人格なんだとしたら……

そうなるには、何かとても大きなトラウマでも無いとそうはならないはず……

……何か大きな……トラウマ……

「あ……」

ああそうか……えいちゃん、電車の中で言ってたっけ。

「安奈は、元々ホームレスだ…過去に何があったのか、俺も知らない。だから、絶対に挑発するな」

私は「うんうん」と軽く答えてた。

えいちゃんによつて繋ぎとめられていた彼女の理性。それがはじけた……？

彼女の中にある闇を、私は軽い気持ちでつついて……取り返しのつかない事態を引き起こした……？

安奈が帰ってこなくなる……？えいちゃんが事故にあう……？もしくはその両方……？

私は頭をグチャグチャとかき乱し「ああ………」と呟いた。

第二十五話：明日

啓二君は、親切で言ってくれているんだと思う……

多分今の私、すごく暗い顔をしている。だから啓二君は私を元気付けようとして誘ってくれている。

でも……私はそろそろ帰りたい。

今は、誰かと関わったり話をしたり。そんな事はあまりしたくない。

部屋で体育すわりでもしていたほうが、よっぽど落ち着く。

知らない人とパーティーなんかやったって……今の私は作り笑顔すら作れないかもしれない。

「うつん……やっぱりいいよ……ごめんね」

私は啓二君の顔を見ながら申し訳なさそうにそう答えた。

啓二君は「……そ……そっか」と呟き、広げていた両手をゆつくり下ろす。

「ごめんね……また今度誘ってよ」

そう、今日でなければ、別にいつ付き合ってたってかまわない。

どうせ暇だし。松本さんには……元鞘がいるし。

だけど今日だけは、布団の中でうずくまっていたい気分なのだ。

「今日だけは……ごめんね」

「じゃ……じゃあ明日は……？」

明日……？

急に明日って。

もしかして啓二君は私が「いつか今度ね」という返事をして逃げるとでも思っているのだろうか？

そんなつもりは無い。どうせ暇だし、やる事も無いんだし。

「何も急に明日じゃなくても……いつでもいいんだよ」

「だって……だから明日！明日また会ってよ。友達も連れて行くから」……啓二君の顔が本気だ。目をものすごく輝かせている。

どうやら私は……啓二君の心に与えてはいけない感情を与えてしまったようだ。

駄目だよ……貴方のように純粋な人は、私なんかを好きになっちゃ駄目。

「明日……か……」

いや、もつと駄目なのは……私だ。

何を考えている？何を考えている？何を考えている？何を考えている？

馬鹿か、馬鹿か、馬鹿か、馬鹿か、馬鹿か、馬鹿か、馬鹿か、馬鹿か。

松本さん以外、認めるな。

「あはは……」

「明日も……駄目ですかね……」

「……ううん、別にかまわない」

啓二君は「えっ!？」と驚いた。それと同時に右手に持っていた缶コーヒーを落としている。

落とした事にも気づいていないようで、啓二君は私の目を初めて直視していた。

「ほ……ホントに……？ホントに明日も会ってくれるんですか？」

「うん良い………けど」

ああ……浮かぶな……浮かぶな……浮かぶな……

狂うな……狂うな……狂うな……

ふざけるな……安奈……お前はサカリのついた雌犬じゃないんだ。

私は啓二君から視線を外し、空を見上げた。

……雪が、降っている。

さっきまで小降りな雪だったのに、今は結晶が見えるほど大粒の雪になっていた。

「……けど……？なんですか……？」

「愛」

「あい……？」

「……………」

今日の分はもう流しきった筈なのに……
涙が、溢れる……

第二十六話：発見

時速25キロで走行……くそ、全然前に進まない。

しかしこれ以上スピードを上げたら、本当にバイクのコントロールをなくしてしまう。

カブや車高の高いバイクならまだマシなのだろうか……

俺の乗っているバイクはYAMAHAのビッグスクーター。車体は低く、しかも両足を地面に付けて運転できるほどでは無く……正直、最悪のコンディション。

いっそバイクから降りて、足で探してやろうか……と思うほどに前に進まない。

「くそ……くそ……」

……いや、足で探すよりは遥かにマシだ……

信号だつてそんなに多くない。車だつて……多いほうじゃない。

車道の左側を走ればそんなに危険だつて無いはずだ。

俺が事故つて安奈の帰る場所を無くしてしまつては本末転倒というものだ。

落ち着け……大丈夫。

安奈は……喧嘩したあの日……もう何日前になるのだろうか、あの日。

俺は一瞬、二重人格なのではないだろうか？と思つてしまった。

本物の二重人格を見た事は無いのだが……なんだか、それっぽい拳動ではあつた。

だが、違う。安奈はそんなじゃない。

あの日から一週間、俺は安奈とずっと一緒に居た。

それは安奈の事をもっと良く知りたいと思つたからである。

一年間安奈と暮らしていたというのに……俺は安奈の事なんてほとんど何も知らない状態だつた……

なんて恥ずかしい……そしてなんて最低なんだ……と自分をさげすんだ。

一緒に暮らしているとはいえ、安奈はずっと孤独を感じていたに違いない……

せめてもの罪滅ぼし……というのは虫が良すぎるが、とにかく俺は安奈と一週間、ずっと一緒に居た。

すると俺は俺なりの答えを導き出し、愕然とする。

安奈は二重人格では無く、自分で感情をコントロールする術を持っている。という事。

だがしかし、一度火がついたら、壊れてしまう。狂ってしまう。という事。

野良だった3年間で身に付けた術なのか、それとも誰かに教え込まれてしまったのか……解らない。

俺が解る事は、それはなんて悲しい術なんだ……という事。

死なないためには、冷静でなければならぬ。

食べる事を忘れてはならない。お金を手に入れなければならない。だがしかし……強烈なダメージが精神に与えられると一転、狂ってしまう。

狂う事で、辛い事から逃れてきていたのだろう……そうじゃないと、辛くて死んでしまうから。

……良く、今まで耐えてきたな。

一緒に住んでいる俺に冷たくあしらわれ……店長に犯され……心通わす友すら居なく……

少しでも俺に興味を持ってもらおうと……毎日のように俺をホテルへ誘い……

歯を食いしばりながら……狂う事を我慢してきたのだろう……きつと野良だった頃と比べて「まだマシ」なんて思っていたのだろう……幸せになる権利は、自分には無いと決め付けていたのだろう……

なんて悲しい、運命なのだろう……

フルフェイスタイプのヘルメットのため、涙をぬぐいにくい。それに冬道に片手走行なんて無理だ。

だがしかし、先を急がなければならない……どうせバイクを止めてぬぐったって後から後から涙なんて溢れてくる。

……やはりバイクでの搜索を打ち切って、足で探すか？

……だけど、少しでも早く安奈を見つけなきゃ……

自分の心の迷いに……焦りに……嫌な予感がする……

しばらく走行し、あまりひと気の無い住宅街に出た。あまり通らない道だったので定かでは無いのだが、この先には確か公園があったはず。

……しかし、安奈はこんな遠くまで来るだろうか？歩いてくるなら30分はかかる場所……

「くそ……居る訳ねえ」

俺は引き返そうと思い、いったんバイクを止めてヘルメットを取った。

そして一度涙をぬぐい、顔を両手でパンと叩く。

「泣いてるんじゃないやねえ」泣くのは、見つけてからだ。

自分を落ち着けるために深呼吸をする。

一回……二回……三回……

俺は「よし」と呟き、もう一度ヘルメットを手にとる。絶対に見つけ出すと、もう一度心に誓って。

ヘルメットをかぶろうとした瞬間……遠くのほうで中学生くらいの男女がこっちに向かって並んで歩いてきていた。

フードをかぶった少し背の高い女性が先を歩き、その少し右後ろを拳動不審な様子でキョロキョロしながらついていつている男が居る……

「……あの背丈……」

女性にしては、少し背の高い……

隣の男よりも若干高い……

直感的に、理解した。

安奈……

ヘルメットを投げ捨ててハンドルをひねる。

「安奈」

思わず声に出る。

「安奈っ！！」

そこで、俺の意識は無くなった。

第二十七話：目撃

安奈さんが何を言おうとしたのか、僕にはわからない。

安奈さんは「なんでもない」と言って、目から涙を流していた……

安奈さんのその姿を見てオタオタする僕を「あはは」と笑い、「落ち着いて」と諭し、「私帰るね」と言って立ち上がった。

「啓二君、まだ時間ある？　あるなら、家まで送っていつて欲しいな」

安奈さんはそう言っただ涙をぬぐいながら少し微笑む。

くそっ……なんて綺麗なんだ……ずるいよ涙なんて。

……実際もう遅刻の時間だ。本当なら急いで向かわなきゃいけないんだけど……

……そんな姿を見ちゃったら断れる訳ないじゃないか。

「は……はい、大丈夫です」

「そっか。それじゃあ歩きながら明日の計画でも立てようか」

そう言っただ安奈さんは僕に背中を向けて歩き出した。

僕も慌てて安奈さんの背中を追う。

「ほら、走って男の子」

安奈さんは背中を向けたままパンパンと手を叩き、僕を急かした。

安奈さんの家の住所を聞いてみると、結構遠くから来ていた事がわかった。

ここから歩いて20〜30分くらいの場所だろうか。トレーナー一枚で出歩くような距離ではない。

「気がついたらここらへんに居たの」

安奈さんはそう言っただ僕のダッフルコートのフードをかぶって頭の耳を隠す。

それにしても気がついたらってどういう事？

無意識のうちにここら辺まで歩いていたらって事？

「不思議そうな顔してるね」

安奈さんは僕の顔を見てニヤニヤしていた。

僕はまたドキッとして思わず目をそらす……

「はは……そりやそうだね、不思議がるのも無理ないよねえ」

……安奈さんは、さっきから事あるごとに空を見つめている。

今もまた空を見つめた。

……一体、何を見つめているのだろう……？この人には、何が
見えているのだろう……？

僕もつられて空を見つめた。

白い空に、白い雪……

……だけしか見えない。

「……」

安奈さんは、愛しそうに見上げている……焦がれるように、見上
げている。

……なんだか、嫉妬する。雪に、空に、嫉妬する。

この人にとって、僕なんかは通りすがりの少年でしかないのは解
っているのだが……

僕の思う事はひとつ。どうしたらこの人は僕に振り向いてくれる
のか。

「……何を見ているんですか？」

僕はつい、空を見上げている安奈さんに話しかける。

嫉妬の感情ありきで話しかけたからだろうか、少しだけ声を低く
発してしまったようだ。

安奈さんは僕のほうをチラッと見直して、「あは」と笑い、前を
向きなおす。

安奈さんは少し笑ったあと、僕の質問には答えてくれず、黙り込
んでしまった。

少しだけうつむきながら、黙って前だけを見て黙々と歩き続ける。
僕はまた複雑な気持ちになった……解ってはいた事だけどこの人
は、僕に興味が無い。

大きな信号を渡り、住宅街へと入っていった。

ここから先は大きい道路を歩く事は無く、ひと気の無い住宅街を歩いていったほうが近道だからだ。

僕と安奈さんはまったく車の通っていない、歩道の無い道を歩いていく。

その間、僕らはずっと無言……お互いに話しかけないし、話す事も無い。

いや、無い事もないはず。明日の予定は歩きながら話そうって言うていたのだから。

だけどなんと言うか、今はそんな空気ではない気がする。だからと言って今のうちに計画を決めておかないと破綻なんて事にも……

僕は「ふう……」とひとつため息をついて前を見る。

そこには冬だと言うのにビッグスクーターにまたがった背の高い男性が袖で顔をぬぐっていた。他には路上駐車している車が何台か。しかし雪もかなり降ってきているというのに……走り屋というのは理解できない。

僕がそう思った矢先「松本さん……？」と、安奈さんは小さく呟く。

「松本さん？」

僕は聞き返す。しかし返答は無い。

安奈さんの苗字は松本……安奈さんのイトコか何か……？

でも自分の苗字も松本なのに、呼び名で「松本」と言うだろうか？

「え……？知り合いですか？」

僕がそう言葉を発した瞬間、そのバイクはブォンという大きな音を立てて急発進する。ドライバーは手に持っていたヘルメットを投げ捨てながら、大きな声で何かを叫んだ。

そしてそのまま……ガシャンという大きな音を立て……

横転した。

そして滅多に通る事の無かった車がタイミング悪く……後ろから

迫る。

後ろから迫り……その男の人をドンと突き飛ばしていた……

「ああ！」

僕は大声を上げる。

「ああああああ！！！」

安奈さんは、僕の声をかき消すほどの大きな声を出していた。

第二十八話：サイレン

遠くから救急車のサイレンの音がする。

ピーポーピーポーが……少しずつ、近づいてきた。

「ピーポーピーポー……」サイレンにつられて口走る……

……嫌な予感というのは、当たって欲しくは無いものなのだが……私は不安でいてもたってもいられなくなり、えいちゃんの部屋の外へといそいそと出て行く。

このアパートは少し大きな道路が目の前にあり、車の通りもそこそこ。

もし救急車がこっちに近づいてくるのだとしたら、必ずここを通るはずである……

サイレンの音が、次第に大きくなる。

どんどんと、近づいてくる。

……どんどんと……近づいてきて……救急車が視認できて……

アパートの手前でスピードを落とし、私の目の前で、止まった。

「……え……？何……？」

混乱していると救急車の後ろのドアがガチャリと開き、そこから勢いよくあの安奈という子が飛び出してくる。

その表情は……ものすごく必死だ……

涙を鼻水も垂れ流し、しかしそれらにはちつとも気にとめていない様子。

必死な顔をしながら、私を見つけ、大声を上げた。

「ああ良かった！！まだ居てくれたんですね！！」

「……よ……良かったって……」

何が、なんだかわからない。

「とにかく！乗ってください！！乗ってください！！」

安奈って子は私の腕を掴み、強引に引っ張る。

「ちょ……ちょっと待って……どうしたっていつの……？」

「松本さんが……っ！！」安奈はそう言っただけ頭をブルブルと振るわせる。そして「乗ってから説明しますから！」と続けた。

……この子にとって、何かを私にお願いするなんて、よほどの事が無い限りする訳がない。

その「よほどの事」がきつとえいちゃんに起こっている。

私はそう確信し、急いで救急車へと乗り込んだ。

救急車へと乗り込んで名前やえいちゃんとの関係について2、3質問を受けたあと、今度は私が救急隊員の説明を受けた。

「頭の外傷は一見酷いように見えますが、応急手当として止血しているので問題ありません」その後違う隊員さんが「精密検査をしてみないとはいえませんが。脈も呼吸も安定しているのでおそらく大丈夫でしょう」と付け加えていた。

「目立った外傷も無く、骨折もおそらくしていません。雪道だったのでバイクも車もゆっくり走っていたからでしょうね」

私は「そうですか」と、安堵の言葉を漏らした。

えいちゃんは意識こそないものの、特別苦しそうにも辛そうにも見えない。顔色も良い。「疲れたからちょっと寝てる」そんな印象さえ受けるほどに安定している。

病院についたら検査をして、何も問題が無ければ2、3日で退院できるとの事。

「そっか……だつてさ、安奈ちゃん」

私は安奈のほうを向いてゆるくニコツと笑ってみせた。

「……ごめ……なさ……ごめ……」

……むしろ問題なのは、安奈のほうだ……

……真つ青な顔をして、ブツブツと何かを呟いている。

どこを見ているのか……目を薄く濁らせているように見える。茶色のダッフルコートをフードまでスッポリとかぶり、小さく縮こまりながらブルブルと震えていた……

安奈と同じ年くらいの男の子が、安奈の肩を抱きながらオロオロとしている。こんな時、どうして良いのかわからないようだ。

「……」

……そんなの、私にだってわかんないわよ……助けを求めるような目で見られたって……

私なんか安奈には恨まれているはずだし……どうにも出来ない……

どうにも出来ない……

第二十九話：悲観

病院に到着して、一時間くらい経っただろうか？

僕はその間ずっと安奈さんの肩を抱いていた。

安奈さんは、呟き続ける。「ごめんなさい」と、延々と繰り返して呟く。

うつむき、どこか一点を見つめているような、それでいて何も見えていないような……そんな目をしている。

時々、ブルブルと体を震わせて「あ」と言う。しかしすぐにまた「ごめんなさい」を繰り返していた。

そんなに、ショックだったのか……あの松本さんって言う人が事故にあった事がそんなに。

不謹慎である事は解っているんだけど、なんだか……悔しい気分になってしまう……

松本さんっていう人はどうやら意識を取り戻し、今正式な手当てを受けている。まだ安奈さんとは顔を合わせられる状況では無いそうだ。

それにしてもあの彩子さんっていう人、すごく小さくて小柄だけど、見た目とは裏腹にもものすごく頼りになる。

松本って言う人の入院する手続きや検査への同意書へのサインなんかをテキパキとこなしていた。僕よりも全然状況がつかめていないはずなのに……素直に、すごいなと思った。

「ねえ君、名前なんていうの？」

その彩子さんが一通りの用事を済ませたようで、僕にジュースを渡しながらかけてくる。

今までの緊迫したような表情から一転して、場を和ませようとしているのか、軽く微笑んでいた。

「……僕は、長谷川啓二つていいいます」

「啓二君……ね。じゃあけいちゃんていい？」

彩子さんはポカンとしている僕の顔を見てにつこりと笑い「あつれ？ 気に食わない？ それともケイジだからデカとかの方がいいのかな」と言つて「あはは」と笑いながら安奈さんの隣に座つて足を組み、買つてきていたコーヒーの蓋を開けていた。

右から僕、安奈さん、彩子さんの順で待合室の椅子に腰掛けている。なんとも……奇妙な光景だ。

僕は安奈さんと正式に知り合いになつたばかりで、この彩子さんという人とは初対面。

それなのにこうして並んで座っているなんて……なんとも奇妙。

「ちよつと聴きたいんだけどさ」

彩子さんが口を開く。目は僕を見ては居なかつたけど、安奈さんはこんな状態だし……僕に話しかけているのだろう。僕は「はい……なんですか？」と答えた。

「えいちゃん……松本君が事故つた状況なんだけど、いまいちまだ良くわからないのよね。けいちゃんは目撃したんでしょ？ ちよつと教えてくれる？」

僕の呼び名はもうこの人の中で「けいちゃん」に決まつてしまつたようだ。

そんな呼び名、誰にも付けられた事ないよ……

「えつとまず……僕と安奈さんが住宅街の中道を歩いていたんです……」

「ふうん」

「そしたら反対車線からバイクに乗つた松本さんが急発進して、横滑りして転倒したんですね。そしたら後ろから迫つてきていた白い軽自動車が急ブレーキをしたんですが……松本さんの体にぶつかつて、2メートルくらい吹っ飛んで……頭を打つてました」

その後バイクは横滑りし続け、電柱とぶつかつて止まっていたがまだエンジンは動いていた。と付け加えて説明した。

「こんな感じですかね……」

彩子さんは僕が話している間、複雑そうな顔をして安奈さんの顔を横目で見ていた。

そして僕が話し終わるとおもむろに肩まで伸びた髪をグシャグシヤとかき乱す。

「ああゝもおゝ……」

僕はその様子を見てからまた安奈さんへと視線を移した。

なんだか……変な気分だ……

今日は本当なら今頃、友達とクリスマスパーティーをやっていたはず。

それなのに僕は今、良くは知らない美少女二人とならんで、知らない男の人のために病院にきている。

しかもこの様子を見たら、安奈さんも彩子さんもあの松本っていう人とは深く関わっているようだ。

特に安奈さんなんかおかしくなっちゃっている……

僕は、何しているんだろう。

不謹慎だけど、なんだかすごく悲しくなった……

第三十話：入院

額の傷は見た目は酷いが全然痛くない。かなりの量の血が出ていたらしいのだが、説明を聞くと頭というのはそういうものだそうだ。それに今は興奮状態らしく余計そう感じるらしい。

それよりも骨折はしていないようなのだが、左腕と後頭部がズキズキと痛む。

左腕は倒れる時とつさに体をかばって地面に着いてしまったから。後頭部は車にはねられた時にそこから地面に落下したから。との事。しかしレントゲンに異常は無く、入院期間中に痛みも無くなるだろうと説明をうけた。

どうやら俺の怪我は本当にたいした事がない。

「これから検査のために3日間入院していただきます。でも退院してからも通院はしてくださいね」

医者は無機質な声でそう言い、隣に立っていた看護師に指示をだす。なにやら忙しいようで、その医者はもう俺を見る事も話しかけることもせずに席を立てて診療室の奥へと姿を消していった。

俺はこれから何をしていいのか解らず椅子の上で茫然としていると、何かの書き物を終えた看護師が「待合室で貴方のお連れ様が待っていますよ。立ち寄りますか？」と話しかけてきた。そしてその「お連れ様」という言葉に少しドキッとする。

安奈…… そうだ安奈。

安奈は今どんな状態なんだ？

泣いているのか……？ わめいているのか……？ それとも、狂っているのか……？

会いたい。安奈に会いたい。

俺はすぐさま「はい」と答え、椅子から腰をあげた。

待合室には、安奈と彩子と……知らない男の子が居た。

俺が待合室に入ると彩子と男の子は立ち上がり、彩子は駆け寄ってきて男の子はオロオロとした様子で安奈と俺をチラチラと見返している。

「えいちゃん私、なんて言っていいいか……」

彩子は俺の額の傷を見て、うつすらと涙を溜める。5針ほど縫ったのでかなり痛々しく見えているのだろう、彩子には珍しくすごく悲しそうな表情をしていた。

「……別にたいした怪我じゃない」

こんな傷なんかどうでもいいんだ。そんな事より、安奈。

安奈はうつむきながら、ただただ小さく口を動かしている。俺が待合室に来た事にも気がついていないようだ。

俺は彩子の肩をぐいっと押しのけ、安奈のほうへと近づいていく。
「君は？」

俺はオロオロしている挙動不審な少年に話しかけた。

話しかけられた事にビックリしたらしく、体を一瞬はねらせ、「あ……あの……えと……」と3度ほどくりかえしたあとようやく「えっと……僕は長谷川啓二つていいます」と答える。

「俺は松本栄太……色々聞きたい事があるんだが」

俺は安奈の前にしゃがみこみ、頭を撫でる。

なんて痛々しい姿……ここまでおかしくなった安奈は俺も始めてみる。

戻るのか？こんな状態から通常の安奈に……

「安奈は……いつからこんな状態になっている？」

こんな状態……という表現だけで伝わるほど、今の安奈は普段の安奈とはかけ離れた印象だ。

うつむき下を見つめている。しかしその目は薄く濁っている印象……瞬きも滅多にしない。

しかも口からは少しだけヨダレが垂れている。それを意に介さないようにブツブツと「ごめんなさい」と呟いている。にちゃにちゃとヨダレを唇に絡ませながら、繰り返し呟いている。

「えと……貴方が事故にあってもものすごく取り乱してしまして……あの……その時はまだこんな感じじゃなかったんですけど……あの……」

齒切れの悪い少年の言葉に、多少イライラする。

耳の裏を掻きそうになる……舌打ちをしそうになる……

俺は一刻も早く知りたいんだ。いつこうなったのか、何故こうなったのか。

そんな俺の心境を察してか、彩子は慌てて駆け寄ってきて俺と一緒ににしゃがみこみ安奈の顔を見て、いつの間にか握りこんでいてしまっていた俺の右手の上にそっと自分の手を重ね、首を小さく左右に振り、話し出す。

「それでね……アパートまで救急車で私を迎えに来て、必死な顔して乗ってくださいって言ったの……その後から。私を連れてこれた事に安心したのか急にガタガタと震えだして……それからもう一時間以上こんな感じ」

言い終わると彩子は安奈の頬を撫でた。悲しい顔をしながら、優しく撫でる。

……しかし、そうか。安奈は狂う事をギリギリまで我慢していた。安奈は、勘違いしていたんだもんね……多分自分じゃあ俺に付き添ったり励ましたりするには役不足だと感じていたのだろう。

だからギリギリまで耐え、自分の役目を終えてから……狂った。

「なあ彩子」

彩子はキョトンとした顔で俺を見た。その拍子に、今まで溜めていたのであるう涙が、彩子の頬を伝った。

「ん……？」

「罪の意識、あるのか……？」

「……うん……ある……」

そうだよな……彩子は、別に鉄仮面という訳では無い。

優しくは無いし無頼ではあるが、人とのつながりは大切にするし

面倒見も良い。

人をからかう事はしても、決して馬鹿にはしない。それが彩子であつた。

このさい、安奈の事を「しょうもない女」と言つた事は、水に流す。仕方ないさ、俺の歳で同棲と言つたら水商売の女かヒモくらいしか思いつかないだろう……

安奈がどういふ奴なのか少しわかつて、彩子も、ちゃんと罪の意識を感じてくれているようだ。

そう、彩子は基本いい奴。彩子が大学に入ってから連絡が一切取れなくなつてこいつの事が信用出来なくなつてしまつていたが……こいつの事をもう一度信用してみよう。という氣になつていた。

「だったらよ……ひとつ頼みごときいてくれ」

「何……？」

「俺は三日間だけ検査入院をしなきゃいけなくなつた」

彩子は小さく「知つてる」ともらす。

「その間、こんな状態の安奈を一人つきりにしておく訳にはいかない……だから」

「……うん……解つたよ……」

次から次へと流れ出てくる涙をぬぐいながら、彩子はそう呟いた。

第三十一話：謝罪

気がつくと、いつものアパート。いつもの部屋の布団の上で、私は啓二君から借りていたコートを着ながら座っていた。

電気がついていて、なにやらおいしそうなニオイがする。

「……………あれ……………」

私はポツリとつぶやいた。

どうにも、記憶があいまいである。

確か私は、啓二君と一緒にアパートに向けて歩いていて、突然松本さんが目の前で事故を起こして、私はものすごく取り乱してしまつて。

私は松本さんの体にしがみついて「ごめんね」を繰り返して、頭から流れる血を止めようと必死に手で押さえて。

誰が呼んだのか、救急車が到着して、隊員さんにアパートに寄るようお願いして。

悔しいけど……………私は別に……………松本さんの彼女じゃないからって思つて……………元鞘さんを連れて行つて……………

「ごめんなさい」と何度も叫びながら包丁でお腹を刺して何度も刺して刺してさしてさして。

その時もやつぱり血が出ないように手で押さえて。

あれ……………？これは違う、これは違う記憶だ。

私のはつきりしない意識で悩んでいる時、突然部屋のドアがキイという鈍い音を立てながら開く。

「あ。安奈ちゃん起きた？えいちゃんの言つたとおり本当に食べ物匂いで起きるなんてねえ」

そこには……………元鞘が立っていた……………少し驚いた表情で私を見ている。

いや、驚いきたいのはこっちのほうだ。なんで、元鞘が……………？

「え……？なんで」

「あゝ、やっぱり覚えて無いんだ。無理も無いけどね」

そう言って元鞘はガスコンロの火を消し、私の隣に「よいしょ」と言いながら座る。

瞬時に嫌悪感が私の中に湧き上がる……そんな近くに、座らないで……そう思うよりも先に私はちよつと嫌な顔をしながらお尻を少し元鞘から離れた。

「あら……すっかり嫌われちゃったなあ」

元鞘は苦笑いを浮かべながら頭をポリポリと掻く。その表情は、少し悲しげに見える……

なんで悲しそうな顔をするのか……だって貴方は、私を邪魔に思っているはず……

「なんで、貴方がここに居るんですか？」

ここは私と松本さんの聖地だった部屋……出来ればあまり知らない人には入ってきて欲しく無い。もし私が追い出される身なのだとしても、今はまだ私の部屋だ。正直、この人にはとくに、居て欲しくない……

私にはもう松本さんとの思い出に浸る事すらも許されないのか？もしかして松本さんはこの人と一緒に住む事にしたのだろうか？私は一人で考える事すらも許されないのか？

ああ……嫌だ嫌だ嫌だ……

嫌過ぎておかしくなる。考えないといけないのに、考えたくない。さつきまで何を考えていたのかがわからない。感情が理性を先行する。

考えたくない考えたくない考えたくない……

「……んゝ、松本君に頼まれたからさあ」

「……嫌だ嫌だ嫌だ……」

「ん……？」

「嫌だ嫌だ嫌だっ……」

私は大声を上げて頭を抱え込むように耳をふさぎうずくまった。

嫌だ嫌だ嫌だ。考えたくない考えたくない考えたくない。

「落ち着いて」

元鞘が私の頭に手をのせた。私は瞬時にその手をはじき返し、もう一度叫ぶ。

「嫌だ嫌だ嫌だ！！ 触らないで！！」

それでも元鞘はもう一度私の頭に手を載せる。今度は無言で、そして少し撫でるように。

私はその手もはじいた。今度は思い切り、渾身の力を込めて、バシンと音になるほどに強く。

「嫌だつて言ってるでしょ！？」

それでもやはり元鞘は、もう一度私の頭の上に手をのせる。無言で、同じ腕を。

痛むはずだ。痛くないはずがない。非力とは言え、私の本気の力をぶつけられたのだ。

それでも元鞘は、同じ手をのせる。もう一度はじかれる事なんてお構いなしのように、私の頭の上に手をのせる。

「……なんのつもりなんですか……？」

私は自分でも驚くほどに落ち着いていた。本当に、ものすごく、落ち着いている。さっきまで錯乱していた私の頭はすっかりと冷静さを取り戻していて、声も自然と穏やかなものが出ていた。

何故……？ どうして……？

「私……最低だったよね…… 安奈ちゃんが怒るのも無理ないと思ってる」

元鞘は優しい声で私に語りかけてきた。本当に、本当に、優しい声で。

そして私の頭にのせていた手をゆっくり撫でるように動かす。優しく、大事そうに、撫でて…… くれている……

落ち着いた私に彼女はまず自己紹介をした。彼女の名前は彩子。岩本彩子と言うそうだ。

「サイちゃんでもサイお姉ちゃんでもいいよ」と笑いながら自己紹介していた。

そして今日病院であった事なんかを簡単に話してくれた。どうやら松本さんは3日間の検査入院をする事になったらしい……

でも心配するような事は何も無く、怪我自体はたいした事がないから安心していいとの事。

しかし頭を打ったという理由で念のため入院しなければならないらしい。

その間、私が一人ぼっちになってしまふのはどうも良くない。という事で、松本さんは彩子さんに3日間だけ一緒に居てくれ。と頼んだそうだ。

正直、一人で居るほうがまだ良かったなんて思ってしまった。

「そうですか……とりあえず安心しました……」

私が無機質な声でそう言うとき彩子さんはニコつと微笑み、立ち上がりながら「お腹すいたでしょ?」と言ってキッチンに立った。

それと同時に私のお腹がググウという音を鳴らす……

「はい……」

少し安心したら、本当に空腹感が私を襲ってきた。思えば朝から何も食べていない。

そう思い、時計を見てみると夜の7時を過ぎたあたり。外はすっかりと暗くなっている。

「今日は……」

今日は、聖夜のはずだった。

今夜は、松本さんにいっぱい甘えるはずだった。

私が始めて作った料理を、松本さんに食べてもらうはずだったのに。

そう思うと、また感情が暴走しそうになる……

そんな事を考えて、もう少しでまた暴れだしそうになるという時に彩子さんは「はい、これ」と言って、お昼に私が焼いていたステ

「キを差し出してきた。おいしそうな匂いの正体はこれだったらしい。」

しかし不思議だ……火を弱くしたとは言っても、ずっと火をかけたばなしだったのに……

「あれ……これって……」

「焼きなおしておいたよ。お腹が減ってると思って」

「もう焦げて食べられないものかと思ってたから……」

彩子さんはまた苦笑いを浮かべる。

「私が火止めておいたの。だって、せっかく安奈ちゃんが……いや、松本君のために作った料理なんだから、焦がしちゃいけないなって思ってた」

「え……？」

彩子さんは頭をぼりぼりと掻いて気まずそうな表情をし、チラチラと部屋のあちこちを見た。あと、意を決したように再び話し出した。

「私はねえ……本当は松本君とまた付き合い始めた訳じゃないんだ」
え……？

「はは……安奈ちゃん怒るかも知れないけどさ……っていうか、むしろ怒って欲しいって思ってるんだけど」

そう言って彩子さんは頭を下げる……

ふかぶかと、本当に申し訳なさそうに……

第三十二話：笑顔

「ごめんなさい」

私がこの言葉を使うのは、何年ぶりの事なんだろうか。

……いや、言葉自体は使っているのかも知れない。そう、無意識下に謝罪の形を装うために使っているのかも知れない。

だけどそれは本当に形だけ……本気で謝った記憶なんて、とうに無い。

心を込めて、本当に申し訳ないと思ってこの言葉を使ったのは何年ぶりなんだろうか。

もしかして初めてなのではないだろうか……と思い、恥ずかしくなる。

「私ね、ただちよつと安奈ちゃんをからかってやろうと思って……あんな事言っちゃっただけなんだ」

うなだれた状態で、私は恥をしのんでそう告げる。

……心の中を、考えていた事を、言葉にするというのは、本当に勇気のいる事なんだな。

自分が恥ずかしくて、情けなくて、仕方が無い。

だけど、言葉にするのをやめてはいけない。これはケジメでもあるんだから。

「まさかこんな事になるなんて思わなかった……ってというのが、私の本心……本当は安奈ちゃんが泣いちゃった後、すぐに帰るつもりだったんだよね」

安奈ちゃんの目は見れない……なんだか、私にはその資格が無いような気がしてならない。せめて伝えたい事を全て伝えてからでないと……目を見てはいけない。

私はただただ思いついた言葉を発していた。安奈ちゃんに謝ろうと思いこの時のために考えていた言葉なんて、もう一切私の頭の中には残ってはいなかった。

「安奈ちゃん出て行っちゃったでしょ……？その時はそれほど焦りはしなかったけど……松本君のあの必死ぶりを見てさ……これはただ事では無いって事によやく……気づいて……」

あ……ヤバイ……こみ上げてくる……

言葉を止めてはいけないのに……また涙がこみ上げてくる……

泣いてしまう前に、もう一度ちゃんと、しっかりと、伝えておかなければならない……

焦るな……つかえるな……しっかりと、伝えるんだ……

「ごめんね……え……安奈ちゃん……」

精一杯の笑顔を作り、安奈ちゃんの顔によやく目を向ける。

安奈ちゃんの顔は、複雑な、どう例えればいいのか解らない……難しい顔をしていた。

決して、目を合わせてはくれない……難しい顔をして私の足元を見ている。

「そつか……そうだったんですか……」

そう言って安奈ちゃんは立ち上がり、キッチンのほうへと向かって歩く。

そしてラップをしてあるもう一枚のステーキを持ち出し、テーブルの上へと置いた。

「……今、ご飯もよそいますから」

「え？」

安奈ちゃんは茶碗をふたつ取り出し、炊飯器をあけて茶碗にご飯をよそつ。

「本当はバターライスにしたかったんですけど……彩子さんもお腹すいてるでしょ……？早く食べましょう」

安奈ちゃんは私と同じように精一杯笑顔を作りながら……私の目を見てそう言った。

安奈ちゃん私の事なんて嫌いで嫌いで仕方ないはずなのに……私のこの謝罪の言葉だって半信半疑みたいな顔をしていたのに……ポツ……と、音を鳴らして私の涙が床に落ちる。

ポツ……ポツと……次から次へと床へと落ちていく……

「こっ……これから三日間しかないけど……仲良くしましょうね……」

安奈ちゃんの声は、涙声になっていた……

その声を聴いて、私ははじける……

わあっ……と一気に涙があふれ出て、安奈ちゃんにしがみつき、

「ごめんね」と叫びながら、泣いた。

「ごめんね！ ごめんね！ ごめんね！」

私は叫び続けた。安奈ちゃんの腰にしがみつきながら、延々と叫び続けていた。我を忘れて、必死に許しを請うた。

「私彩子さんの事………誤解してた………」

安奈ちゃんも泣いてしまっているようで、完全に涙声となっている。グスングスンと体を弾ませながら私の頭にしがみついてくる。

私は……さらに爆発する。今までにこれほど心から泣いた事はな
いと言い切れる。

「あああああああ………！！ ああああああああ………
っっっ………！！」

もう私のこれは声では無くなっていった……咆哮とも言えない
のだろうか、魂の叫びとも言えいいのか……

そんな声にならない叫びを、私は安奈ちゃんに向けて延々とぶつ
け続けた……

気持ちを伝えたくて、心を伝えたくて。叫びに叫んだ。

泣き始めてから一時間が経っただろうか、私はようやく落ち着き
安奈ちゃんと一緒に食卓を囲んでいた。

私はまだ余韻が残っており、ヒックヒックとしゃっくりのように
肩を上下に弾ませている。

「彩子さんがガスを止めておいてくれなかったら、こんなに美味し
いご飯、食べられませんでしたよ」

安奈ちゃんはまったく嬉しい事を言ってくれる。

こんなに健気で優しい子をからかってやろうと思っていたなんて……私はなんて嫌な奴なんだ……と、また自分に嫌気がさす。

「はは」

私はなんて答えていいのか解らず、とりあえず笑っておいた。

「その笑い方ってなんだか松本さんに似てますね」

「……そっかな？」

「うん。目を細めて、ちよつと下を向いてははって笑うんです」

……この子には、本当になわれない。

もし私が安奈ちゃんと同じ境遇にいたら……私はそんな細かい所まで気がついていただろうか？

……私は気がつく訳が無い。というより、意識すらしないはず。

安奈ちゃんにとってえいちゃんが全て。本当に、本当に、愛しているんだな。

なんだかちよつとうらやましい。それは一体どういう感じなのだろうか。

「安奈ちゃんは、偉いねえ」

「え？何がですか？」

「本当に松本君が好きなんだね」

安奈ちゃんは目を丸くして、ポツと頬を赤らめる。

はは……可愛いな。

私も、こうなりたかったな……なんて、少し思ってたまた悲しくなった。

第三十二話：笑顔（後書き）

ここでこのお話の第一部みたいなものが終了です。

原稿はもう既に出てきているのでそれを手直ししてアップするだけなのですが、今回はこのあとがきを書きたいがためだけに急ピッチで過去3話の修正作業をやりました。

そのため文章が矛盾していたり表現不足のような場面があるかも知れません。一応確認作業は行いましたが見落としている可能性が他の話より高いです。発見した場合は遠慮なくお申し出くださいませ。

それでは、今回のあとがきを書かせていただきます。

今回このお話で表現したかった事、伝えたかった事。それらはちゃんと読者様に伝わっているでしょうか。不安で仕方ありません。これらは本来作中で表現しきる部分でありあとがきなどで補足するような事では無いのですが、ひとつだけ言わせておいて欲しい事があります。

このお話はあらずじにも書いてある通り『心を語る、心に問いかけるお話』です。ですのでこのお話で一番表現したい事というのは、それぞれの主人公の心境や思想だったりします。

この第一部の中で表現したいものは最後の話にこそ一番込めてあるのですが、それぞれの話にもそれぞれのテーマや伝えたい事があり、一見無意味なような話もあったかもしれませんが、それでも確かに自分の伝えたい事は書いてきているつもりです。

伝わっているかな？もし伝え切れていないようでしたら、すみません、精進します。

もし訳が解らない部分などがございましたら、すぐにも手直しさせていただきますね。

でも少しでも自分の伝えたかった事が読者様に伝わっていてくれた

ら、ものすごく嬉しいなあ。

次回からもしっかりと「心を語る、心に問いかけるお話」として続いていきます。ここまで読んでくださってなおかつ飽きが来なかった類稀な読者様方、これからどうぞよろしくお願いします。
下書きではもう50話突破してるので、そこんところよろしく。

第三十三話：電話

朝起きて時計を眺めると、7時ちよつと過ぎであつた。

昨日はあまり良く眠れたとは言えない……それでも早く起きてしまふという学生の習性が恨めしい。

「今日から休みじゃないか……」

そう、今日から一ヶ月ほどの冬休み。昼まで寝たつて、誰に怒られる訳でも無い。

寒いし天気悪いし布団から出たくない。

寒いし天気悪いし布団から出たくないのだが、それでも僕はもう一度眠る気にはなれなかった。昨日の事を考えると……じっとしている事が出来ない。

何が出来る訳でも、何をするでもないのだが……ただじつとはしていられず、僕は起き上がり、ノソノソと部屋を出る。

洗面台へと向かい、顔を洗ってハッキリしない頭を目覚めさせた。歯を磨き、口の中もスツキリとさせてみた。

それでも、やはり気分は冴えていない。

昨日の事を考えると、元気なんか出ようも無い。

僕は結局クリスマスパーティーには出席できず、知らない人の付き添いとして病院に居たのだ。

しかもあの松本さんって言う人は、聞くところによると安奈さんと同棲していると言う……

同棲と言うくらいだからもちろん二人は……大人の関係を結んでいないはずが無く……

安奈さんは……あの純情そうな安奈さんは……

そう考えてしまうと、元気なんか出ようも無い。

しかも昨日の僕ときたら、終始オロオロしてずっと傍観者であつた。

話の中心はずつと安奈さんか松本さんで……僕はただずっとオロ

オロとして……目ばかり泳いで……
すっごく格好悪かった。

僕は朝食であるパンをほおばりながら、なんとなくテレビを見ている。

テレビでは朝のニュースでクリスマス特集なんてものをやっていた。

……そういえば、今日がクリスマス本番なんだ。という事に今更気がつく。

しかし僕には彼女も居ないし今更家族とクリスマスを祝う歳でも無い。早い話、今日の予定は特に無い。

あえて言うなら安奈さんとの約束くらいなのだが、安奈さんは昨日のあの状態から元に戻っているのだろうか。

僕は彩子さんに渡されたメモ用紙を取り出す。

彩子さんは「何かあったら連絡してね」と言っ、僕に携帯電話の番号をメモ用紙に書いて渡していたのだ。

電話しようか……と、何度も思い返していた。

確か今日から3日間、彩子さんは安奈さんと同じ部屋で一緒に住むと言っていた。

彩子さんに連絡すれば、僕はまた安奈さんに会えるかも知れない……いや、今日はクリスマスなんだから、三人でパーティーなんて事も出来るかも知れない。

やばい、なんだか胸がドキドキしてきた。無性にテンションもあがる。

電話しよう……僕はパンを食べ終えた時、そう決意していた。

家の電話を手に取り、間違わないようにゆっくりと確実にボタンを押す。

ドキドキが大きくなっていく……

楽しみで楽しみで、朝の憂鬱な気分はもうどこかへと飛んでいっ

てしまっていた。

第三十四話：友達

「それでね、その先輩が私の携帯から松本君の番号消しちゃってさ」

彩子さんは苦笑を浮かべながらそう語っていた。

私は布団の上で寝転がり、枕を顎の下に敷きながら彩子さんのその表情を見て「そうだったんですか」と答える。

「思いのほか束縛するタイプでさあ……松本君と連絡が取れる状態っていうのも許さなくて。しかも毎日私の家に来てたしさあ、居留守せざるを得なくなっ」

彩子さんは食事を済ませた後、いったん自分の家に帰ってから親御さんに事情を説明し、自分の荷物を取ってこの部屋に戻ってきていた。

彩子さんの寝巻きはものすごくかわいらしい柄をしている。ピンクの生地にディベアの模様が無数にちりばめられていた。

話してみて解った事なんだけど、この人、最初のイメージと全然違う。

最初は……自分が可愛いって事を鼻にかけている、高慢で我俣で自分勝手な女の人だと思っていたのだが……いや、事実そんな部分もあるんだけど、なんて事は無い。この人は、普通の女の子だ。

いやむしろ、自分の意見をしっかりと持っていて、一本筋の通った、真面目な印象を受ける。

元気だし、明るいいし、美人だし……そりゃ、モテる。松本さんがかつて惚れていたのも、ちょっと悔しいけど納得してしまった。

「本当はね、松本君にちゃんと連絡したかったんだよねえ……謝りたかったし。嘘じゃないよ？」

「うん、解ります」

私たちは夜通しお話をしていた。

ご飯を食べ終わって彩子さんがいったん家に戻ったあと、帰ってきてから今までずっとお話をしている。

最初はお互いの自己紹介から始まって、次に私の話。やっぱり真っ先に聞かれたのが頭の耳について。

とりあえずピクピクと動かしてみせたら、彩子さんはものすごくビックリしてベタベタと触ってきた。一時間くらいずっといじくられていたけど、不思議と嫌じゃなかった。

そして次に私の過去について、彩子さんの昔話。私と松本さんの出会い。彩子さんと松本さんの出会い。色々な話をした。

そんな調子で、かれこれもう8時間くらい話し続けている。不思議と疲れてはいないし、眠たくも無い。

久々にこんなに会話をしたから、楽しくて仕方ないのだろうか。眠るのがもつたない。もっともとお話をしたい。そう思っている。

「でも私ってば、松本君の事さあ……別に好きじゃなかったって言うか、友達に自慢できるような人だからって理由で付き合ってたんだよねえ」

「松本さん格好いいですもんね。でも……なんだか不快です」

「はは……私って最っ低だなんて、昨日の安奈ちゃん見てたらそう感じたよ」

「うん。最っ低ですね」

私は冗談交じりに笑顔でそう答える。

「あら……言われちゃったなあ……」

彩子さんはまた苦笑いを浮かべて頭の後ろをポリポリと掻いた。私はその様子を見てクスクスと笑う。

なんだか……松本さんと一緒に居る時とは違う幸せを感じる。とっても暖かい気持ちにさせられる。とっても楽しい気持ちにさせられる。

この人はなんだか不思議と心を惹きつける何かがある。心を無防備にさせる何かがある。

知り合って間もないのに、お互いが話せるような共通の話題を選んで話してくれる所とか、細かい事なのかも知れないが、今の私にはすごく嬉しい事だ。

そういった才能はとっても羨ましい事ではあるんだけど……それ以上に私は今、嬉しい。

「ねえ、彩子さん」

私は彩子さんの目を見つめた。

「ん？なに？」

彩子さんは苦笑いの顔のまま私の目を見る。

私の心は今、完全に無防備な状態……

伝えなきゃいけない。そんな気にさえなっていた。

「……友達になってくれて、ありがとう」

私は少し照れながら、でも彩子さんの目をしっかりと見つめながら、そう告げた。

第三十五話：親友

「友達になってくれて、ありがとう」

安奈ちゃんは照れくさそうに、だけど私の目を見ながら、そう言った。

その言葉を聴いて、さきほどの安奈ちゃんの昔話を思い出す……
「今まで生きる事に精一杯で、友達と言える友達というのは一人も居ない」……そう言っていた。

野良犬になつてから長い間一箇所にとどまる事はほとんど無く、知り合い程度の人間はチラホラと居るらしいが、友人となると思い浮かばないそうだ。

私が見る限り安奈ちゃん自身に社交性が無い訳ではなく、自分の運命のせいで今まで友達が出来ていなかったんだと思う。そんな安奈ちゃんに友達と言われた……つまりは、安奈ちゃんにとって初めての友達。

私は今まで友達と言われて、こんなに嬉しく感じた事は無い。本当に、本当に、たまらなく嬉しい。

「もおー安奈ちゃんったら」

私は寝転がっている安奈ちゃんの背中に覆いかぶさりながら抱きつく。

そしてほのかにシャンプーの匂いのする犬の耳をまた性懲りも無くいじりだした。

「ちょっと彩子さん……重い」

安奈ちゃんは苦しそうな、だけど、少しだけ弾んだ声でそう言っている。

ああ……もう駄目だ。嬉しさが、爆発する。

「安奈ちゃん……私もだよ……」

「ん？ 何がですか？」

「私も……安奈ちゃんと友達になれて、本当にすごく嬉しいよ

」

言葉に出来ないほどの嬉しさなのだが、文字通りどう言葉にしているのか解らない。「本当に」と「すごく」しか思い浮かばない……

もつと上の表現があればいいのに……もつと沢山の気持ちを伝えたいのに……すごくもどかしい。

私はそのもどかしさを表現しようと、安奈ちゃんの首に腕を回し、ギュウツと抱きしめる。

もつともつと近くに……そう、親友に。安奈ちゃんと親友に、なりたい。

「安奈ちゃん……私はずっと安奈ちゃんの友達だからね」

「あはは。はい」

「何があつても安奈ちゃんの肩を持つよ。どんな場合でも、安奈ちゃんの味方だから」

「……彩子さん」

「ん？何い？」

「……彩ねえって呼んでいいですか？」

安奈ちゃんはそつと私の手を握り返し、また照れくさそうにそう呟く。

「そんな可愛い事ばつか言ってるやうぞお」

私はわざとらしく、ふざけた声で安奈ちゃんの耳元でそう答えた。しかし本当に、それくらい、安奈ちゃんは、最高だ……

安奈ちゃんとじゃれあっている時、テーブルにおいてあつた携帯電話が突然ブルブルと震えだす。

始めはメールだと思ったので無視しようとしていたのだが、この長さはどうやら電話のようだ。

私は「もお……」と呟き、面倒くさくなりながらも寝転がった状態のまま這つて携帯電話を取りに行く。

着信を見てみると……見た事のない番号。

見た事のない番号からかかってくる心当たりは、今の所ひとつだけ。

私は再度機嫌を取り戻してその電話へと出た。

「はあゝい」

『あの……僕です……長谷川啓二』

やはり私の予想通り、電話の相手はけいちゃんだった。

けいちゃんは相変わらずしどろもどろとしているようで、名前を名乗るだけでも苦勞しているようだ。

まったく……純情というか若いというか……

「解ってる解ってる。で？何かあったの？」

『あ……いえ別に……あ……別についていうか……安奈さん……どうなったかなって……』

「安奈ちゃん？」

あ、そっか。

けいちゃんはまだ安奈ちゃんがおかしくなったままだと思っているんだった。

けいちゃんは安奈ちゃんに惚れているからずっと心配していたのだろう。ちゃんと伝えておかないと……

……と、思ったのだが、私はやっぱり性格が悪いようで、黒い感情がむらむらとわきあがってくる。

あゝどうしよう。なんて言おう。

わくわくする。

「それがさあ……安奈ちゃん、一晩たつてもあの状態から戻らないんだよね」

私は安奈ちゃんの顔を見てニヤニヤとする。当の安奈ちゃんは誰と話しているのか解ったようで「もう……」と困った顔して笑っていた。

『え……やっぱり……そうなんですか……』

「なんかねえゝ私一人じゃどうにもならないみたい。えいちゃん……松本君のアパートわかるでしょ？無理にとは言わないけど、出来

れば来てほしいなあ」

けいちゃんは「えっ!？」と大きな声を出して「あ………」
「だとか………」
「だとか迷っているようだったが、私が「お願い」と
言うとおっさり……」
「はいわかりました」と答えた。若いつてすば
らしい。

「それじゃあ私待つてるから。すぐ来てね」

最後に私はそう言つて電源ボタンを押す。

通話が切れた後、私は「あはは」と笑つて携帯をポイッと布団の
上に投げ捨てた。

「もお……彩ねえつてば懲りないんだね……」

安奈ちゃんは相変わらず困った顔をしながら笑っていた。そうは
言つても安奈ちゃんもちよつとワクワクしているらしく頭の耳をピ
コピコと動かしている。

「あはは。今更生き方や性格やらは変えられないからねえ」

私はケラケラと笑った。

第三十六話：少年

言葉が、でなかった。

「おはよ」

そう言いながら玄関先まで僕を向かい出てきてくれたのは安奈さん本人だった。

黒いＴシャツに黒いスウェットのズボンをはいて、なんでもないような顔をして僕の顔を見ながら挨拶をする。

「はあ……はあ……え……？」

走って来たので息が乱れている……とりあえず息を整えないと……
「はあ……はあ……」

僕は深呼吸を何度か繰り返す。

しかし無理に今の状況を考えようとすればするほど乱れた呼吸を整えるのは難しい……

「あ、水飲む？」

安奈さんは何故か左手にペットボトルの水を用意していた。それを僕に「はい」と言いながら手渡す。

「……え……？　なんで……」

「啓二君絶対走ってくるから渡してあげなくて、彩ねえが」
ちよつと待てよくわからない。

安奈さんは何を言っているんだ……？

「安奈さん……あの……大丈夫なんですか？」

「ん？何が？」

安奈さんは本当になんでもないようにキョトンとしながら目を丸くさせる。

いったい何がどうなって……？

「けいちゃん、いいから早く入りなよ」

部屋の後ろから彩子さんが大声で僕を呼んでいる。

少し笑いを含んだ、なんだかいやらしい声で。

「あ……」

これは、一杯盛られたか……という事に、この時ようやく気がついた。

「酷いですよ、彩子さん……」

僕は本当に心配して来たっていうのに……彩子さんは布団の上に座りながらケラケラと笑い自分の足をバシバシ叩いていた。

「いやあ……だってさ、まさかここまでうまく行くとは思ってなくて。いやいや、ホント若いっていいね」

安奈さんも一緒になって笑っていた。クスクスと、少し品を感じさせる。

なんだかなあ……僕は昨日からずっといい所が無い。

「クスクス……でもごめんね。いっぱい心配かけちゃったよね」

安奈さんは笑顔の中に少しでもだけ申し訳なさそうな色を出して、両手を合わせてペコッとお辞儀をする。

……やっぱり安奈さんは優しい。彩子さんとはちよつと違う。

「まあま、せつかく来たんだからとりあえず座りなよ」

そう言つて彩子さんは自分の隣をポンポンと二回叩いて座る場所を指示する。

ちよつと待て、さすがにそこは近すぎる……それにここはさっきまで貴方たちが寝ていた布団なんだろ？座っていいものか……

そう僕が思い悩んでいると安奈さんが「そうだね。せつかく来てくれたんだから少しくらいお話しよ？」と言い、彩子さんから少し離れた場所に座つて、やはり同じように自分の隣をポンポンと二回叩いた。

安奈さんが叩いた場所も彩子さんが叩いた場所と同じ場所……

つまり僕は……美少女二人に挟まれるように座る事になる訳だ。

「……またからかってますね？」

彩子さんは「ん？」といいながら不思議そうな顔をする。これもどうせ演技だろうが……

僕はちよつと不機嫌になりながら、少しだけ安奈さんと彩子さんに近づき、指示された場所ではなく二人から少し離れた場所に座った。それでも布団の上ではあるのだが……あからさまに遠くに座るのも違うと感じる。

「ここでいいです」

「ふうん……そっかあ」

彩子さんが残念そうな声を漏らしてゴロンと寝転がる。

安奈さんはその姿を見て笑顔と困った顔の中間のような顔をして「もう」と呟く。

本当に「もう」って感じた。まさかここまで本性をあらわにするなんて。

彩子さんの格好はというと赤に近いピンク色の、クマ柄のバジヤマ……男が来るというのに パジャマだなんて……というか、安奈さんのおおそらく眠るための格好なのだろう。楽そうな服を着ている。

なんだか、自分はまだ一人前の男だと認められていないような……そんな印象を受けた。

第三十七話：平穩

まったく彩ねえは……私と二人っきりの時はそれでもいいかも知れないけど、今は啓二君が来ているというのにだらしな性格好をしている。

……困ったお姉さんだ。

「彩ねえ。今は啓二君が来てるんだから……」

私は彩ねえのパジャマをぐいぐいと引っ張って起こそうとする。

「ん？ いやだつてさ、知り合ったばかりだと言つても堅苦しい事ばかりしてたらいつまでたつても仲良くなれないじゃん。だからけいちゃんも安奈ちゃんもいつも通りにしたほうがいいと思うよ」
彩ねえはそう言つてガバツと起き上がって私とけいちゃんの顔を見比べる。

「せっかく友達になつたんだからさ、楽しく過ごそうよ」

そう言つて彩ねえはニコッと笑つて啓二君の顔を見つめた。

啓二君もまんざらじゃないようで、困惑しながらも「あ、はい」と言つて微笑みを浮かべている。

……なるほど、やっぱり彩ねえはすごい。と関心した。

啓二君の顔からは緊張の色が抜け、少しリラックスしたような印象を受ける。

これが私を惹き付けた彩ねえのカリスマ性というか……人の心を無防備にするチカラ。

なんだかとても羨ましい。けどものすごく頼もしい。
本当にあこがれる。こんなすごい女性、今まで見た事ない。

それからは、私たちはそれぞれゴロゴロと過ごしていた。
座っている啓二君を中心に私と彩ねえが寝転がり、世間話をする。
啓二君もずいぶんこの場に慣れてきたようで、もうオロオロとする事はなくなっていた。

なんだか……とっても楽しい。

「けいちゃんって早く大人になりたいクチ？」

「……そうですね。時々思ったりします」

「やっぱりね、そんな感じしたよ。でも人生経験の豊富なお姉さんから言わせてもらうと、大人になったらかなり焦るよ。私なんか来年の4月でもうハタチだしねえ。ハタチだよハタチ。解る？この焦り」

彩ねえはそう言っただけをチロツと睨む。

「まあ、見た目は安奈ちゃんのほうがよっぽど大人びてるけどね」
確かに……という言い方は失礼かも知れないが、彩ねえは黙っていれば中学生でも通るような容姿をしている。

小さくて、綺麗というより可愛い系の顔立ち。体も細く、正直に言うとおもったんこ。

とても中身と外見のギャップが激しい人だ。

「そんな。彩ねえは素敵ですよ」

私はニコッと笑いながらそうフォローする。

いや、フォローという言葉には語弊がある……私は本気で彩ねえを素敵な女性だと思っているんだから。

彩ねえは一瞬微笑んで優しい顔をした。

「安奈ちゃんは優しいなあ。容姿端麗、性格良好。私が男だったらほっとかないわ」

そう言っただけ彩ねえはいやらしい目をしながら啓二君を見つめる。

私もつられて啓二君の顔に目をやると、なんとも複雑そうな表情をしながらうつむいていた。

……彩ねえはこういう事には非常に鼻が利く。どうやら啓二君が私に気があることに気がついているようだ。

「……まあ、安奈ちゃんには松本君が居るしねえ」

そんな追い討ちをかけるような事、わざわざ言わなくても。

彩ねえは確かに素敵な女性ではあるのだけれど、性格は捻じ曲がりすぎているようだ……

私は「あはは」と小さく笑い、
気まずい空気に耐え切れず枕に顔をうずめた。

第三十八話：年代

私はニヤニヤしながらけいちゃん表情を伺っていた。

どうやら深く思い悩んでいる。

ちよつとイジメすぎちゃったかな…と、少し思っただけ私口を開いた。

「それはそうと、安奈ちゃん、昨日の夜もちよつと話したけどさ」
私がそう話し出すと安奈ちゃんは「はい？」と言いながら枕から目だけを出して私を見る。

けいちゃんもまだちよつと暗い顔をしていたが、私の顔を見ているようだった。

「昨日の夕方さ、安奈ちゃんおかしくなつてたでしょ？その時に安奈ちゃんをタクシーに乗せるの大変だったんだから」

安奈ちゃんはそれを聞いてようやく枕から顔を全部出して「あ、はい。本当に迷惑かけてごめんなさい」と謝る。しかしその表情は少し笑顔が混ざっていた。

「いやいやいいのいいの。私はほとんど手を添えてるだけだったから」

そう言っただけでケラケラと笑う。そして笑いながらチラッとけいちゃん顔をのぞいてみると、少し頬を赤く染めていた。

「けいちゃんね、頑張つて運んでくれたんだよ。やっぱり男の子、いざって時には役に立つよねえ」

私は拍手をしながらけいちゃんを賛美する。少し大袈裟かも知れないが当のけいちゃんは照れながら「いや……そんなたいした事じゃないよ……」と言っている。どうやらまんざらでもないようだ。

「ううん、本当にありがとう。知り合つて間もないのにいっぱい迷惑かけちゃったね……」

安奈ちゃんはそう言い、申し訳なさそうに頭を下げる。

やっぱり、安奈ちゃんは良い子だ。そしてけいちゃんも、良い奴

だ。

二人ともまだ幼い。私より5つも年下。でもなんていうか……そんなもの、関係無いような気になってくる。

私は兄弟も姉妹もない一人っ子だからだろうか、5つも年下だともう何を考えているのか解らないのが普通だと思ってた。世代が違うと思ってた。通じ合う事なんて出来ないと思ってた。

でもなんてことは無い、やっぱり、いい奴はいい奴。

「いいじゃん、迷惑なんていっぱいかければ」

私は自然と声を弾ませ、ニコニコしながらそう言っていた。

「けいちゃんも私も、安奈ちゃんの迷惑を迷惑だなんて思っていないからさ」

安奈ちゃんは申し訳なさそうな顔半分、嬉しそうな顔半分の微妙な表情を浮かべながら「あはは」と笑った。

けいちゃんが来て二時間くらいたっただろうか。時刻は9時30分を過ぎたあたり。

「さて……そろそろいい時間だし、お見舞いに行く？」

私はそう切り出してその場に立ち上がった。

安奈ちゃんは「あ、そうですね」と言っていたが、けいちゃんの表情がどうにも暗くなっている。

複雑なのは解るが、そんなあからさまに暗くならなくても良いだろうに。

「けいちゃんは？どうする？」

私がそう話しかけるとけいちゃんは頭をビクツとあげ、安奈ちゃんの顔を見た。

嬉しそうな安奈ちゃんの表情を見て、けいちゃんの顔はさらに影が濃くなっていく。

まったく……若いといつかなんといつか……

見かねた私はため息をひとつついて、けいちゃんの頭をポンと叩く。

当のけちゃんはビックリしたようで、目を大きくさせながら私の顔を覗き込んだ。

「あんさあけいちゃん、はつきり言うておくよ」

「……は、はい。なんです？」

私はもうひとつ浅くため息をはく。

「けいちゃん、来ないほうがいいと思う」

第三十九話：意地

僕は結局、彼女らの反対を押し切る形で病院へとやってきてしまった。

僕なんかが来た所で松本さんっていう人の何か力になれるという訳でも無いのに。

いやむしろ、僕の事を嫌っているのでは無いだろうかと思う。

だって……僕は松本さんの目の前を安奈さんと一緒に並んで歩いてたんだ。松本さんはまだ僕と安奈さんの詳しい事情なんて知らない。嫌っているに決まっている……

「来ないほうが良い」って、彩子さんに言われた。そればかりか「帰ってきたらまたお話しよう」って、まるで僕は行かない事が決定しているかのように安奈さんに言われた。

それなのに僕は、着いて来た。自分でも解っている。ただただ疎外感を受けるだけだった。

でも、なんか悔しいじゃないか。自分だけ蚊帳の外みたいで。

昨日から味わっているこの感覚……少しでも無くしたい。だから僕は「着いていく」と言ってしまった。

病院に到着し、彩子さんが受付で松本さんの部屋番号を聞いている。お見舞いなんかした事無いと言っていたのに、スラスラと用件を言つて、あつという間に聞き出してしまった。

「4階の5号室だった」

こちらを振り返りニコツと笑ってそう言っている。さも当たり前のような顔をして「んじゃいこう」と言つて僕と安奈さんを従えてどンドンと迷い無く先に進んでいく。

……僕は初めてこの人と話した時から感じていた事を改めて感じさせられた。

この人は……すごい。僕と正反対の精神構造をしていると思う。

僕が同じ用件で受付に話しかけても彩子さんの倍以上時間がかかるのは目に見えている。「あゝ……」だとか「うゝ……」だとか言
って戸惑ってしまう自信がある。

すごいとは思うのだが、彩子さんのそういう部分、なんだか嫌だ

……

ついさっき、安奈さんの部屋に居た時、彩子さんに言われてしま
った言葉を思い出す。

「けいちゃん来ないほうがいいと思う。嫌な思いするのはけいちゃ
んだし、もっとハッキリ言々と安奈ちゃんと松本君の邪魔になると
思うんだ」

……確かに、それは解る。松本さんには安奈さんが要だし、安
奈さんにも松本さんが要なのは、昨日のあのやり取りを見ていれ
ば良くわかる。これから二人は恋人同士のようにイチャつくだろう。
そんな光景を見るのは、とても嫌だ。

それに二人には僕なんかが入り込めるような隙は微塵も無い。強
い絆……とでも言えばいいのか、そういうものすらを感じる。僕は
不穏分子だって事も、解っている。

でもさ……安奈さんの前で言うような事じゃ無い。

それに僕が着いていくかどうかを決めるのは……やっぱり僕だ。
なにに対してもハッキリしていて、裏表が無くいつも堂々として
いるのが彩子さんの良い所なんだろうけど……そういう人は正直、
ちよつと苦手。

僕はずんずんと進んでいく彩子さんの後ろ姿を見ながら、そんな
事を考えていた。

「5号室……つと、あそこだ」

4階でエレベーターを降りてすぐ右に進み、突き当たりをまた右
に曲がってしばらく歩いた場所にその部屋があった。

それにしてもクリスマスだと言うのに……いや、クリスマスだか

らなのだろうか、どの部屋もお見舞いへ訪れにきた人達が沢山いる。
「……人がいっぱい居ますね」

昨日の夕方はこんなに込み合っではいなかったのに……今日が休日だという事も関係しているのだろうか。

「……？ 何言ってるの啓二君……？」

安奈さんが不思議そうな顔をして僕の顔を覗き込みながらそう言うってきた。

僕は思わず「え？」と安奈さんに聞き返す。

「何言ってるって、正直な感想……」

そう言った矢先、彩子さんが少し不憫そうな顔をしながら僕を見る。

そしておもむろに近づいてきたかと思うと、僕の手を取って5号室から少し離れた場所まで引っ張っていく。

「ちょ……彩子さん……なんですか……？」

彩子さんは安奈さんから離れた所でようやく僕の手を離れた。そして真面目な目をして僕の顔を見る。

「……けいちゃん、正直な感想を言っ、どうするの？」

「え？」

どうするって……別にどうもしない。

「……松本君に会うのが嫌なら、一階の待合室で待ってて」

「……え？」

「気づいてたよ、けいちゃん、さっきから関係ない事ばかり考えてる」

関係無い事……

「けいちゃん、貴方はいい奴だよ。だけどね……」

……彩子さんの目が僕の顔を見るのをやめて、安奈さんの居るほうに向けていた。

「私も、解るんだ。けいちゃんの気持ち。だけどね、言っておくけど今のけいちゃん、ものすごく失礼なんだって、自分で気づかない……？」

失礼って……そんな言葉、彩子さんに言われるとは思ってもみなかった。

なんだ……？この人は何を言っているんだ……？

「安奈ちゃんにとっては今すごく大切な時間なのよね」

それは解る……けど。

「安奈ちゃんは、表情にも話題にも出さないけど、自分が松本君に怪我させたと思っている。安奈ちゃんはものすごく自分を追い詰めていて、放心状態にまでなってしまった。そんな安奈ちゃんが松本君の事故後に、始めて正気な状態で松本君に会うっていう大事な時なの」

……解る……けど……

「そんな安奈ちゃんに『人がいっぱい居る』って……場違いすぎて見てられなかったのよ」

「場違いすぎて……」

「一階の昨日居た待合室わかるでしょ？あそこで待ってて」

なんだよ……それじゃあ結局僕はまた蚊帳の外じゃないか……

僕の中で、怒りの感情が湧き上がる。心臓から焚きついた小さな火が、徐々に全身へとまわっていく感じ。

「あの……彩子さん……失礼ですけど、それは貴方が決める事じゃないですよ」

彩子さんはもう一度僕の顔に目を向きなおす。その目は、少しだけ怒っているような印象を受けた。

「そう……じゃあ解った。私もあの部屋には行かない。けいちゃんと一緒に待合室で待ってる。それじゃ駄目？」

……いや、意味が解らない。何故彩子さんが部屋に行かない事が取引になると言うのだろうか。

行きたくなければ行かなければいい。でも僕は行く。何故なら安奈さんの事で疎外感を受けるのは嫌だから。

別に安奈さんと付き合いたいって訳じゃない。関わりたいんだ。ただそれだけ。

芸能人とかにもよく居る追っかけ。ようはファン。何かしらで関わりたいたんだ。

それを止める権利は、彩子さんには無い。

「駄目ですよ」

この僕の言葉を聴いて彩子さんは肩の力を落としたようで急になで肩になる。

僕へと向けられていた視線も、いつの間にか地面へと向けられていた。

「そ……っか……まあ、電話くれたのは啓二君だけど、呼び出したのは私だしね」

そう言って彩子さんは僕の横を通り抜け、5号室へと向かって歩く。

「啓二君がなんかやつちやったら、全部私が背負うよ」

そう言って彩子さんは後姿のまま右手を力無く上げ、ひらひらと振っていた。

しかし、なんかやつちやったら……って。僕が何かをするとでも言うのだろうか。

別に僕は気まずい空気の中、小さくなりながら安奈さんと松本さんの会話を聞くくらいの事しかないだろうに。

そう思いながら僕も彩子さんの後ろをついていく。

しかし、何故だろう。何故僕はわざわざ気まずい場所へと赴く事に対して意地になっているんだ？

出来れば行きたくないって思ってたのに。どうして意地になる？

そんなに蚊帳の外が嫌か？

答えは出ないまま、僕は5号室へと足を踏み入れていた。

第四十話：接触

安奈……

「安奈……」

安奈がお見舞いに来てくれた。安奈の顔を見た瞬間に、思わず目が熱くなる。

安奈は正気を取り戻したらしく、しっかりと足取りで彩子と一緒に病室へと入ってきた。

「松本さん」

安奈は俺の顔を見つけると急ぐようにかけよってきた。そしてすぐさま俺の頭の包帯を手で撫でる。その表情は、悲しそうながらも少しだけ笑顔も混ざっているような、そんな顔。

「松本さん痛い……？」

「……痛い。昨日はそんなに痛くなかったんだけどな。今日は痛い」
安奈は「ああ……」と言って黙り込む。顔にはもう悲しみの色しか浮かんでいなかった。

俺はベッドから体を起こし、頭に触れていた安奈の手を取る。

少しひんやりとしている安奈の小さな手は、何の抵抗もせずただただ俺の両手に包まれた。

「……松本さん……？」

俺は顔を伏せて「はは」と笑う。

「本当はよ、抱きしめたいくらいなんだ……」

安奈の表情はまた一転して驚いたような顔になり、同時に薄く頬を赤らめた。

そんな安奈の顔を見て、俺はまたひとつ「はは」と笑う。

「この怪我は、お前のせいじゃないからな」

俺は一番伝えたかった事をまず伝えた。安奈は、少し申し訳なさそうな顔をしていたが、俺のこの言葉に対して小さく「ありがとう」と呟いた。

俺は安奈の手を握ったまま数分黙り込んでいた。安奈も同じように黙り込む。

もうしばらくこの状態でいたい……そう思っていた矢先、この静寂を切り裂くように昨日安奈と一緒に歩いていた少年が突然視界に入ってきた。

俺はその少年に視線を移し、見つめる。

その少年はオドオドとしながらも、確実に俺のほうへと近寄ってきていた。

「あ……え……えいちゃん、あのね」

突然彩子が駆け寄ってきて左手で少年の歩みをさえぎる。

彩子のこんな焦ったような表情は、センター試験の前日以来だ……なんて思った。

「えつとき、昨日安奈ちゃんと一緒に啓二君が歩いてたのはね、別に何でもない事です。今日だって私が無理言っについて来てもらっただけなんだよね」

「そうか……」

俺がそう言うと同時に、その少年は彩子の腕を軽くいなし、安奈の隣へと歩いてくる。

ちよつとだけ挙動不審に瞳をキョロキョロとさせて、ただただ立ち尽くしていた。

決して、目は合わせてくれない。

「啓二君……あのさ……」

安奈はそう言い、俺の手を握る力が強くする。グツと、とても力強く握り返してくる。

とても申し訳なさそうな顔をして、唇をギュッと閉めていた。

「啓二く」

「松本さん。あの……ちよつとお話があるんですけど」

安奈の声をさえぎるように、少年は少しか大きな声でそう言った。

相変わらず、目は伏目がちにキョロキョロとしている。

あわてて彩子が駆け寄り少年と俺の間に入ろうとするが、この少年はそれを許しはしなかった。グツと俺に近づき、彩子の侵入を防ぐ。

「ちよっ……啓二君！」

彩子は自分の声が大きい事に気がつき、慌てて自分の口を手でふさいだ。

それでもなお彩子は話すのをやめない。

「……啓二君、何を言うつもりなのか知らないけどさ、しばらく安奈ちゃんと松本君二人つきりにしてあげない？」

しかし少年はこの必死な彩子を見無視し、「松本さん、お話があります……」と再び言い直す。

その姿を見て彩子は右手で前髪をかきあげた。その表情は呆れた顔そのもの。

「……いいけど、何？」

俺はそう答えた。少しだけ迷惑と感じてはいるが、別に、断る必要もない。

それにこの少年はちよっただけとはいえ、俺と安奈に関わっている。邪険にするのもなんだか違う気がした。

「えと……安奈さん……が……あ、昨日僕が安奈さんと出会った時、安奈さん、少しおかしくなっていました……」

俺は「そうか」とそっけないトーンで答えた。

「そ……そうかって……」

少年は初めて俺と目を合わせた。その目は、少し怒りが籠っているように思える。

「安奈さん……サンダルを履いてトレーナー一枚で震えながら……歩道の隅っこでしゃがみこんでたんです」

「……へえ……」

「……っ！……へえって……！」

少年の声が突然大きくなった。どうやら俺のこの態度が気に食わ

なかったらしい。

それでも俺は相変わらずのそつけないトーンで「他になんて言えば満足するんだ……？」と返答した。

「なんて答えたって満足なんてしませんよ！ 一体何があったんです！？ 安奈さんおかしくなってますよ！？ おかしくなるって、そんなの普通じゃないですよ！」

彩子が突然目をカツと見開き、少年の着ていたコートを思いっきり引つ張り少年をその場から離す。

突然の出来事だったので少年は彩子の貧弱な腕力に屈し、後ろへとよたよたあかずさった。

「……大きな声だしてるんじゃない……」

彩子は少年のコートの襟を掴み自分に引き寄せ、ものすごく怖い顔で少年の耳元でそう言った。そして彩子はコートの襟を掴んだまま少年を引つ張って病室から出て行くとする。

しかし少年の頭も沸騰状態なのだろう、彩子の腕を乱暴に振り解き、再度俺の顔を緩く睨みつけた。

「貴方がやっただろ！？ 安奈さんをあそこまで追い込んだのは、貴方なんだろう??」

安奈は困ったような顔をし、「啓二君……っ！ 静かにして……!!」と、少し怒ったような声で少年をなだめた。

……今、この少年の剣幕を目の当たりにして、急激に理解した。

この少年は安奈に関わりたかったんだ。安奈に関心を持ってもらいたかったんだ。そして自分の中の正義を振りかざしたかったんだ。俺を追い込みたいんだ。無意識なのかも知れないが、そんな印象。

しかし残念ながら、この思想、この感情、この行動、そしてこの正義、全てが勘違いだ。仮に安奈がおかしくなったのが俺のせいだとしても、俺にそれを言っただけでどうなる？ その後どうしたいのか？

何故、安奈がおかしくなったのか。この少年と出会った時も、俺が事故った時も。

少し考えたら、自然と答えが出てくるだろうに。安奈がおかしくなった事が解っているのに、この少年には「何故」を考える力が無いらしい。

何故、おかしくなったのか。それは、俺の存在が安奈のなかでありにも大きいからだろう。

そんな安奈に気付けないのか。この少年の言う事は、逆に安奈を追いつ込んでいる。

もしここで俺が安奈をおかしくさせたという罪の意識から「もう安奈とは一緒に住まない」と言ったら……？ この少年は、どうするつもりなのだろうか。感情的になる事のリスクをこの少年は知らないらしい。

この少年は以前の俺の逆の思想。だがしかし無関心という点では同じだろうな。

以前の俺は安奈に無関心であった。本当に、無関心を絵に描いたような無関心だった。そしてこの少年は、安奈にもものすごく関心を持っているように見えるが、本当の所はやっぱり無関心なんだ。「本当に大事なのは自分だ」と自ら言っているという事に気づけていない。

「はは」

俺は笑う。

「な……っ……何を笑っているんですか!？」

「はは……いやぁ……なるほどな……」

俺は小さく「フフフッ……」と笑い続けていた。

第四十一話：対話

松本さんは「フフフ」と小さく笑い続けている。

笑ってはいるのに、その顔はなんだか悲しそうな印象を受けた……私はしばらくその様子を眺めていた。一向に収まらない笑いに、どうしたのかと思いい心配になる。

「松本さん、どうしたの？」

私のその質問に松本さんは右手を私の前に差し出して「ちょい待って」と言い、また笑い出す。

「フフフフ……参ったなあ……恥ずかしい限りだ、中学生に叱られるなんて」

私は松本さんのその言葉を聴いてハツとなり、もう一度啓二君のほうを向きなおす。意識して、冷たい表情を作りながら。

「啓二君……悪いんだけど、外に出ててくれる？」

私は冷たい声で啓二君にそう告げた。

そうだ。なんで啓二君は松本さんを責めたてているのか。誤解があるのは解っているけど、なんで松本さんは啓二君に叱られなければならぬのか。正直すごくむかつく。

そりゃあ迷惑はいっぱいかけたし、色々な事に巻き込んでしまった。私の事を意識しているのも気がついていいるし、啓二君の気持ちもわかる。それでもここで騒ぐのは最も違うと思うし、啓二君には松本さんを責める権利なんて無い。昨日今日知り合った人間に私達の事をどうこう意見して欲しくは無い。正直言って、かなり迷惑だ。「……迷惑だから……周りの人にも……私達にも」

私はそう言って再び松本さんに視線を戻し、パイプ椅子に腰を下ろす。

そう、今の私には啓二君に関わっている余裕は無い。頭の中は、松本さんの事でいっぱいだ。松本さんの怪我の具合がどれほどのものか、本当に完治するのか、痕は残らないのか、ものすごく気になる。

る。

「ごめんね松本さん……うるさいと頭に響く……?」

そう言って私はまた松本さんの頭に手をのせる。

松本さんは昨日おそらくお風呂に入っていなかったのだろう、髪の毛が多少ゴワゴワしていた。

「フフ……いや……別に、大丈夫」

松本さんはそう言って、私の手をやさしくふりほどく。真剣な目をして、また啓二君を見つめていた。

「はあ……啓二君って言ったな」

私もつられて啓二君の顔を見た。

啓二君は……声をかけられた事に少しビックリしたようで、落ち込んだ顔をしつつも口を半分開きながら目を見開いて松本さんを見る。

「なんですか……?」

「場所変えてさ」

松本さんはそう言い、ベッドの下においてあったスリッパに足を通す。

そしてゆっくりと立ち上がり、出口のほうへと歩いていった。

「少し話そうか」

松本さんは少し笑顔を浮かべながら、私達を呼び出すようにチョイチョイと手をまねく。

「向こうに簡易食堂みたいなのがあるんだ。そこで話そう」

私達はポカンとしながらも、松本さんの背中を見失わないように着いて歩きだしていた。

5号室の病室から歩いて一分もしない場所に、簡易食堂はあった。簡易食堂とはよくいったもので、売店の隣にただテーブルがズラツと並んでいるだけ。自動販売機も無い。

つまりは売店で何かを買って、ここで食べるという事なのだろう。こんな場所でも溜まり場としてはもってこいのように、人もチラ

ホラと居る。しかし無駄に広いだけあつて席は存分に余っていた。私達4人はなるべく人の居る所は避け、一番窓際の席へと着席する。

「……話ってなんですか？」

私の斜め向かいに座っている啓二君が私の左隣に座っている松本さんに話しかけた。

その表情はさきほどとは違い、少し落ち着きを取り戻しているような印象を受ける。

「俺が偉そうに話すのもなんだが……よ」

松本さんは私のほうをチラッと見る。そして少しだけ悲しい表情をした。

「君に安奈の相手は無理だと思う」

松本さんはそう言つて啓二君の眼を強い視線で見つめていた。決して睨んでは居ない。強く、見つめている。

……そして私も、その意見には同意せざるを得ない。とてもじゃないけど、啓二君には……私の闇は見せられない……

彩ねえにはちよつとだけ話したけれど、全部じゃない。松本さんが知っている事の半分くらい。松本さんだつて全部は知らない……いや、話せてない事のほうが多いくらいだ。

信頼している松本さんにさえ話せないというのに。啓二君には……

……申し訳ないが、正直な所話したくない。

「無理つて……どういう意味ですか？」

啓二君は不機嫌そうな表情を浮かべ、松本さんに問いかける。

たぶん啓二君は勘違いをしている。私が啓二君を決して好きにはならない。みたいな風に思っている。

……いや、良く考えたらそれも間違いでは無いが……でも、今はそういう意味ではない。

「なんだろうな……若いつていうのが一番適切だとは思うんだが……」

「若いつて、僕は安奈さんと同じ年ですよ」

「同い年のように、感じているか？」

そう言われ、啓二君はハッと目を見開いて私を見た。

私も思い返してみると、啓二君を同い年だと意識した事は一度も無い。

身長は私より低いしいつもオドオドしており挙動不審。いい人ではあるが、やはりどこか頼りない感じがする。

言われて見ると……私は啓二君の事を心のどこかで少し子ども扱いしていた。

男として見ていなかった。とでも言えばいいのだろうか。おかしくなつてた時くらいだ、愛して。と思つたのは。あの時は、とにかく愛が欲しかったし……彩ねえに松本さんをとられたと思つてたし……特殊な状況だった。

それが過ぎて、今朝啓二君が部屋にやつて来た時、もうそんな事は微塵も思わなかったし、啓二君にどう思われたいかなんて考えてもみなかった。

つまりは、そういう事なんだと、思う。

「安奈はなあ……気付いてると思うが、不思議な奴なんだ。妙に落ち着いてる部分もあるし、突然感情的になつて子供のようにはいだり泣きじゃくつたりする」

「そうですね……」

「君は、何故安奈はそんな風になつたのかつて、考えた？あ、そもそも、何故コンビニで14歳の少女が学校にも行かずアルバイトをしているのかつて、考えた？」

啓二君はうつむいて歯を力チ力チと鳴らし始めた。目はテーブルのどこか一点を見つめている。

思っている事はおそらく『考えてもみなかった』という事なんだと思う。

啓二君の体はプルプルと震えだし、目蓋をゆがませている。

「……いや……だつて……」

「だつて……？はは。だつてじゃ無いだろ」

「だって……知り合ってまだ二日目だし……」

「……はは。だったらさ」

松本さんは大きく息を吸い込んで、吐き出した。

「だったら、大勢の前で大声を出して俺を非難する資格は、君には無い」

松本さんはより強く啓二君の顔を見つめていた。

睨んではないない。ただ強く、見つめていた。

「ん……」

それにしても、なんで？

なんでこんな空気になってしまったのか。私は普通にお見舞いを
したいだけなのに。

私は小さく、誰にも聴こえないように「ふう」とため息をついた。

第四十二話：正義

えいちゃんの言う事は、確かにもっともだ。もっとも過ぎて、反論の余地は無い。

反論は無いのだが少々……いや、かなり手厳しい。

相手は若いって事に気がついていているのだろうか。若いのだからこそその言葉なのだろうが……だけど若いからこそ、理解できないとも思う。

「松本君……ちょっと言いすぎだと思うよ」

私はえいちゃんの目を見て小さく声を出していた。えいちゃんの言っている事はもっともで、私すらも納得させられるような事だったから発した声も自然と小さくなってしまふ。

「そうか……悪い、ちょっと熱くなっただかも知れない」
それも解る。

えいちゃんにしてみれば、安奈ちゃんは今や生きがい。無くてはならない存在。

それを脅かすような人間が現れたら……そりゃ、熱くもなる。
私に対してもそうだった。駅の前で安奈ちゃんを否定した時、えいちゃんはものすごい剣幕で怒った。

安奈ちゃんが部屋を出て行った時もそうだった。あの温厚なえいちゃんが鬼のような表情をして、ものすごく大きな声を張り上げた。そして無我夢中になつて探して、自分が事故にあつて怪我をしたと言つのに、心配していた事と言えば、安奈ちゃんの状態……それだけでえいちゃんの中では安奈ちゃんがどれほどのウェイトを占めているのかわかる。

熱くもなる。

「言いたかった事はこういう事じゃないんだ。悪い。喧嘩腰になつた事は謝る。言いたかった事は啓二君は間違つてはいないって事なんだ」

えいちゃんは耳の後ろを少し搔いて間をおいてから落ち着いたようにそう言った。

「相手が安奈じゃなければ、全然間違っではないない」

「そうだね。啓二君、別に悪いことしてる訳じゃないんだよ」

私がいちちゃんの言葉に補足を加えた。そうだ、けいちゃんは別に悪いことをしている訳ではない。自分の中に湧き上がる精神、言葉、感情、鼓動、咆哮。それはつまり正義。

けいちゃんは、自分の中の正義を示そうとした。そしてその正義は間違っではないない。

えいちゃんが言うように、相手が安奈ちゃんであれば。

「……安奈さんじゃなければ……どういう意味ですか……？」

けいちゃんの声はもう聞き取る事さえ苦労するほどに小さくなっている。気をつけて聴かなければ周りの雑音にかき消されてしまうほど、か細い。

「……安奈はよ、啓二君も少しは知っていると思うけど、特別な境遇なんだ」

えいちゃんはそれだけを言って席を立ち、安奈ちゃんから財布を受け取ると「ちよつと飲み物買ってくる」と言って売店のほうへと歩いていった。

この後の話は、安奈ちゃんに委ねる。という事なのだろう。

確かに、私やえいちゃんから話すのは違う気がする。安奈ちゃんの秘密というか特別な部分は、安奈ちゃん自身が話したくなって初めて他人に伝わるべき事なんだと、思うというか、そう感じている。

「私も、席外そうか？」

私は安奈ちゃんの顔を見てそう告げた。

しかし安奈ちゃんの表情は、何故だか曇っている……

「う……彩ねえも、松本さんも、ちよつと勘違いしてるよ」

安奈ちゃんはそう言い、席を立つ。そしてえいちゃんの後ろを追いかけるように駆け足でその場を離れた。

少し大きな声で「松本さんまってよ」と言いながら、無邪気な様

子で駆けている。

残された私とけいちゃんは、ただポカんと、その様子を眺めていた。

それにしても……

「勘違い？」

勘違いって……なんの事？

何か間違った事を言っただろうか。私も、えいちゃんも。

私は……けいちゃんには安奈ちゃんの相手は無理だと思っている。それは、私も少ししか聞かされていないが安奈ちゃんの闇の部分の大きさの問題があるからだ。

とてもじゃないが、14歳の女の子にあの闇を突きつけられて、目を背けない人は居ないだろうと思う。けいちゃんは安奈ちゃんに気があるぶん、尚更だと思う。

そこをしつかりと受け入れてあげられたのは、えいちゃんだから。えいちゃん以外の人には無理だろうなと、私も思っている。

これが勘違いなのだろうか……？とてもじゃないが勘違いとは思えない。

「……僕って……なんなんでしょうね……？」

今まで黙っていたけいちゃんが突然声を出す。私は少し驚いて思わず「え？」と声を漏らしていた。

「僕って……昨日からただただ損な方向に進んでいってしまっ……もう何がなんだか……わからないですよ」

けいちゃんの表情は、本当にどんよりとした印象を受ける。

顔はうつむいていて影が出来ている。眉は完全に垂れ下がり、口も半分開いていて「へ」の形をしていた。

無理もない。えいちゃんにあそこまで言われたんだ。しかも言われた事の半分も理解出来ていないだろう。

「なあゝに言ってるのよ、男の子」

私は思わずけいちゃんの背中を平手ではたく。コートを着ているせいか、ボスツというにぶい音が出た。

けいちゃんは突然の事でまたオロオロとする。

「けい……けいちゃんはね、さつきも言っただけど全然間違っではないんだから」

私はそう言っただけと笑って見せた。けいちゃん不思議そうな顔をして私の目を見て「……だから、それが良くわからないんですけど……」と呟いた。

「松本君が入院してから二人の初めての対面で、ものすごく大切な場面だったのに病室で大声を上げてしまった事。この事については間違ってたって気付いてるんでしょ？」

私は人差し指を立ててけいちゃんの頬に近づける。

「え……？あ、はい……」

少し驚いて顔を赤めてはいるが、けいちゃんは私の指から逃げる事はしなかった。

やっぱり、けいちゃんはいい奴だ。そう思っただけで私は少し安心する。「でもね、けいちゃんの言ってる事は間違ってたよ。松本君は資格が無いって言ってたけど……それは私もちょっと思う事なんだけども……でも、安奈ちゃんを心配して出てきた言葉なんだから間違いないよ」

そう言っただけで私は満面の笑みを浮かべて、けいちゃんの頬に人差し指でつつんとつついた。

「むしろね、けいちゃんのそういう所って、普通の境遇の人からしてみたら、すごく嬉しい事なんだと思うな」

えいちゃんも、これくらいの事には気付いていただろう。だから話が出たかったんだと思う。

結局はえいちゃんが熱くなりすぎちゃって口論みたいになっちゃったけれど、えいちゃんはけいちゃんにこの事を伝えたかったから「間違いない」って言った。

まったく……えいちゃんは相変わらずすごく不器用。いまだに言いたい事をそのまま言葉にして伝えられないらしい。素直に言えば良いだけなのに。

「そ……そんな……言われても……」

けいちゃんは照れくさそうに私から目をそらす。膝に乗せてあった手に入っているのが解った。

なんとも若くて純情。童貞を絵に描いたような少年。

私は思わず「フフッ」と噴出していた。

「さつきはごめんね、ちよっと乱暴しちゃったよね」

私はけいちゃんの頬をつついていた指をとめ、そのまま手を開いてけいちゃんに差し出し「仲直りしようよ」と、優しい声で言う。

そしてけいちゃんは、ゆっくりと視線を私の目へとむけた。少し元氣を取り戻したようで、しっかりと、強い視線で私を見た。

第四十三話：素敵

今日は僕はまだ子供だという事を思い知らされた。

視野が狭い。すぐに感情的になる。そのくせ臆病。いつもおどおどしている。

正直言つて、自分で自分が嫌になるほどに、僕は未熟だ。

安奈さんも、彩子さんも、松本さんも。詳しく話してくれるはずなんて無かったんだ。だって僕は、まだ子供……

同い年と言つても、安奈さんはとても落ち着いた女性。ものすごくしつかりしている。だから憧れていたというのはあるのだけれど、とてもじゃないが同年代とは思えない。

彩子さんは、不思議な人だ。とても無邪気に振舞い、我侭で自分勝手な印象も受けるが、ものすごい行動力と決断力を持つていて頼りになる。そして何より明るく華やかな人だ。

松本さんは、少し悔しいけれど、ものすごく安奈さんを愛している。ものすごい包容力を持つている。その包容力は安奈さんだけにとどまらず、不器用ながら僕を褒めたりもしてくれる。

なんてものすごい人達なんだ、と素直に思つてしまう。普段をのほほんと過ごしていた僕には、とてもじゃないがこんな人らにかないそうもない。

この人達はそれぞれが過去に何かを秘めている。きっと何かがあったんだと思う。そうじゃないと、こんなに特殊な人間になれる訳がない。

僕には、まだ何も無い。普通に学校へ通つて、友達と遊んで、一日が終わる。その繰り返し。

そのことに対してなんの疑問も湧いていなかったし、なんの不満も無かった。

けど……僕は願っている。

この人達のようになりたいと、願っている。

誰かが大切な話をしてくれるような人間に。誰かが僕を選んで相談してくれるような人間に。そういうものを共有できるような人間に、なりたい。

「よかった。啓二君元気になったんだね」

病院からの帰り道、安奈さんは僕の顔を覗き込みながらニコツと笑って僕に話しかけてきた。

この笑顔に、すごく、すごく、心が満たされる。

「はい。なんか色々……すみませんでした」

「ううん。松本さんも別に怒ってなかったから。むしろね、多分松本さん啓二君のこと少し気に入ってるよ」

……安奈さんに心寄せている僕を、敵とは見ず、むしろ気に入る……か。

これは敵として見れないほどに僕が未熟だから……という意味ではない。そんな事を安奈さんがわざわざ伝えるはずがない。

言葉こそ少々荒っぽいのが、あの松本さんという人はやはり包容力がすごくある。心が広いとはまたちよつと違う気がする。包容力があるんだ。それも半端じゃなく。

「まあ今日は色々あったしねえ。けいちゃんも、手痛い授業料だっただろうけどさ、勉強になったでしょ？」

彩子さんも笑顔で僕に話しかけてくる。

すごく直球で言葉を選ばない人ではあるが、的確に僕の心境を見抜いてくる。僕が思っている事をそのまま言われているようで、なんだか恥ずかしいほどの的確だ。

「……はい。かなり勉強になりました。そりゃ手痛いけど……落ち込むような事なんですけど……」

僕は、空を見上げた。

昨日とは違って変わって、青い空が一面に広がっている。雲が少しまばらに残ってはいるけれど、すごく、すごく、透き通るように高く、青い。

なんだか……空を見上げる安奈さんの気持ちが少し解る気がした。
空は、綺麗なんだ。

春の空も、夏の空も、秋の空も、冬の空も。

晴れの空も、曇りの空も、雨の空も、雪の空も。

朝の空も、昼の空も、夕方の空も、夜の空も。

ゆつくりと、眺めてみたいような気持ちになる。

「僕は、少しでも成長できたような気がします。お見舞いに来て、本当に良かったと思います」

僕は自然と、顔がにやける。少しこの言葉を言うことに照れがあった。

だけど、どんなに臭い台詞であろうとも、この人達は決して馬鹿にした笑いは絶対にしないと確信している。この人達は、僕にこう思っただけだったんだと思うから。

「啓二君はあれだね、純粹だし、素直さんだね」

安奈さんはニツコリと笑って嬉しそうにスキップをして歩いている。

とても無邪気に、本当に嬉しそうに。僕なんかの事で、笑ってくれている。普段の安奈さんは妙に落ち着いた所があるけれど、それは安奈さんはいつでも物事を真剣に考える人だからなんだ。

だから今も真剣に、僕の事で喜んでくれている。とても、嬉しい。「けいちゃんってば本当にいい子だねえ。けいちゃんも少し身長が高ければお姉さんの彼氏にしてあげるのに」

彩子さんは目を細めて大口を開いてど派手に笑っている。

彩子さんのこういう部分……嫌いじゃなくなった。たちの悪い冗談を言うけれど、堂々としていて、思った事をそのまま言ってしまう。しかしそれこそが彩子さんの魅力なんだと、今さらながらに思っている。

なんだか……幸せだ。

僕なんかの事で、こんなすごい人達が一喜一憂してくれるなんて……ものすごく贅沢をしている気分になってしまう。

だからこそ僕はそれを伝えたい……この人達に僕の心境を伝えたい。

「安奈さん……気付いていたかも知れないですけど」

安奈さんはスキップを止め、立ち止まりながら僕の顔を見た。

「ん？何？」そう言った時の表情は、ものすごく可愛い……

「僕は安奈さんに憧れてました……惹かれていた事は間違いないです」

僕がそう言うのと安奈さんは少し困惑した表情をして「あはは」と笑う。

その表情も、やはりとても素敵だ。

「でも、気付きました。僕はまだまだ未熟で、安奈さんと釣り合うような男じゃないって……でもこれは卑屈になっているんじゃないんです。諦めじゃないんです。僕は、素直にそう思っています」

そうなんだ……僕は決して卑屈になっていない。

「さつきも言ったように、僕は今日お見舞いに来て良かったと思っていますから。貴方たちのように素敵な人間になりたいって、思えましたから」

むしろ、安奈さんとは友達でいたい。友達がいい。そう感じている。

もっと、影響を与えて欲しい。僕に、もっともつと影響を。

安奈さんに限らず、彩子さんとも一緒に居たい。松本さんとも……

……実は、僕も松本さんを敵視は出来ていない。友達になりたいって、思っている。

こんな素敵な人達と触れ合って、僕自身も、素敵な人に。

そう、願っている。

「素敵な人……って」

安奈さんは少し頬を赤くして唇に手を当てている。少し照れているようだ。

その姿も、美しい。非の打ち所が無いほどに、美しい。

「けいちゃんだって、素敵な人じゃない」

突然彩子さんが僕の肩に腕をぐるりと巻き付けて肩を組んできた。僕はあまりに突然の事で飛び跳ねるほどに驚いた。心臓もドクンドクンと、音を立てて脈打つのが解る。

「え……？」

「けいちゃんだつてさ、素敵じゃん。私も安奈ちゃんも持っていないものを、けいちゃんは持つてるよ」

彩子さんはそう言つて二カツと笑い、「ね？安奈ちゃん」と同意を求めた。

そして安奈さんも「うん。けいちゃんだつて、素敵だよ」と、初めて僕をけいちゃんと呼ぶ。

「もつと伸ばしていけばいいんだと思うな。けいちゃんの良い所」
安奈さんは空を見上げてそう言った。

僕もつられて空を見る。彩子さんも見上げる。

太陽は西に沈みつつあり、辺りをオレンジ色に染め上げていた。

とても、とても、美しい……

なんだかグツとくるものがあり、うつすらと、涙が浮かんでくる

……

第四十四話：幸福

私と彩ねえはアパートへと帰ってきた。帰ってくるなり彩ねえはコートを脱ぎ捨て「ふう……歳取ると歩き続けるのも辛くなっちゃうねえ」とおばさんくさい事を言って布団の上にどっかりと座る。けいちゃんはと言うと「今日は、もう帰ります」と言っただけに帰っていつてしまった。

もちろん私も彩ねえも引き止めたけれど、けいちゃんは自身で何か考えたい事でもあったのか、頑なに意見を曲げなかった。

「また明日お見舞いに行きましょう」

最後にそういったけいちゃんの顔は、今までのけいちゃんとは別人のように、充実した顔をしていた。けいちゃんの中で、きつと何かが変わったのだろう。

私はそれがこの上なく嬉しかった。

「昨日はどうなる事かと思っただけだし、今日はなんだかずいぶん気持ちが悪くなったよ」

彩ねえが布団の上であぐらをかきながらそう言う。

彩ねえはすぐニコニコしていて、本当に充実したという表情をしていた。

「うん。松本さんが事故にあって……内心ずっと心配してましたけど、今日の松本さんを見て安心しました」

私もニコツと笑い、彩ねえの隣に腰を下ろした。すかさず彩ねえは私の肩に腕を寄せ抱き寄せてくる。

そしてニコニコした表情から一転、少しだけ真面目な顔になり私の目を見つめる。

「それにしてもさ、ずっと気になってたんだけど」

少し声のトーンが落ちている印象。短い付き合いだが、こんな時の彩ねえは冗談を言う彩ねえじゃないという事くらいはもう解っていた。

何事かと思い、私もついつい真面目な顔になってしまっ

「なんですか？」

「いや……食堂での話なんだけどさ、安奈ちゃん私と松本君は勘違いしてるって言ったよね？」

ああ……その事が……と、私は思い少し気まづくなる。

確かに私は話の脈絡に関係なく「勘違いしている」と言ってしまった。自分の中ではその事しか考えていなかったから、ついつい出ってしまった言葉。そしてそのまま席を立ててしまっなんて、とっても失礼だったと思う。

「それってどういう意味……？私何か間違った事言ってた？」

「いえ、間違った事を言ったというか……私たちは松本さんのお見舞いに行った訳じゃないですか」

「うんうん」

「私もね、けいちゃんが大声を出した事とか空気の読めない発言をした事とか不快には思ってた……でも、なんか違うって。喧嘩をしてお見舞いに行った訳じゃなくて、松本さんに会うために行ったんだから」

私がそう話すと彩ねえはその事に気付いたようで「ああ」と呟いて余っているほうの手で頭をガリガリと掻いている。視線は私を外し、少し下を見ているようだった。

「そっだよねえ……いや、ごめんね。私もちよつと熱くなっちゃってたみたいで」

そう言つて彩ねえは両手を広げて布団の上に寝転がる。少し、物思いにふけっているようだ。

そっいえば彩ねえ今朝言ってたな……どんな場合でも私の肩を持つって、私の味方だつて。

だからか……けいちゃんを少し乱暴に扱ったり、わざわざ追い詰めるような事を言ったり。

私に幸せになつてもらいたいがゆえに、熱くなつてしまつていたのだろう。彩ねえは良かれと思つてやつた行動だったのだ。

「彩ねえってさ、不思議な人ですよね」

私は彩ねえの顔を見ながらそう呟いた。当の彩ねえはキョトンとした表情で私の顔を見る。

「不思議って？」

「だって、彩ねえって知り合ってまだ間もない私のためにそこまで熱くなれるんだもん。不思議ですよ」

私のこの言葉を聴いて彩ねえは少し顔を赤く染め、右手で自分の顔を覆い隠した。

親指と薬指でこめかみをグツと握り、頭を数回左右に揺らす。

「はは」

彩ねえはそう小さく笑った後に顔に当てていた手をどけて、無言のまま自分の左手を右手でポンポンと叩く。まだ顔は少し赤いけど、笑顔で私を見つめている。

私は彩ねえの気持ちを察し、そのまま仰向けに寝転がって彩ねえの左腕を枕にした。彩ねえの腕はものすごく細くて、なんだか思い切り頭を乗せるのをためらってしまう。

「いいのに」

少し頭を浮かしている事に気がついたのか、彩ねえはそう言って右腕で私の頭を押さえつけた。ぐいっと、体重がかかるように。

本当に……それだけでも折れるんじゃないかと思うほど、彩ねえの腕は、細い。

「……痛くない……？」

私は心配になり彩ねえの顔を見た。しかし彩ねえの顔は痛さに耐えているような色は少しも見せず、むしろ、幸せそうな印象を受ける。

「痛くないよ」

ニツコリと笑い、彩ねえは私の頭の耳を優しく触った。親指と人差し指ではさむようにして撫でてくる。

すごく、気分が良い。すごく、心地良い。まるで眠気を誘うマッサージ……

そういえば今日はまだ眠っていない事に気が着いた。もうずいぶん長い時間起きたまんま……今まで覚醒状態が続いていたので、彩ねえの心地よい指先で一気に眠気が襲ってきた。

「彩ねえ……眠くなっちゃった……」

私は半分閉じたような瞳でようやく彩ねえの顔を見る。すこしほやけてはいるが、彩ねえの表情は相変わらず笑顔のように見えた。

「そうだね。このまま寝ちゃおうか」

彩ねえの心地よい手は、止まらない……どんとどんと……眠気を誘う……

私はおもむろに彩ねえの体に腕を回し、ギュウツと抱き寄せる。

「おやすみ……おねえちゃん……」

「うん……お休み安奈……」

私はなんて……幸せなんだ……

第四十四話：幸福（後書き）

ここで第二部みたいなのが終わりです。今回の部は健全というか、テーマが成長でしたからね。毒毒しい描写はあまり無かったかと。自分でも解るくらいに中たるみよね。完全に。今回の部は書きたい事ではなくほぼ今後のためへの布石のお話でしたから「ああ……早くあの話書きてえ……」などと思ってしまいペンが止まるなんて事もしょっちゅうでした。本当はあれですよ、誰かに今後の話や設定をベラベラ喋ってしまいたい気分ですよ。そして「どう？どう？」と意見を聞きたい気分ですよ。

でも小説というのは完結し初めてひとつの作品になるのですから……焦らず、じっくりと、逸る気持ちを抑えながら書きました。これも面白く、そしてまとまったお話にするためには必要な事なんだから仕方ないです。

連載を始めた当初は第五部で完結の予定で、話数も百いかない予定だったのもうそろそろ折り返し地点に差し掛かりますね。しかし他作品の執筆も開始しているので今後の更新周期は遅くなるかも知れません。今年度中の完結は難しいかと。ですが、このお話は自分の中でもかなり思い入れの強い作品ですので、完結しないままフェードアウトという事は絶対にありえません。だから、見放さないでくださいねん。今後とも小説『安奈』をよろしく願います。

第四十五話：変態

家に帰ってきて電気をつける。外はもう薄暗くなっていた。

時計を眺めてみるとまだ16時50分。本当に日が短くなってきたんだなと感じる。

僕はとりあえずコートを脱いで衣紋がけにかける。このコートは……昨日まで安奈さんに預けておいたコート。

なんだか不思議な感覚。あの雲の上の存在だった安奈さんが、僕のコートを着ていただなんて。そしてさっきまで僕がそのコートを着ていただなんて。こうしていつもどおり一人で自分の部屋にいると、本当に信じられない。

……なんだか、変な気分だ。このコート自体が愛しくて仕方なくなってしまう。

「……ばか」

そうだ。変態じゃああるまいし。今何を脳裏に映し出した？馬鹿馬鹿しい……

僕は一度顔をパンと叩き、この部屋をあとにする事にした。あのコートを見ていたら、本当に馬鹿な行動をとってしまいそうだ。

部屋を出てすぐにある階段をゆっくりと下りて、一階にあるリビングへと歩いていく。

僕の家族はいわゆる核家族。両親は共働きで20時くらいまで帰ってこない。2つ上の姉が居るが、この姉もあまり家へと寄り付かなくなっていた。両親が帰ってくるギリギリまで家に帰ってこず、どこで何をしているのか僕も知らない。

姉はギャルと言いつ切るほどギャルでは無いのだがギャルじゃないと否定も出来ない、つまりちょいギャルみたいな感じだ。僕の頭を茶色に染めたのもこの姉が勝手にやった事。「私の弟としてふさわしくなってもらわなきゃね」とか言いながら無理矢理脱色させられた。

いつもならこんな時間僕以外にリビングに人が居る事なんて滅多にない事なのだが……今日に限っては何故かその姉がリビングのソファアの上に座りながらテレビを見ていた。

「あ、啓二居んだ」

姉は一瞬だけ僕を見た後、またテレビへと視線を戻しとくに笑う事も無くお笑い番組のビデオを見ている。このビデオは姉が家に居る最中ずっと見続けていて、きっと姉自身も飽きてきているのだろう、もうクスリとも笑う事は無かった。

「また見てるんだ」

僕は姉の隣に腰を下ろす。特にやる事が無いので僕もそのビデオと一緒に見る事にした。

今では結構売れている若手芸人が、まだ無名に近い時期にやっていた漫才。そういうえば姉はいつも言っていたな。「この漫才師は絶対に売れる」って。

確かにその予感当たったのだが……姉はこの漫才師達が売れてしまった途端に興味を無くしてしまったらしく、彼らが出演しているテレビ番組等を見るような事はせずに今ではこのビデオを何度も見続けているだけであつた。

「未練がましいなあ」

僕がそうポツリとつぶやくと姉は少し睨むように僕を見る。

「うつさい……な……」

僕をチラッと見た後、何かに気がついたように姉はもう一度僕をまじまじと見た。

「……？ 何？」

「いや……あんだ、なんかあつた？」

何かあつたって……そりゃあつたけど、なんでそれが解る？

僕は一瞬ドキツとして体を一瞬はねらせる。こういった挙動不審で小動物的な所は、きっと何があっても変わらないんだろうなと思う……

「……なして？」

「……んん？ なんだろうな、雰囲気変わったけさ」

まあ、毎日顔は合わせているから少しの変化くらいすぐに見抜けるんだろう。

しかしなんというか……今日あった出来事を話す事は姉弟だからこそ言える事ではない。

懂れている人がいるとか、怒られたりした事とか、感動したりした事とか、涙を流したりした事とか、変わりたいと願った事とか。話せる訳がない。話したら絶対に馬鹿にするに決まっている。

「別に、なにもない」

「……ふーん」

そう言っただけは見ていたビデオを止め、首をコキコキと鳴らしながら携帯電話を取り出し、それをいじりながら階段へと向かって歩いていった。

しかし「ふーん」で済むような疑問なら、はじめから聴いてこなればいいのに……そのたびにドキッとする僕の心臓が持たない。僕はそう思いながらもチャンネルを取り、特に見たい番組なんぞ無いから適当にザッピングをした。

「今日は早く眠るんだぞ」

「うん」

……は？

なんで僕が昨日なかなか寝れずに夜中まで起きてた事を知ってる？ ついつい条件反射のように返事をしてしまったが、電気は消していたし物音だつて立ててない。ただただ寝付けなかっただけなんだ。それなのに、なんで知っている？

「ちよい姉貴！」

僕は少し大声を上げた。階段を上ろうとしていた姉貴は急に呼び止められた事に驚いていたようだ。携帯から目を離し、僕の顔をまじまじと見ている。

「……何？」

「な……なんで僕が夜中まで起きてた事知ってるの……？」

姉貴は「ああ」と呟いて、右手を突き出し輪状にし手首を使つて左右に動かす……

それが何を意味しているのか……僕は解らない歳ではなかった……
「ギシギシ聴こえんのよね。自慰行為も大概にしなよ」

「……」

僕は品の無い姉の行動を見て呆気に取られていた。

頭の中が真つ白になるこの感じ……はは、少し安奈さんの気持ち
が解る。

なんて、くだらない事を考えている場合では無い……姉は、気付
いていたのだ。僕の、そういった事に……

「はは。そんな真つ赤になるこっちゃないじゃん。普通だよ普通」

姉はそう言つてスタスタと階段を上つていく。別段変わった様子
も無く、いたつて普通に。

さつきりビングで顔を合わせた時も普通に振舞つていたという事は、
きっと僕のその行為は以前から知つていた事なんだろう……

そしてそれは特別な事ではなく、普通の事なんだと理解してるよ
うだった。姉は世間話でもするかのように軽く僕にそれを打ち明け
てきた。

……いやいやいや、普通じゃないだろう……どう考えたつてそう
いう事は知つても話さない事だろう……

姉は……ギャルっぽい。ギャルに限りなく近い普通の人みたいな
人間。

きつとそういう事について……僕より限りなく知つていて限りな
く理解している……高校で何か部活をやっている訳でもないのにい
つも帰りは20時に近い。

きつとその間に……

「おえ……」

僕は一瞬想像してしまい、嘔吐感に襲われた。

僕の悪い癖が出てくる……そういった事を無為に想像してしまう
のだ。姉のそういった行為なんて気持ち悪いだけなのに……

「 \dots $\angle z$ \dots 」

少しだけ下半身が膨張している……やっぱり僕は少し変態か……？

第四十五話：変態（後書き）

間違っで違っお話をアップしてしまっていました。正しい四十五話はこれです。さきほどまで公開していたお話は次話に掲載予定です。手違いすみません。

第四十六話：偏愛

私は不眠症だ。

といつても決して眠れない訳ではない。そりゃあ少しは眠る。しかし安奈ちゃんのようにすぐさま眠る事も出来なければ長い時間眠り続ける事も出来ない。軽度ではあるが間違いなく不眠症である。

私は覚醒してしまった目をこすり、時間を確認しようと携帯電話を取り出した。

カチツという音を鳴らして携帯電話が開く。画面から発せられる小さな明かりが暗い部屋を少しだけ明るくした。

「深夜一時か……」

それでも私にしてみれば長く眠れたほうだ。今日は私も疲れていたのか、安奈ちゃんが眠りに入ってから一時間後ほどでスツと眠る事が出来た。つまり私は七時間ほど眠っていた事になる。こんなに眠れたのは小学校以来だろうか。ずいぶんと頭がスッキリとしている。

「……まだ寝てるんだ」

私は安奈ちゃんの顔を覗き込んだ。その寝顔は、まるで天使のように穏やかな顔。

連想できるものとしたら天使以外に思いつかない。なんて可愛らしく、なんて純粋な寝顔なんだ。この子は本当に美しい。

「……………」

でも……なんでこんなに穏やかに眠れるのだろう。

安奈ちゃんの過去を少しだけ聞かせてもらったのだが、とても壮絶とした過去であった。

そんな過去を持つ安奈ちゃんは、どうして今こんなにも穏やかに眠れるのか……

狂うほどのトラウマを背負いながら生きているというのに。人間として底辺まで落ち込んでいたというのに。

彼女は、今、とても穏やかだ。

「……安奈ちゃん……」

私は安奈ちゃんの頭が乗っかっている左腕にそつと力をいれ、安奈ちゃんを抱き寄せる。

その力に呼応するかのように私を抱きしめている安奈ちゃんの腕がギュウツと私を引きよせた。

「……ん……」

安奈ちゃんは寝言を漏らす。唇を小さくパクパクと動かして「ん……」と何度か連続して呟いていた。

なんて……可愛い……

今こうして安奈ちゃんが穏やかに眠れている事は、奇跡的な事なんじゃないかと私は思う。

ましてや、昨日今日知り合った私の隣で……まるで信用しきったように身を預けて。

そう考えると思わず涙ぐんでしまいそうになる。

「……愛しいなあ……」

愛しい……安奈ちゃんがとてもとても愛しい。

私は今、ようやくわかった。愛しいと感じる心を。大好きと無我のうちに感じる心を。

これは決意や誓いとはまた違う。思う事とを感じる事は、まったくの別物だ。

愛とは理解する事ではなく感じる事。そしてこれは理解する事より遥かに強い力を持った感情。

壮絶な過去を持つ安奈ちゃんに同情しているのではない。違う。ただ大好きなんだ。

これが無償の愛というものなのだろうか。本当に好きで好きでたまらない。

「……安奈ちゃん……」

そして、困った……

どうしよう……安奈ちゃんと、ひとつになりたいなんて……思っ

てしまっている……

理解する事は、たやすい。けいちゃんにも言った。「冗談っぽくだが、安奈ちゃんにはえいちゃんが居るしねって。

でも、制御する事は難しい。感情や衝動を抑える事なんて……果たして出来るのだろうか。これほどの感情……これほどの衝動……これほどの……想いを……

ぶつけなきゃ、おかしくなってしまういそうだ。

「安奈……ちゃん……」

私はプルプルと震える左腕に力を込める。そつとでは無い。かなりの力を込める。より体が密着するように、ぐいつと安奈ちゃんを抱き寄せた。

安奈ちゃんの体は、ものすごく柔らかい。骨ばっているイメージがあつたがなんて事は無い、しっかりと、女の子の体をしている。

私は安奈ちゃんの足に自分の足をからめた。どんな形でも構わない。とにかく、足を絡めた。

そうすると、安奈ちゃんの顔が私のすぐ近くにくる。安奈ちゃんの寝息が私の鼻のてっぺんに吹きかかるほどに近く……

ドクンドクンと、私の血液が脈を打つ。大きく大きく波を打つ。

この音で安奈ちゃんが起きてしまわないか、心配になるほどに大きな音を立てている。

ちよつと。あとちよつとで、安奈ちゃんの唇に届く。届いてしまふ。

心臓が、破裂する……

「……はは」

私は小さく笑った。そして絡ませていた足をほどき、左腕の力を抜いた。そしてそのまま薄暗い部屋の天上を眺める。

何やってんだ、私は。恥ずかしい……

えいちゃんは私が女だから安奈ちゃんを安心して預けたのだろう。それを裏切ってどうする。

それに安奈ちゃんは天使のような子。私なんか汚すことは許さ

れない。

寸での所で理性が感情を凌駕した。もしあのままキスをしていたら、もう止められなかったろう。

私はひとつ「ふう……」とため息をつき、そっと安奈ちゃんの耳を撫でた。

安奈ちゃんはまた「ん……」という寝言を漏らして、気持ちよさそうに微笑んだ。

「可愛いんだから……」

私はまだドキドキしている心臓を右手で押さえ、天井を見上げながら小さく「参ったなあ」と呟いた。

第四十七話・悪夢（前書き）

注：一部の表現が含まれています。苦手な方は我慢して読んで下さい。

……あれ？

第四十七話：悪夢

私の手は止まらない。もう嫌だと思うことすら無くなっている。私を制御する理性は、とうの昔にこの男の手で奪われた。

「ああ……いいぞ……」

私は何も感じない。私は何も思わない。

私は何も感じない。私は何も思わない。

だって、そう感じないと、そう思わないと、私は壊れてしまう予感がしていたから。

だから私は一心不乱にそう感じる事にした。そう思う事にした。だけどそう思いつて事を思っている。何も思わないなんて無理なんだと、しばらく前に気付いていた。それでも私は思っている。

私は何も感じない。私は何も思わない。

私は何も感じない。私は何も思わない。

そう思っている。

この狂った医者汚らしい男性器を右腕でつかみ、それをただただ前後に動かす。

それだけで私は生きていられるんだから。それだけで私は死なないんだから。

そう言い聞かせていた。

「あ……あああ……いくぞ……口をあける」

私は言われるがままに口を開く。そしてその男が最後に「うつ」と声を漏らすと同時に、白く生暖かい液体が私の口へと飛び込んできた。

大量に。出てくる。何度も何度も、出てくる。

その液体が私の喉まで到達し、むせた。「ゴホゴホツ」と咳をしながら私は口の中にある白いネバネバを全て吐き出した。

この男はどうやらスッキリしたらしく、もう私に興味を無くしてしまったようで「ふう」という声を出しながらズボンを履き、白衣

をまといこの部屋から出て行った。

残された私はいつものように吐き出してしまった白くネバネバした液体を雑巾で拭く。

床はタイルのような素材なので拭き取る事はいつも容易だった。

そしてこの儀式が終わった後、何故かいつも頭に浮かぶ言葉をこの日も呟いた。

「愛して」

目が覚めて時計を確認すると、どうやら今は朝の6時らしい。私は実に13時間もの睡眠をとっていたようだ。

いつもなら9時間くらいで済むというのに……疲れていたみたいだ。

私は「ん……」という言葉を発し、左手で目をこすりながら隣に居るはずの彩ねえの姿を右手でまさぐり確認する。

しかしそこには人の感触は無く、ただ乱雑に布団がちらばっているだけ。

「あれ……彩ねえ」

おかしいな……彩ねえが居ない。

「さいねえ……?」

少し大きな声で呼んでみる。しかし返事はない。

どうやら彩ねえはこの部屋には居ないらしい。トイレにもお風呂場にも洗面所にも。声が聞こえたなら返事くらいするだろう。返事な無いのは、居ないから。

「あれ……」

……居ないって……なんで?

私は急に怖くなり、すぐさま立ち上がり玄関のほうへと駆けていった。

やはり彩ねえの靴は無く、この部屋の外へと出て行ってしまったようだ……

「もお……」

心細いじゃないか……あんな夢を見た後なんだから、誰か側に居て欲しい。

私はノソノソとリビングへと戻る。彩ねえの荷物を確認して最悪の事態ではない事を察しそつと胸をなでおろす。財布と携帯だけが無くなっている所を見るとどうやら彩ねえは朝食でも買いに行つたのであろう。この部屋にはもうマトモな食材は一切ない。

「……起こしてくれば一緒に行つたのに……」

私は少しづつたれながら布団をたたみ、鳴る事の無かつた目覚まし時計のスイッチを切る。

そして別段何が目的でもないが、テレビのスイッチを入れて適当な番組に合わせた。

それにしても、さっきの夢……すごく久々に見てしまった。

以前は……確かにほぼ毎晩この夢を見ていた。いや、この夢という形容は正しくない。アイツの夢……アイツの夢を、毎晩見ていた。しかし最近では思い出す事も無くなっていたし気にもしていなかった。それなのに何故今頃こんな夢を見てしまったのだろう……

と、そう思い返してみたら、実に簡単な事であつた。

私は一昨日、松本さんが事故にあつてからの記憶が曖昧だつた。

彩ねえの話ではどうやらおかしくなつてしまつていて、ずっと「ごめんなさい」と呟いていたそうだ。

おかしくなつていた時に見ていたモノ……それは、アイツの最後の姿だつたから。その印象がどうやら強すぎて、こんな夢を見てしまったのだろう。

深層心理というものは恐ろしい。一昨日の狂つた時以来、アイツの事なんて脳裏にすらも掠めなかつた事だと言うのに、アイツはしっかりと私のトラウマとして依然残つてしまっているようだ。

そしてさらに深層心理の恐ろしい所は、私はアイツを……憎みきれない。

遊び半分に犬の耳をつけられ犬の尻尾をつけられ子宮を抜き取ら

れ性具として扱われ……それでも私はアイツを憎みきれて居ない。そう調教されたし自分でも何も考えないようにしていた。でも一番の理由は、少しでも感謝しているからだろうか……

死なない事への執着は、アイツに貰った唯一のもの。

この執着が無ければ私は今、生きていない。だからアイツを憎み切れない……

こんなに幸せな状況になってきたから、尚更だ。生きていて良かったと、本気で思っている。

「悔しいな……」

アイツのせいでこんな姿になり、実家に帰る事も出来ず沢山の苦勞をしているというのに、憎みきれていない。

むしろ私は私に無関心な世の中を憎んでいた……お金をくれる人だけが人間だつて、ずっと自分に言い聞かせていた。

なんなんだ、この心理は……この矛盾は……

自分でも理解できない。何故こういつた発想に行き着いていたのか、まったく思い出せない。

私は思い出そうと「ん……」という言葉を出しながら頭を揺らして考え込んだ。

何分間その状態だったのだろうか、突然この部屋の玄関が開き、小さい声で「ただいま……」という声が聴こえてきた。

「……あ……」

……トラウマとは恐ろしい。今更考えたって仕方ない事だろう。

危うくドツボにはまる所だった。

忘れる。忘れて前だけを見ていればいいんだ。

「おかえり彩ねえ。なんで一人で買い物行っちゃったの？」

今の私には松本さんに彩ねえにけいちゃん。彼らが居るんだから「あら？ 安奈ちゃん起きてたんだ。いやさあ、安奈ちゃんぐつすり眠ってたから起こすの忍びなくて」

そうだ。忘れる。考えるな。考えるな。

「まあ」。松本さんにも言った事だけど、それってすごく寂しい事

なんですからね」

でも、忘れるとか考えるなと考えているうちは、決して忘れられない。決して思考を止められない。

私は、それが解つていながら忘れると、自分に言い聞かせていた。それが前を見る事なんだと、信じている。

第四十八話：膨張

僕は沸きあがってくる欲望を制止させようとしている。頭を抱えて布団に包まり「落ち着け」と自分に言い聞かすように呟いた。

それにしても昨日の夜は悲惨だった。夜は様々な誘惑が僕を襲う。考えないようにすればするほど思い浮かんでしまう。少し落ち着こうと漫画を読むと軽い性描写が想像を膨らませる。そして例の安奈さんが着たコート……それが視界に入るたびに頭がおかしくなりそうになる。

……匂いは、嗅いだ。確かに昨日の夜、匂いは嗅いだがそれとどまつた。自分が嫌になるというより、安奈さんを汚すという行為が嫌になった。

知り合う前は……何度となく安奈さんを頭の中で汚してきたのだが。知り合ってしまった今となっては、なんだかとてもいけない事のような気がして、嫌になる。

「……よし」

僕はそう呟き、かぶさっていた掛け布団をガバツと勢い良く剥ぎ取った。

少し落ち着いた。今はもうあまり邪な事は頭をよぎらない。

これでこそ、安奈さんに純粹だと言われた僕の姿じゃないか。

安奈さんは言っていた。「僕の良い所を伸ばしていけばいい」と。だから僕はより純粹になる。心から。精神から。

そうすればきっと、安奈さん達のようなすごい人達になれると思う。肩を並べて歩いても恥ずかしくない男になれるような気がする。「もう大丈夫だ」

僕は自分に言い聞かせた。

リビングで朝食であるパンをほおばりながらなんとなくテレビを見ていると、普段居るはずの無い姉が寝巻き姿のまま携帯の画面を

見ながら二階から降りてきた。

昨日からの姉はなんだか変だ。家に居る事なんて滅多に無かったのに。今までの長期休みだって初日から友達の家泊まりに行っていたはずだ。

「おはよ」

姉は携帯から一瞬視線を外し、チラッと僕を見ながらそう言った。
「……うん」

僕はそっけなく返事する。

別に元気良く「おはよう」と言ってもいいと思うのだが……どうも昨日話された事を意識してしまう。無意識のうちに声は小さくなり、姉とはマトモに目を合わせられない。

「よっこいしょ」

まるでオバサンの印象だ。姉はとても十六歳とは思えない声を出し、腰を押さえながら僕の隣に座る。

茶色に染まったボサボサの頭を手串で整えようとしているのか、右腕で手串、左腕で携帯をいじっていた。なんとも器用。

「頭洗えば？」

僕は見ると見かねて姉にそう告げる。姉くらいになるとこの状態で外出もしかねない。かなりいい加減な性格をしているのだ。

「洗ったほうがいい？」

「そりゃそうだろ」

姉は「わかった」と言い、洗面所へと向かって歩いていった。それでも携帯電話は肌身離さず握り締めている。

まったく、姉は携帯依存症だ。携帯無しではもう生きていけないのだろうな。

先月分のパケット通信料はゆうに20万を超えていた。これがもし定額制じゃなかったらと考えると恐ろしい。

僕はそんな事を思いながらも一度テレビへと視線を戻す。テレビに表示されている時計を見て七時半だという事を知った。

「もうこんな時間か」

今日は6時には目を覚ましていたはずなのだが、どうやら布団の中で自分を抑えていた時間が長すぎたようだ。こんな調子では学校が始まると大変な事になってしまう。

もっと努力しないと。性欲を抑えるのではなく感じなくならなければ。

「あ、そうだ啓二」

突然姉は僕の真後ろから声をかけてくる。

「ん？」

姉のほうを向き直ると、姉は寝巻きだけを脱いで下着姿でそこに立っていた。

……何をやっているんだ、このババアは。

「……何してんだよ。早く風呂行つて来い」

「あら？ 拳動不審にならないね」
なるか。気持ち悪い。

姉はやはり昨日から少しおかしい。家に居る事もさることながら、何故かやたらと僕に絡んでくる。

「何？ なんかあったの？」

僕は少し不機嫌な声でポーズをきめている姉にそう告げた。

このババアに一体何があったと言うのだ。やけにテンションが高い。

「あんだなんか昨日からおかしいつけさ」

「……いや、どう考えてもおかしいのは姉貴だろ」

僕がそういうと姉はまた僕の顔をじいっと見る。昨日からなんだというのだ。おかしい。

「だから、何？」

「やっぱおかしいって。なんか格好いい」

「は？」

突然何を言い出すんだこのババアは……格好いいなんて今まで誰にも言われた事も無い言葉なもんだから、不覚にも少しドキツとしてしまったじゃないか。

「何言つてんの？」

僕は少しでも高鳴る鼓動を抑え、平常心を装いながら姉の顔を見続けた。顔が赤くなっていらないか、かなり心配ではあるが……目をそらすとまたからかわれると思い、決して視線はそらさなかった。

「いや、なんか格好いいんだよ。もしかして童貞卒業した？」

「……姉貴さ、昨日からなんだよ。そういう話、今まで一度もした事無いじゃんか」

僕がそう告げると姉貴は少しでも寂しそうな表情をして「別に」と呟く。そして脱ぎ捨ててあった自分の衣服を拾い集め、そのまま素直に洗面所へと向かって歩いていった。

本当に、なんだと言っただ。少しではない、かなりおかしい。

それにしても……悔しい。姉のあの姿にはない、格好いいという言葉に、少しでも下半身が反応しているようだった。

僕は情けなくなり右手でこめかみを押さえ「はは」と呆れから来る笑いを漏らした。

第四十九話・孤独

検査入院というものは本当に読んで字のごとく、検査ばかりをやらされる。

脳波に乱れが無い。骨は折れていない。心肺に異常は無い。それに加え尿検査に血液検査にMRI。軽い計算ドリルさえもやらされた。俺は一体どんな理由でこの病院へ運び込まれたのか、解らなくなるほどに頭の傷とは無関係な事をやらされた。色々な検査をして、それを理由に俺から金を引っ張ってこようとでも思っているのか？ などと考えてしまう。

何か病気でも見つかったのか？と看護師にたずねても「念のための検査ですから」と冷たく乾いた声でこうとしか答えてくれない。

正直言つて、かなり不安になったし不機嫌になった。なんの説明もしてくれないばかりかたずねてみてもあの対応。どうかしていると感じる。最近医療問題でマスコミが騒いでいるのが理解できた。こんな対応、信じられない。

俺はあらかたの検査を終えて、不機嫌な表情を浮かべながら看護師につれられベッドへと戻ってきた。ベッドの隣に置いてある時計を見てみると時刻はすでに十二時をまわっている。

俺は舌打ちをしそうになる気持ち在必死に押さえ、どうせ明日で退院なんだからと自分を納得させ、パイプベッドに腰をかける。その時にベッドがギシという音を立てた。その音が妙に静かな病室に響く。

昨日はお見舞いに来ていた人達が多く話し声がそこら中から聴こえていたからか、今日は特に静かに思えた。

「……」

それにしても、昨日は失敗した。別に啓二君を否定するつもりは

毛頭なかった。むしろ少年らしく、若々しい所を褒めるつもりだった。安奈と俺の間にさえ入って来なければ楽しく会話が出来るような良い奴だという印象なのに。

安奈の事となると、熱くなってしまう。安奈と向き合う俺の姿勢を否定されると、どうしても許せなくなってしまう。安奈の事を俺がどれほど想っているのか、他人にはわからないというのに。

「そうなんだよな」

そうなんだ。俺は元々暗いから、会話というものが苦手。安奈以外の人間とコミュニケーションを取るという事はここ最近あまりしていなかった。

高校時代はよく話をしてた記憶もあるが、どんな風に話をしてたか思い出せない。どんな声で、どんな態度で、どんな内容の話をしてたのか、思い出せない。

ましてや昨日の相手はほぼ初対面のような人間。どう話しているのか解らず、熱くなってしまった。

……可能性は低いとは思うが、もし今日もお見舞いに来てくれるようなら、しっかり謝ろうと思う。

少し遅い昼食をとった後、俺はじつとしている事が出来なくなり、四階のフロアをウロウロとする。簡易食堂やら売店やらトイレなんかを何の目的も無く歩いていた。

今日はまだ安奈達は来ていない。時間は13時を過ぎたあたり。確かに検査があるから午後から来てくれと伝えてはおいたのだが……

……遅い。

彩子も居る事だし、道に迷っているはずは無いとは思っただが。ものすごく不安になる。

ウロウロしながらも入れ違いになったのかも知れないと思い、自分の病室を何度となくチラチラと覗きに行った。しかし何度覗いてみてもそこには誰の姿も見えない。カラッポのベッドだけがポツンと置いてあった。

「……チッ」

つい出てしまう舌打ち。いつの間にか掻いてしまっている耳。イライラしている。

あの看護師の態度や病院側の対応にも出なかった舌打ちだというのに。掻かなかった耳だというのに。なんなんだ、この気持ちは。この衝動は。

「……早く来いよ」

俺は誰に言うでもなくそう呟き、また四階のフロアをウロウロと歩き出した。

しかし、まさかこんなに寂しい気持ちになるものだとは思っても見なかった。これほどの寂しさは彩子と連絡が取れなくなった時以来……いや、もっとだ。あの時よりもっと寂しい気持ちになっている。

少し前までは一人でも全然平気だったのに、今では一人がものすごく辛い。心が贅沢になってしまっているのだろうか。今の俺の心は何か足りていない感覚がする。

ほんの少しの期間だと言うのに……孤独が、怖い。

安奈、早く来てくれ。寂しくて、耐えられない……

そう思った刹那、心臓が一度ドクンという音を立てながら跳ねあがったような感覚が俺を襲った。

寂しい……孤独……一人……

「安奈……」

安奈……安奈は、ずっとこんな気持ちを抱いていたのだろうか？ 野良をやっていた頃はもちろん、俺と同居をした時も、こんな気持ちを抱いていたのだろうか？

今まで、解っているつもりではいた。安奈の事を理解しているつもりではいた。もう寂しい思いはさせまいと思っていた。一生、大事にしようと、決意していた。

だけど実際自分が味わってみると……これは……耐えられるんじゃない。俺の決意はまだまだ足りないとする思えるほどに、どうしようもない感覚。

耐えられるか、こんな感情。我慢できるか、一人なんて。我慢したらおかしくなってしまうそう。おかしくなってる……

おかしくなってる……

「狂って……しまいそう……？」

狂ってしまいそう。

そう、狂ってしまいそう。

俺はまだ良い。明日で退院だってわかっているから。先が見える事によって狂う事はまず無いと思う。

だけど安奈には、あの絶望的な状況で先が見えていただろうか？希望を抱けたのだろうか？何を目標に生きていたのだろうか？

……きっと、何も無い。だから安奈は、狂う事を選択したのだ。

もちろん狂った理由は他にもあるのだろうか、これは、相当重い。

「……安奈……」

会いたい……抱きしめたい……安奈、早く来てくれ。そして心で聴いて欲しい。心に伝わって欲しい。

愛しているんだ……安奈……ずっと側に居てくれ……安奈……

第五十話：業

何故この違和感に気がつかなかったのか？それは、自分の事で頭がいっぱいになってしまつて、考える事なんてちつともしなかったからなんだと思う。

私は昨日から思っている。安奈ちゃんが好きで好きでたまらないと。出来るならこのまま一生一緒に居たいと。絶え間なく、ずっとこんな馬鹿な事を思い続けていた。ずっと腑抜けていた。

考えれば、すぐにこの違和感に気がついたはず。私が気がつかない訳無いはず。

「岩本さん……よね？ 岩本彩子さん」

私は病院の出入り口で後ろからその中年女性に話しかけられた瞬間、背筋を冷たい手で撫でられたような、そんな悪寒を感じた。

一年以上前、何度も聴いていた女性にしては妙に低い声。この声の主は松本有香。えいちゃんのお母さんにあたる女性が持つ声。

「彩子さんでしょ？ 栄太の彼女の」

「お……お久しぶりです」

そう、私の違和感。それは、昨日も一昨日も、えいちゃんの家族が一人もお見舞いに来なかった事。

私は一昨日病院に到着してからすぐにえいちゃんの家族へと連絡した。えいちゃんの実家の電話番号は解らなかったが住所はわかっている。だから電話帳ですぐに調べ上げる事が出来た。

その時有香さんはとても慌てた様子で、手続きなんかを私に任せて、自分もすぐに病院へと駆けつけると言っていたのだが……あの日は有香さんの姿は確認していなかった。というより、安奈ちゃんの事が気になりすぎて有香さんの事は忘れていたのだ。

そして昨日も。昨日も私達は病院にお見舞いに来ていたというのに、病室には有香さんの姿は無く、寂しそうなえいちゃんだけが一人ベッドで横になっているだけだった。見落とし等ではなく、本当

に一切見かけなかった。そして有香さんの事、えいちゃんの家族の事、すっかり忘れていた。今考えればかなりおかしい状況だというのに、違和感にも感じていなかった。

「松本さんの……おかあさん……？」

安奈ちゃんは少し困惑した表情で有香さんの顔を見る。確かに安奈ちゃんにとっては気まずい場だろう。えいちゃんはおそらく安奈ちゃんと同棲している事は有香さんに話してなんていないだろう。どう話していいか解らないはずだ。

それを安奈ちゃんも解っているようで、とてもおびえたように震えながら私の手を強く握り返してくる。

……だけど、ごめん安奈ちゃん。私は今嫌な想像をしている……いや、想像と言うより、予感。嫌な予感が頭を駆け巡り続け、とてもじゃないけれど助けてあげられそうもない……

「……あ……あの、有香さん……」

私が有香さんにそう告げると同時に、有香さんは難しそうな表情を作り私の空いているほうの手を強く握ってきた。突然の出来事に面食らってしまう。

「有香さん……？」

「貴方に、話したい事があるの……」

嫌な予感……最近は良く当たっている。

「話したい事？」

私は必死に平静を保ってそう聞き返した。それでもやはり声は多少震えてしまう。

「ここじゃちょっとなんだから……」

ここは病院の出入り口。沢山の人の目が付き、沢山の人が出入りする。確かにどんな話をするにしても、ここじゃちょっと……だ。そして私の予感が正しければ、この話は安奈ちゃんに聴かせる事は出来ない。出来るはずが無い。

「安奈ちゃんとけいちゃんさ、悪いんだけどちょっと先に松本君の病室に行っててくれるかな？」

私は二人に振り返り、精一杯笑顔を作りながらそう言った。

必死に、必死に、平静を保ちながら。いつもの私の印象と違わないように。

「……あ、はい。解りました」

けいちゃんは安奈ちゃんの黒いコートの袖をちよいとつまみ、「いきましよう」と言った。

当の安奈ちゃんはどういうとまだ少し不安そうな顔をしながらも、けいちゃんのその言葉に少し救われた気分なのだろう、かすかに安堵の表情を浮かべながら「……うん」と言い、けいちゃんの腕に引かれるように病院の中へと入っていく。

私はその姿を見送りながら、少しだけ湧いてきていた涙を袖でぬぐった。

「脳挫傷……らしいの……」

私と有香さんはひと気の無い一階の待合室へと足を運んでいた。私の右手には有香さんが買ってくれた缶コーヒーが手付かずのまま握られている。

「どの部分の脳挫傷なのかわからないの……」だけど確実にその症状が出てるのよ」

やはり、最近の嫌な予感は良く当たる。本当に、嫌になるほど良く当たる。私が思っていた通り今まで有香さんと私達は同じ病院に足を運んでいたというのに顔を合わせなかったのは、有香さんはえいちゃんには無くお医者さんに会いに来ていたからだった。

「この病院に栄太が運ばれてきた時はまだまともな検査もしていなかったし、お医者さんも忙しかつたらしくて……」だけど今日の検査でハッキリしたらしいの。英太は脳挫傷になってるって」

本人はまだ自覚していないのかも知れないが、簡単な計算が通常の人より遅くなってしまうている。そして答えとして書いた数字はまるで右腕が麻痺しているかのようにプルプルとよれた字になってしまっているらしい。さらに昨日の深夜、ブツブツと十分ほど独り

言を呟き、急にイライラが溜まりきったかのように「あーっ……！！」と小声で叫んでいたと同室の患者さんが話していたとの事。「本来はね、軽度の脳挫傷なら一週間から二週間で症状がわかるらしいんだけど……英太の場合その日のうちに症状が出てきて……もしかしたら重症かも知れないって……」

有香さんは話している最中、何度も涙ぐんでいた。そのたびに「ごめんね」と私に向かって謝ってくる。

謝らなきゃいけないのは、私のほうだと言うのに……

「……でもね、まだ吐き気を訴えてこないし目眩も無いみたい。言葉もはつきり話せるし会話も問題ないって」

有香さんは涙でグチャグチャになってしまっている顔でニコツと笑ってみせてくれた。きつと私を励まそうとしてくれているのだろう。この人は、まだ私とえいちゃんが付き合っているものだと思うている。だから私にこんな話をしてきたんだ。

「私もそう思います。昨日松本君とお話したんですが、いたって普通の松本君でしたよ」

私は、自信ありげにはつきりとした口調で嘘をついた。

「そう……そうよね。大丈夫よね」

有香さんは笑顔のままハンカチで涙をぬぐった。

「脳挫傷って、基本的に自然と治るのを待つ事しか出来ないらしいの。あつかましいお願いだって事は解っているんだけど……英太が治るまでの間、あの子の力になってあげてくれない？」

ああ、私は……

「はい。任せてくださいお母さん」

私は……業に溢れてしまった……

第五十一話：接吻

「松本さん」

私は四階のフロアをウロウロしていた松本さんを発見し、声をかけながら大きく手を振る。

松本さんは呼ばれた事は気付いたようだが、どうやら私の姿はまだ発見できていないらしくキョロキョロと見回していた。

「あははっ。ここだよ松本さん」

私はよりいっそう大きな声で松本さんの名を呼びながら松本さんのもとへと駆け寄っていく。すると松本さんはようやく私の姿を確認出来たらしく、走っている私に向かって冗談ぽく「廊下は走るんじゃないよ」と少し弾んだ声でそう言った。

松本さんは、笑顔だ。なんだか、ものすごく嬉しくなってしまう。
「松本さんっ」

私は思わず松本さんへと抱きついた。本当は首元に抱きつきたいけど松本さんの身長は高い。だから私は胴体へと思い切り体当たりをするような形で飛びついた。

「会いたかったあ」

私は昨晚の夢を見てからなんだか胸騒ぎを感じていた。胸騒ぎという表現は正しいのかわからない。ただ寂しくて仕方なくなっていたのかもしれない。だけど心の中のモヤモヤしたものが、時間が経つにつれて膨らんでいくのが解っていた。

早く、早く松本さんに会いたかった。抱きつきたかった。このモヤモヤを吹き飛ばしてくれるのは、彩ねえでも、けいちゃんでも無い。この世で松本さんただ一人。

そしてやはり、松本さんに抱きつくると落ち着いてきた。松本さんの体温を感じる事が出来た事に、この上なく幸福を感じている。

「……おせえよ、安奈。何やってたんだ？」

「ん？そっかな。何やってた訳でも無く普通に來たつもりだけど」

松本さんは少し不思議そうな顔をした後に「まあいい」と呟き、私の頭を抱きかかえて自分の顔を私の頭へとうずめた。ギョウツと、力を込めて。

「……松本さん？」

私は突然の出来事に驚き鼓動を早める。ドクンドクンと、血液が強く脈を打つのが自分でも解った。

こんなにドキドキするのは四年ぶりだろうか……誰と抱き合っても、誰と交わっても、こんなにドキドキする事はかつて無かった。

松本さんとホテルへ行った時だって……性行為をしている時だって……心が通っていなかったせい、ドキドキは、しなかった。

つまりは、そういう事なんだと、思う。

ああやっぱり喧嘩したあの日からだ。あの日から私は松本さんを心から……

「愛してる……」

松本さんは、私以外の誰にも聞こえないくらいの小さな声で、そう言った。

本当に、小さく。こんなに近づいているのに、周りに少しの騒音でもあつたら掻き消えてしまいそうな声で。松本さんはそう言った。「え……」

私の考えていた事をそのまま声に出されてしまったので困惑する。松本さんは初めて私に愛情表現としての言葉を言ってくれた事に対して困惑する。

そして、感情が高ぶりすぎて、困惑する。

「松本さん……」

私は、松本さんの眼を見る。

松本さんは冗談を言うような人ではない。松本さんの冗談なんて、聞いた事が無い。

それに、とても真剣な眼差し。とても澄んだ瞳。

松本さんは永遠にも感じたキスをやめてしまった。唇を離して「はは」と照れくさそうに笑っている。

嫌だ……もつと続けて欲しい……永遠にキスをしたい……そう思ってしまう。

「初めてのキスだな……」

アイツが言っただ。「愛するという事は狂うという事。どれだけ狂う事が出来るか？　それがそのまま愛の尺度だ」と。火のついていないタバコを口にくわえ、聴診器で私の心臓の音を聞きながらそう言っていた。

それは……まったくもってその通りだと思う……身をもって痛感した。本当に、狂おしいほどに、松本さんを愛している。

「だって……松本さんが拒否するから……」

「……キスは何よりも神聖だって思ってるからさ。本当に心を通わせてからじゃないと嫌だったんだ」

ああ……それにしても……

「もお……こんなに快感なのに……」

それにしても、なんで松本さんはもう私を抱かないなんて言ったの？

抱いて欲しい。果てしなく動物的に、滅茶苦茶に。グチャグチャに。そして液体になった私を全て飲み干してほしい。松本さんの中で永遠に存在してほしい。

もしくは監禁してほしい。一生私を性具として扱ってほしい。松本さんの気が向いた時に欲望を解消するためだけの存在だってかまわない。じらされる時間が長ければ長いほど愛は、快樂は、倍増される。それだけで私は満たされる。

それも駄目なら、いつその事私の中にずっと存在していて欲しい。私だけのものになって欲しい。私が松本さんを全て飲み干してあげるから。松本さんが液体になってくれるのなら、私はその一切を拒否しない。すべて、受け入れる。

「はは……快感って」

「もっとすごい快感だって、愛しあっているならいくらでもあるんですから」

「……安奈？」

「だから松本さん、愛して。愛して。愛して」

「安奈っ……！！」

松本さんの声は、遥か遠くから聞こえてくる。

第五十二話：狂っている

「ええ！？」

安奈さんは突然着ていたコートを脱ぎだした。いや、コートだけではない。上着も……着ていたチャックの付いている黒いパーカーも、一瞬の間に脱ぎ捨てていた。

「安奈さんっ！！」

僕は慌てて安奈さんに駆け寄った。安奈さんはすでにパーカーの下に着ていた長袖 टीシャツに手をかけている。

一体……何を考えているんだ？ここは公衆の面前。人は少ないとは言え、ゼロじゃない。

キスをするまでは……くそ……キスをするまではまだ解るけど、それ以上は、犯罪だ。

僕は急いで脱ぎ捨ててある安奈さんの黒いコートを拾い上げ、一度バサッと埃をはらってから安奈さんの肩へとコートをかけた。

「何考えてるんで……」

僕は少し強い口調で「何考えてるんですか」と言おうとした。しかし、安奈さんの顔を覗き込んだ瞬間、言葉が詰まる。

安奈さんの表情……安奈さんの表情が……

焦点という言葉がむなしいほどにギョロギョロとする安奈さんの薄くにこった眼……声は出ていないのに口が半分開いていて、ヘラヘラとした印象……綺麗な顔立ちだけに、その表情は……怖い。どう表現したらいいのか解らない。例えるものが見つからない。ただど該当する言葉ならひとつだけ思いつく。

……狂っている。

「ま……松本さん……」

僕は思わず松本さんの名を呼びながらるように松本さんの顔

を見た。松本さんは少し悲しそうな表情をするだけで、何もしない。何も言わない。ただただ安奈さんを黙って見ていた。

僕には……どうしていいか解らない。というより人がこんな状態になるなんて信じられない。今まで見たことない。人が……こんな顔を出来るなんて……こんなに……こんな……

そう思っていた矢先、また安奈さんはコートを脱ぎ捨てて、 टीーシャツに手をかける。そしておもむろに裾をめくり上げ、白い安奈さんの肌がヘソの上まであらわになった。

「うわっ……」

僕は思わず目を背ける。見てはいけない……僕にはその資格が無い。それに僕が見たら、また空気を読まず……膨張するに決まっている。

「まっ……松本さん……止めてください！」

「……解つてる……解つてる……」

松本さんはそう言うのと、安奈さんの頬をバシんと、平手で叩いた。
「安奈……戻れ」

平手打ちを浴びせられてなおも服を脱ぎ続ける安奈さん。淡々と、いつもそうしているようにどんと服を脱いでいく。

バシん、と、松本さんは再度安奈さんの頬を平手で叩く。その音が静かなフロアによく響いた。

「安奈……戻れよ」

「松本さん……そんな叩かなくても……」

僕は思わず声を出した。

松本さんは……手加減はしてるのだろうが、安奈さんの頬に何度も平手打ちを浴びせていた。さっきまで……抱き合ってキスをしていた相手に……少し悲しい印象を受けるが、無表情で、何度も、何度も、平手打ちを浴びせている。

バシん。バシん。バシん。バシんと、テンポ良く音がなり続ける。

「戻れ。戻れ。戻れ。戻れ」

「ああ……松本さんやめてください……」

僕は見ていられなくなり、松本さんの腕にそつと手を添える。

これ以上は……見たくない……愛する人に暴力を振るう現場なんて……見たくない……

僕は応援しているんだ……貴方達を。そりゃ、悔しいけど。そりゃ、複雑だけど。貴方達には本当に幸せになつてもらいたいと思っている。

だから、もう、やめてほしい……

「……止めるって事は、啓二君が安奈を正気に戻してくれるって事か……？」

松本さんは小さくため息をついた後、おもむろに耳の後ろをガリガリと掻きながら僕の顔を見てそういった。

その表情は、やはり無表情……

「……いえ……無理です……でも、もう見てられなくて……」

「……安奈と付き合っていくには、覚悟が必要なんだ。中途半端な事では、安奈とは付き合っていけない」

松本さんのその言葉を聴いて、僕は急激に理解した。

そうか……そういう意味もあつて、僕には無理と言っていたのか……と。

確かに、僕には無理だ……安奈さんの頬を打つなんて、僕には到底出来そうも無い。

それに僕はやはり、どうしていいのか解らなかった。狂った状態の安奈さんを目の当たりにして、頭の中を真っ白に染め上げる事しか出来なかった。

なんて無力……僕は、なんて無力……

「安奈……解つたよ……」

そう言つて松本さんは टीーシャツ をまくろうとしている安奈さんの腕をガツと握る。

握つてそのまま思い切りひっぱり、ひと気の無い非常階段のほうへと歩いていった。

「……浄化してやんよ」

松本さんはそう言っでぐいぐいと安奈さんを引つ張っていく。

その様子をただただボーゼンと眺めていた僕……僕は、何をすべきなんだ？僕に出来る事……何かないのか？

そんな事を停止しようとする思考の中、必死に考えていた。必死に、何かが出来ないのかと。

「……安奈を正常に戻すから……ついてこないでくれ」

僕は無意識のうちに松本さんの後を追っていたらしく、松本さんは悲しそうに震えた声で、後姿のまま僕にそう告げる。

僕は力なく「……はい」答えた。結局は……僕に出来る事なんて無いと言われたような気がして胸が痛くなる……

二人の後ろ姿を眺めながら、思う。

一体松本さんは何をすると云うのだろうか……？ 浄化って一体

？

第五十二話：狂っている（後書き）

最初にアップしていた五十二話は手違いで見直し前の五十二話でした。

まあたいして変わらないかも知れませんが、こっちが正しいやつです。すみません。

第五十三話：並んで歩こう（前書き）

注意：かなり性的描写があります。前回の比じゃありません。苦手な方は読むの諦めたほうがいいかも。

ごめんね〜このお話ではどうしても必要な部分なんだ。

第五十三話：並んで歩こう

鳴く。鳴く。安奈は、よく鳴いている。

震える足を補うように両手で壁を突っぱねながら、悲鳴とも歓喜の声とも取れるような、とてもじゃないが人間の口から発せられているとは思えない奇声を、延々発する。

「あああああああつっ！！　あああああつっ！！」

……ボタボタと垂れ、床に水溜りを作る安奈の愛液……安奈はこの短時間で何度絶頂に達しているのか……足をガクガクと震わせながら、なお俺の指にすがりつく。

「ああああううううつつ……！！　くうっ……！！　あああああつっ！！」

口からヨダレが垂れていようが、眼からどれだけ涙が溢れてこようが、安奈はまったく構っていないようだった。とにかく必死に、俺の指を求め続ける。

……安奈は、前からこうだった訳じゃない。ここまで激しくはなかったが、安奈が快楽を求めるようになったのはむしろ最近。九月の末か十月に入ってからだった。

それまではそう、俺を性で繋ぎとめておくために安奈は仕事として俺と交わっていた。おそらく無感触、無感度だったのだと思う。

だがしかし九月の末に安奈は始めて快楽を覚えすぐさま絶頂に達し、それ以来安奈は激しく俺を求めるようになっていた。まるで人が変わったかのように……ただただ快楽をむさぼっていた。しかし事が終わると安奈はやはり突然冷静になっている。複雑そうな表情を浮かべながら、ベッドに横たわってうつすらと涙を浮かべていた。

「くそ……くそ……早く戻れ安奈……」

俺は泣いていた。涙を流しながら安奈を正常に戻そうと必死に愛撫する。

もう二度と安奈を抱かないと誓ったのに……もう二度と安奈を汚さないと誓ったのに……

俺は……くそ、頭が痛い……俺は、また安奈を汚してしまっている。快樂に、快感に、絶頂に、いざなっている……

安奈の愛液と俺の涙が床に落ちて混ざる。その涙が俺に教えてくれる。お前はもう限界だと、教えてくれる。

「ううっ……安奈……嫌だ……もう……無理だよ……」

辛い……辛くて、死にそう……胸が張り裂けそうだ。切なくておかしくなりそうだ。

愛しているのに……お互い愛し合っているのに……何故、こんな？何故平手打ちで元に戻ってくれなかった？

お前は、浄化なんかされちゃいない。俺の手で、汚れていつている。自分のその姿を見ってみる。明らかに、汚れていつている。

快樂に身を委ねる天使なんかいちゃいけないだろ。お前は、そんなに美しいのに。いけないんだ、そんな顔でよがっていつ……

今回で最後だ……もう限界だ……次にお前が狂ってしまった時、俺はもう……狂ってしまいそうだ……

「あっ……！ あはあっ！ あっああああっ……！ あっ……！ ああ……」

安奈は一瞬体を跳ね上がらせ、断末魔のような叫びをあげながら体を弓反らして、達した。安奈はそのままズルズルと壁伝いに沈んでいき、床に出来ていた水溜りにパチャという音を立てながら膝をつく。

「はあ……はあ……あ……あ……う……」

安奈はうめき声のような声を発する。後姿だから表情はわからないが、安奈は相当疲れたらしく肩で息をしていた。時間にして……わずか五分の出来事……それなのに俺は永遠とも言えるほど長く感じていた。

ようやく……終わった。悪夢のような時間が、ようやく……そう思っただけは深呼吸をして乱れてしまっている心音を整えた。

「安奈……聴こえるか？」

安奈は「はぁ……はぁ……」と息を荒げているせいで言葉が出てこないのか、ゆっくりと首をコクンと縦に振った。

「……皆心配してるぞ」

「……はぁ……はぁ……」

「……落ち着いたら、行こう。何か飲み物買ってきてやるから」

俺は安奈の体を抱き、とりあえずこの水溜りから体を引き離れた。そして股と膝についてしまっている愛液を、俺は持っていたハンカチで丁寧に拭いてやる。

「……安奈、これで、最後だからな」

「……はぁ……はぁ……な……なんで……？　愛してるって……言ってくれたのに……」

安奈の表情は、少し微笑んでいるような印象も受けるし、少し寂しそうな印象も受ける。

まだ少し普段の安奈からは離れてしまっているようだ。普段の安奈なら謝ってくる。「場所もわきまえないで、ごめんなさい」と言ってくるはず。安奈には謝る癖があるんだから。

「……だって……愛してくれてるのに……愛の形は……これ以外にないのに……これからもいっぱい……愛して欲しい……もっと……松本さんを……感じたいよ……」

「……安奈、気付け」

俺はしゃがみこみ、安奈の黒いスカートについてしまっている染みを必死にこすり落としながら安奈の顔を見た。安奈の顔は……にやけている。ニヤニヤと薄く笑いながら俺の顔を見て幸せそうな表情を浮かべた。

「気付け。お前は、狂ってる」

「……知ってる」

「……知ってるなら、治せよ」

「……違うの……愛っていうのはね……すべからく……狂愛なんだよ」

安奈はそういい、入らない力を振り絞りながら地面を押し、俺へとよりかかり抱きしめた。

「あはは……あはは……松本さん……怪我治ったら……また毎日……ホテルに行こうね」

……安奈……

「毎日……愛して……ね。松本さん……」

……安奈……

「……愛してるじゃねえか……愛してるんだよ……お前を……」

「愛を……形に……行為に……快感に……してよ」

安奈……お前は……

「安奈、無理だ」

「ん……？」

「俺にも……お前の相手は、無理だ……」

俺はそう言つて、頭を抱えながら涙を流す。痛い……くそ……本当に痛い……

愛しているのに……駄目なんだよ……狂わないで欲しいんだよ……

お前は、純粹じゃないか。すごくいい奴じゃないか。腐っていた俺をもう一度よみがえらせてくれたじゃないか。それが本来のお前じゃないか。天使だったじゃないか。

それがなんで？　なんでなんだよ安奈。なんで自分から汚れていくんだ……？

くそっ……くそっ……頭が痛い……胸が張り裂ける……おかしくなりそうだ……

「……松本さん……またまた……私は松本さんじゃなきゃ嫌だよ」

「俺だつてそうだよ。お前じゃなきゃ嫌だ」

「だつたら」

「だからだろうが……！」

突然大声を上げた俺に安奈は驚き体を跳ね上がらせて眼を丸くした。その拍子に力が抜けたのか、俺の脚に絡ませていた腕を離してしまい地面へと身をあずける。

「え……？」

「……あと一回だ……安奈……」

「え……？」

「次に狂ったら、俺はもう知らないからな……」

「……そんな……」

俺は立ち上がり、安奈の顔を見た。

なんて悲しそうな表情……まるで捨てられてしまう事が解ってしまっただけの子犬のような……

「……行こう、皆心配してる」

俺は精一杯優しい表情を作って安奈に手を差し伸べる。

愛しているのは本当だから。だから……

「並んで歩こう」

第五十四話：実は孤独

「あれ？ 松本君と安奈ちゃんは？」

私は動揺している事をけいちゃんに悟られないよう、平然とした顔で五号室へと足を踏み入れた。

そこにはえいちゃんの姿も安奈ちゃんの姿もなく、けいちゃんがベッドの隣にあるパイプ椅子に静かに腰をかけているだけであった。

「……ジューズを」

「ん？」

「ジューズを買いに行きました」

「……ふうん」

私は目を合わせてくれないけいちゃんの顔を覗き込んだ。それでもやはりけいちゃんは目を合わせてくれず、首を少し動かしてうつむき下を見つめてしまった。

「なにかあったの？」

けいちゃんは本当にわかりやすい。何かあるとすぐに顔と態度に出してしまう。今は、また落ち込んでいるようだ。

私はけいちゃんの正面へと移動し、ベッドの上に「よいしょ」と言いながら腰をかける。けいちゃんはチラッとその様子を見ていたが、すぐにまた床を見つめてしまった。

「お姉さんに話してごらんなさいな」

本当は、これ以上の荷物なんて背負いたくない。

背負いたくないのだが……私は頼りになる人間として今まで生きてきた。ここでこう言わないといつも通りの私じゃないような気がして、怖かった。

「……なんて言えばいいんですかね……」

けいちゃんは「ふふ」と笑った。その表情は、今にも泣き出してしまいそうなほどに悲しい印象。

「……安奈さんが……壊れちゃったんです……」

「壊れた？」

「そう……完全に狂ってました。松本さんとキスをした後、すぐに……」

キスしたのか。へえ。

私もえいちゃんとは一度しかキスをしていない。えいちゃんは極端にキスをする事を拒み続けていた。そんなえいちゃんがキスをしたのか。へえ。

……「へえ」としか思えないな。

「キスしたんだ」

「……安奈さんは、眼をギョロギョロさせて、突然服を脱いだんです。それを見て松本さんは安奈さんの頬をビンタして……」

あ……いけない。頭に情報が入ってこない。親身になれない。真剣になれない。「へえ」程度の言葉しか思いつかない。

けいちゃんは必死に話してくれているのに……やっぱり駄目だ。

今の私には相談に乗れる余裕は、やはり無い。

的外れにどうでも良いキスの話に食いついたりして……今の話はそんな所に食いつくべき話じゃない。安奈ちゃんが壊れたって話なのに。駄目だ、ぜんっぜん、駄目だ。

「あの松本君がビンタしたんだ」

それでも私は相槌を打つてみる。話の流れに乗っていつているフリをする。本当は私の悩みを聞いて欲しいくらいなのに。私らしくあるために、必死に相槌をうつ。

「それを見て……なんだかすごく悲しくなつて……だって、あの人は愛し合ってるのに……一方は壊れて、もう一方はビンタして……なんなんですかこれ……おかしいじゃないですか……」

「……おかしいね」

「僕はあの人達に影響を与えて欲しくて今日も来たっていうのに……なんで……」

「……うん」

私の声は、だんだんと小さくなっていった。別に意識して小さく

している訳ではない。自然と、小さくなってしまった。

正直言って、けいちゃんの話はほとんど上の空……キスをして安奈ちゃんが壊れて今は二人でジューズを買いに行っている。その程度の事しか頭に入ってきていない。しかも頭に入ってきただけで、特別何かを思うとか、そんな事も出来ていない。

乗れない相談なら、初めから乗らなければ良かったのに……やっぱり駄目だ、私……

「……ごめんけいちゃん」

「……え？ 何がですか？」

「……私今日もう帰る」

そう……逃げたい。この場から居なくなりたい。えいちゃんに会いたくない。脳挫傷の影響を受けたえいちゃんを見る勇氣は、今の私には無い。

突然突きつけられた現実に頭がパニックに陥っている。とても無責任で自分勝手ではあるのだが……今日は、もう無理だ。

有香さんごめん……今日だけは許して……と、心で精一杯の謝罪をする。

「と……突然何言ってるんですか？ 彩子さんまだ松本さんの顔も見えないでしょう？」

「はは、そうなんだけどさ」

私はわざとらしく笑って無理矢理笑顔を作って見せた。心配させまいとして作った笑顔なのだが、どうやら上手く作れていない……けいちゃんは不審な表情を浮かべて私の顔を見つめていた。

「そうなんだけど……今日はレディースデイなんだ」

「レディースデイ？」

「はは、生理のこと。結構辛いんだ」

私はそう言ってベッドから腰を上げる。立つと同時に私は出口へと向かって歩いていった。

「松本君と安奈ちゃんには上手く言っておいて」

私はけいちゃんにそう告げた。後ろからけいちゃんの呼び止める

ような声が聞こえてきたが、決して振り返らない。振り返ったら、引き止められる。

私はけいちゃんの声には決して耳を貸さず、無言のまま少し早足でエレベーターのある場所へと急いだ。

……まるで犯罪者のような心理だな……えいちゃんにも安奈ちゃんにも見つかりたくない。一刻も早くこの病院から出たい。

病室で皆と話してもしていたらきつとその場の空気でなんとかなるだろうと思っではいたのだが……やはり居なくて良かっただなんて思ってしまったている。

やっぱり会わせる顔なんて無いよ……昨晩は昨晩で安奈ちゃんを襲っちゃいそうになつたし、今日は今日でえいちゃんが脳挫傷だと言われて……その怪我は私がさせたようなものだし……

「ああ……」

私は頭をグチャグチャとかき乱す。誰かに相談したいけど相談出来るような相手は一人も居ない。

家族になんか話せない。友達にも話せない。親友と呼べる相手は一人も居ない。

実は、私って孤独だ。

「もう……早く来てよ……」

私はエレベーターのボタンを連打していた。カチャカチャカチャカチャという音が他に雑音の無いこのフロアによく響く。

「ああ……もぉ……」

私はイライラしている。

何をイライラしているのか……罪の意識も、辛い現実も、全て自分のしでかした事だと言うのに……自分のこういった自己中心的な部分にも、やはりイライラする。イライラしている自分にイライラする。

「うう……もぉ」

嫌……と言おうとした瞬間、私の肩を誰かが叩いた。

私は突然の出来事にビックリし、思わず「キャッ……!」という

小さな悲鳴をあげる。

「彩子さん……」

振り返ってみると、そこにはけいちゃんが立っていた。

けいちゃんは私を探して走り回っていたのか、少しだけ息を切らしている。

「……けいちゃん。何？びつくりすんじゃん」

私はまた慌てて笑顔を作る。そう、けいちゃんに心配させてはいけない。この子もこの子なりに悩みがあり、必死にそれを克服しようと努力している。

そして今まさに変わろうとしている時。私は助力こそすれど足を引つ張つてはいけない。だから私はいつでも頼れるお姉さんでなければならぬし、笑顔を見せ続けていなくてはならない。けいちゃんを巻き込んだのも、私のようなものなのだから……責任を持つて、けいちゃんの成長を見届けなければならない。

だから、私は精一杯笑顔を作った。頼れるお姉さんに見えるように。いつもの気丈な私に見えるように。笑顔を作る。

「お姉さん居ないとやっぱ寂しい？」

「……寂しいのは……」

「ん？」

「寂しいのは、彩子さんのほうなんじゃないですか？」

……かなわないな。

第五十五話：させるか、そんな事

「寂しいのは、彩子さんのほうなんじゃないですか？」

僕がそう言っていると彩子さんは一瞬表情を曇らせた。そしてすぐさまたつもどおりの明るく華やかな笑顔へと必死に戻す。

そう、必死に笑顔を作っている。強がっているのがバレバレなのに。僕に心配をかけまいと、笑顔を作っていた。

「何言ってるの。なんで私が寂しいのよ」

なんでそこまで気丈に振舞うのか。何が彩子さんをそこまでさせるのか。寂しい時や辛い時に本音を言わないなんて、なんでわざわざそんな疲れる生き方をしているのか。

僕は思わず彩子さんの腕を掴んだ。

「彩子さん、すみません、少し甘えすぎました」

「は？」

僕は彩子さんの腕を引っ張り、例の簡易食堂のほうへと歩き出した。

彩子さんは確かに何かで悩んでいる。そんな気がする。そしてそれを話せるような相手はおそらく居ない。だって彩子さんはきつと誰に対しても気丈に振舞っているから。

誰にも弱みを見せないし誰からも頼りにされる。そんな印象を誰にも抱かせているんだから、彩子さんは今の悩みをずっと一人で引きずっていくんだと思う。重いと知りながらも、誰にも助けを求めもせず……

させるか、そんな事……迷惑がられたって、半分持ってみせる。そつだ、今度は僕が。僕が彩子さんの助けになってあげなきゃいけない。昨日も一昨日も、僕は彩子さんの言葉にずいぶん救われている。彩子さんが居なければ、僕は決して変わろうだなんて思えなかったに違いない。

「彩子さん、話してくださいね」

「話すって？」

僕に引つ張られている彩子さんの表情はもうすっかり笑顔ではなくなっていた。どちらかというと、悲しい印象をつける。引つ張られている腕にも抵抗の力は感じられない。なすがまま引つ張られている。

それでも彩子さんとはばけてみせた。僕に心配をかけないように、わざと明るい声で「けいちゃんなんかおかしいぞ？」と言い笑ってみせる。

……なんていじらしく、素敵な女性……そう感じる。

「彩子さん、何かで悩んでいるでしょ」

「別に」。今日はレディースデイなんだって。早く帰りたいだけだよ」

「……じゃあ、僕の腕を振り払って帰ればいいじゃないですか」

「ん？」

「なんで、引つ張られたままなんですか？」

「うん」

「でも彩子さん、逃げようとしたってそうはいきませんからね。そう簡単にこの腕は離しません。もし振り払われたって僕は絶対追いかけて捕まえます」

「……ん」

「嫌がったって、それが嘘だってわかっているんですから」

「……はは」

「助けて欲しい……ですよね？」

彩子さんは消え入りそうな声で「うん」とだけ答えた。

簡易食堂へと入っていくと安奈さんと松本さんが隅のテーブルでジュースを飲んでいた。どうやら本当にジュースを買っていたようで少しビクリする。

安奈さんはどうやらもう落ち着いているらしく、少し姿勢がうつむき加減だが必死に松本さんへ何かを訴えかけていた。その姿を見

て僕はホツと胸をなでおろす。

「良かった……」

それにしてもやはり松本さんは凄い。壊れてしまった安奈さんを正常に戻す事が出来るなんて……安奈さんの相手は松本さんにしか出来ない。そう感じる。

「場所変えましょうか」

二人はまだ僕らに気がついていないようで、淡々と話を進めていた。何を話しているのか気になるが二人の邪魔をしてはいけないうし、今は彩子さんの話を聞かなければならない。合流するのはちょっとまずい気がする。

「うん……」

彩子さんは小さく返事をし、僕のコートの袖をギュツと握り軽く引っ張る。顔は伏せつたまま床を見続けていた。

……なんだか、とつても複雑な気分だ。こんな弱々しい彩子さんは普段の彩子さんからは全然想像がつかない。

「……でも、ほら、安奈さん治ってよかったですね。ちゃんと話聴けてるみたいですし、やっぱり松本さんってすごいですよね」

「……うん。よかったと思うし、凄いと思うよ」

……本当に思っているんだろう。思っているんだろうけど、それでも彩子さんの表情は曇ったまま。少しも明るくならない。

それほどの事が、今彩子さんの身に降りかかっているんだ……そう思うと、ここでぐずぐずしている暇は無いと感じソワソワする。早く話を聴いてあげないと……彩子さんが押しつぶされてしまう。

「……いきましょうか」

僕は二人の姿を振り返り見ながら、彩子さんの手を引いてその場を後にした。

第五十六話：生きる希望だって

さきほどまでは誰も通らない非常階段の四階と五階の間に居たけれど、私は立たない足腰を松本さんに支えられながらなんとかこの簡易食堂へと移動していた。

松本さんは私を椅子へと座らせると「とりあえず、何か飲み物買ってくる」と言い、私の体を気遣ってかレモン味のジュースを二本買ってきてくれた。そのジュースを一口すすると、まるで乾いた砂が水を吸収していくように、染み渡る。

「……」

「……美味いだろ？」

「……うん……」

松本さんは私のこの声を聞いて少し笑顔になった。その笑顔がなんだか少し遠いような気がして、寂しい。

松本さんは私の対面に腰をかけようとする。しかし松本さんも少し疲れてしまっているのか、椅子に座る寸前に足をもつれさせてしまい、ガタガタという音を立てながら椅子によりかかった。その様子を見ていた私はとつさに「大丈夫？」と声をかける。よくよく考えてみれば松本さんは今怪我をしているんだ。それなのに私は松本さんに体重のほとんどを預けてここまで来てしまった……悪いことしたな。と、少し反省する。

「ああ」

松本さんは少し耳の後ろを掻きながら「変だな」と呟き、もう一度椅子の位置を確かめてゆっくり椅子へと座った。そしてレモンジュースの蓋をあけ、ゴポツという音を立てながら一気に半分まで飲んで「……ふう」という声を漏らす。

「……しかし、彩子も啓二君もどこいったんだろうな」

松本さんは辺りをキョロキョロと見回した後、そう呟いた。

私達は最初病室に足を運んだのだが彩ねえの姿もけいちゃんの姿

もなく、ただただ静かに時計の針が進む音がカチカチと聞こえてくるだけであった。

「……どこ行っただけでしょうね」

私は適当に相槌を打つ。そう、今はそんな話をしたい訳ではない。どうして松本さんは愛してくれているのにもう私を抱かないなんて言うのか……そしてどうして愛してくれているのに「もう知らない」なんて言えるのか……問い詰めたくて仕方が無い。

「ねえ……松本さん……」

「ん？」

松本さんは笑顔で私の顔を見た。

「松本さん……私の事好きなんですよね？」

「……ああ、大好きだ」

松本さんは笑顔を崩さずそう答えた。頬を赤く染める事も無いしはにかむ様子も無い。堂々と、胸を張って答えている。

それはとても嬉しい事。恥じる事もなく動じる事も無く「大好きだ」と言ってくれる人が居るなんて、本当に幸せな事。今までの私からは想像も出来ない夢のような言葉。

それでも私は、不満だ。好きなら、愛しているなら、抱いて欲しい。私で性欲を満たして欲しい。私だけに欲情して欲しい。私も喜んでそうするから。そう思う。

「……それなのに、どうして……」

「何が？」

「どうして、抱いてくれないの？」

私のこの言葉を聴いて、松本さんは急に笑顔を崩し、難しい顔をした。そしてもう一度レモンジュースを一口ズズという音を立てながらすすり、ため息をついた後にゆっくりと口を開く。少し、悲しい表情をして。

「別に純情ぶるつもりは無いんだ……セックスがしたいなら、してやっても構わない。俺だって……正直嫌いじゃない。けどな、お前が狂う事とよこれる事が本当に嫌なんだ。そんなお前を見たくない

い」

狂うという事は、愛しているという事。どうしてそれを解つてくれないんだろう。解ろうとしてくれないんだろう。

それに狂わないと……私は快感を感じない。満たされない。寂しい気持ちになってしまふ。悲しい気持ちになってしまふ。だってそれは私にとって仕事と同じ……激しく求め合うからこそその愛。仕事じゃなく愛ゆえに狂える。何故それを解つてくれないのか。そんな松本さんが、わからない。

「よごれてなんかいないよ……松本さんは、私の過去を色々と清算してくれているもん……松本さんに抱かれる事によつて、私の中の汚いものがどんどん抜けていくような気がしてるよ……」

松本さんは私の言葉を聴いて、少し押し黙る。どうやら少し悩んできているようで、その様子を見た私はここぞとばかりに言葉を投げかけた。

「だから、愛して欲しいの。私の中に詰まっている汚い部分を、全て松本さんの手で掻き出して欲しいの。松本さんで、私の中を埋め尽くして欲しいの。解ってください」

胸に手を当てて、真剣な表情で、松本さんの眼を見ながら。心の叫びを松本さんへと伝えた。

そうだ、これが私の本音。私の中を、松本さんでいっぱいにして欲しい……昔の事や嫌な事を思い出さなくなるくらい、私を松本さんの色で埋め尽くして欲しい。

「狂う事を嫌うのは、解るよ……まるで獣のような顔をして求めているんだと思う」

私はニット帽子から出ている耳を触つて少しはにかんだ。その様子を見て松本さんは少し暗い表情を作る。

「でも、よごれてなんかいないから……松本さんは間違いなく私の心を綺麗にしていってくれてる。だって松本さんは、私にとって生きる希望なんだから」

テーブルの上に置いてあつた松本さんの手を握る。その手は、少

し冷たい。

私はその手を温めようと、両手で掴み、ゆっくり優しくこする。この指はさつきまで私の中に入っていた指……私の中の悪いモノを掻き出してくれる指……とても愛しい気分になる。

「……私、贅沢言ってるけど……迷惑かも知れないけど……生きる希望だつて、本気で思ってますから」

生きる希望……今の私にとって、松本さんは本当にそう言い切るに足りる存在になっていた。彩ねえも、けいちゃんも、生きる理由には当たる人達だが、希望と言われると違う気がする。

私の中で、もっとも輝いている存在。それが松本さん。

「大好きなんです……松本さんが」

「……じゃあ、話してくれ」

松本さんは難しい顔をしたまま、私がさすっている手を見ながらそう言った。

「何を？」

「お前の過去」

過去……その言葉を聴いて、衝撃が走った。背筋が凍り寒くなる。急激に体温が下がる。

「……え？」

「……お前の過去を聞いて、決める」

歯がガチガチと音を鳴らし始める。松本さんの手をさすっていた私の手も止まる。

あまりの寒さに腕を抱いて寒さを和らげようとする。今度は自分の腕をさする。

「……そんなに目ん玉ひんむいたら、とびだしてくるぞ」

「あ……あ……」

「……やっぱ話せねえか」

過去にも一度、私の過去について松本さんに聞かれた事がある。その時も私はガチガチと震え、腕を抱きながらうずくまっていた。そんな私を見て松本さんは「もう聴かないから」と言って私

を抱きしめ暖めてくれた。それ以来ずっと聴いてこなかったと言うのに……なんで今更その話が出てくるのか……

「やだ……やだやだ……」

「……別に、いつでもいいんだ。話せるようになったらで全然構わない」

松本さんはそう言って椅子から腰をあげて私の後ろに立ち、ゆっくりと優しく私を包み込んでくれた……

「……信頼してるなら、話せるとは思っただけだな。仕方ないよな

……」

松本さんは私の耳元でそう呟き、ギュウツと私の体を抱きしめた

……

それでも、やっぱり寒い……

震えは治まらなかった。

第五十七話：頑張らないと

ここは病院の一階にある待合室。喫煙ブースには今だれも人が居ないので、私達はそこに座っていた。

そこで私は今、けいちゃんの右手を握りながら涙を流している。けいちゃんの優しさ、暖かさ。それがとても嬉しくて、なんだか救われた気分になってしまふ。私なんてちつとも救えないのに。救われちゃいけないのに。

その理性と感情の矛盾が涙を誘う。嬉しいのに、そう感じてはいけないんだと思ってしまう、涙が止まらない。

「ううううっ……うっうっ……」

「……うん……」

けいちゃんは「うん」を何度も繰り返し呟き、うつむき伏せつた私の頭を左手で撫でてくれている。ゆっくりと、優しく。だけど、力強く……

けいちゃんは、私の業を聴かされて何を思っているのだろう……私の話から何を感じ取ったのだろう……私には想像もつかない。だってこんな話を聴かされた事なんて無いんだから。

けいちゃんはまだ十四歳。私が十四歳の頃なんて……毎日勉強して勉強して勉強して。意地で進学校へと入学することばかりを考えていた。こんな込み入った話なんて、一切無い。当時の私がもしこんな話を聴かされていたら、どうする事も出来なかったと思う。

けいちゃんは……何を思っているのか。どうして私の頭を撫でてくれているのか……気になって仕方が無い。

「けっ……けいちゃん……」

私は震える声を必死に絞り出し、けいちゃんの名を呼んだ。

呼ばれたけいちゃんは「はい？」と小さく返事をする。

「けいちゃん……私の事……つくっ……最低な女だと……思ってるよね？　じっ……自分でも思うもん……私のつまんない……意地で

……安奈ちゃんを狂わせ……たし……松本君を脳挫傷に……しちや
つたし……いつ……うううっ……」

私は言い終わるとまた感情が高ぶりすぎて、涙が溢れる。どうしようもないほどの感情が、私の全身を駆け巡る。暴れまわる。

「あああつつ……うあああつつ……」

ああああ……業が押し寄せる……押しつぶされる……もう駄目だ耐えられそうも無い……

もう……しに

「彩子さん……最低な女とまでは思ってますよ」

「……え」

「だって……なんて言えいいのかな……だって彩子さんは……認めてるじゃないですか。反省してるじゃないですか。そして償おうと頑張ってるじゃないですか」

けいちゃんの手は止まらず私の頭を撫で続ける。私の手を握る手も、より強く私の手を握り返す。

「えっと……そりやあまり良い印象を受けるような話じゃなかったですけど……彩子さんが悪いんだとも思いますけど……でも彩子さん、沢山罪の意識を感じているじゃないですか。だから泣いてるんじゃないですか。松本さんがどう思っのか解りませんが……少なくとも僕は、彩子さんの事を軽蔑したりしませんから」

けいちゃんはそう言って私の肩をそつと抱き寄せた。グツと、力を込めて。

「半分も背負えないかも知れない……これは彩子さんの罪だから……だけど、少しでも彩子さんの罪が軽くなるように、僕も背負いますから」

……今気付いた。けいちゃんの腕は、えいちゃんより全然太い……えいちゃんより全然力強い。

「彩子さんは一人じゃないですよ」

そしてけいちゃんは、ものすごく優しい。ものすごく素直だ。言葉詰まらせたりもったりするが、心で感じた事をそのまま言葉

にして伝えることが出来る。

……そうなんだよな。私も安奈ちゃんも、けいちゃんに感じていた素敵な部分というのは、こういう所なんだ。

ほぼ初対面だったえいちゃんに心をそのままぶつける事が出来た。普通じゃそんな事は出来やしない。しかもそれは安奈ちゃんを思う優しさからきた感情。

けいちゃんは思ってたよりかなり優しい心を持った人間。相談に乗ってもらってここまで頼もしいと感じる事が出来るなんて思ってもみなかった。けいちゃんは、想像以上に、素敵だ。

「けいちゃん……」

今まであれほど重く感じていた罪の意識が、急に軽くなつてどこかへと飛んでいってしまったような感覚に陥った。だけどそれは違う。どこかに飛んでいったのではなく、今まさにけいちゃんの背中へと乗り移ったのだ。けいちゃんが、背負ってくれた。

重いだろうに……苦しいだろうに……けいちゃんは、少しだけ照れたような表情で私の目を見て微笑を浮かべている。

「けい……ちゃん……」

ああ……格好良い……けいちゃん格好いい……

なんて頼もしいんだ……なんて良い奴なんだ……これほどの良い人、今まで見た事が無い。えいちゃんにも、前の彼氏にも、沢山居る友達にも、こんな優しさを持った人間は居なかった。

心が……無我のうちに惹かれる……

「はは……なんか格好良い事言っちゃいましたね……恥ずかしいな」

「うううっ……ははっ……ほんと……格好良い……」

私はけいちゃんの顔を見た。

「格好良い……ぐすっ……けいちゃん、格好いい」

けいちゃんは少し頬を赤く染めて目を大きく見開いた。

「かつこいいって……」

「うん……本当に格好良いと思う。ありがとうね……聴いてくれて少し落ち着いてきた。私はコートの袖でぐいっとな涙をぬぐいなが」

らけいちゃんの顔を見る。

「はは……ごめんね、私こんな格好悪くて……格好良いお姉さんで居たかったんだけど」

私は強く眼をつぶり、最後の涙を流し終えて「お株をうばわれちゃったな」と、笑いながらけいちゃんに向かってそう言った。

頑張らないと……私はもう、一人じゃない。

第五十八話：僕を、揺さぶる

僕は、そんなに格好良くなったか……？今まで一度も言われた事が無いというのに、今日だけでもう二人の人間から言われてしまった。実感は無。だって僕はまだ変わろうとしている途中なんだから……格好良い訳が無い。

「……僕にとっては、彩子さんのほうがまだ全然格好いいですけどね」

あゝ……駄目だ。このパターンはまた弱音を吐いてしまうパターン……彩子さんや安奈さん、松本さんを羨み妬む言葉が出てきてしまう。

まったく、全然成長しない……彩子さんのように、強がる事が出来ない。弱い自分を隠しておけない。直さなければならぬ。

「彩子さん、格好良いじゃないですか。うん、格好いいです」

僕は思いついていた言葉を必死に飲み込み、とにかく彩子さんを賛美する言葉を発していた。別に嘘をついた訳ではない。本当に格好良いと思っているんだから。

「彩子さんは、いつも堂々としていて、ハッキリしていて、格好良いです。見習わなきゃな」って思っていますよ」

本当に、彩子さんはすごいなあと思う。

彩子さんに肩を組まれる事は何度かあったのだが、今自分が肩を組んでみて初めて気がついた。彩子さんは、本当に、華奢だ。

肩幅も背中も、ものすごく狭い。腕だって、すぐに折れてしまいそうなほどに細い。顔だって……少しこけている。痩せ過ぎているほどに痩せている。

それなのに彩子さんは、本当は弱い心を必死に隠し、いつも気丈で自信たっぷりなように振る舞い、堂々として、頼りになる女の人であり続けていた。

重すぎる罪を背負ったというのに、やはり強がって……一人でな

んとかしようとして……華奢なのに。押しつぶされそうなのに。必死に清算しようと、齒を食いしばって耐え抜こうと……

「尊敬してます」

僕が笑顔でそう彩子さんに告げると、彩子さんは素敵な微笑みを浮かべ「はは」と笑い、ひとつ大きく深呼吸して

「ちゅっ」

僕の頬に……キスをした……

「……え……えっ!？」

僕は思わず彩子さんの肩を引き寄せていた腕を離してしまい、慌てて彩子さんと距離をとり、彩子さんの顔を見た。

その表情は、いたずらっぽく笑う、いつもの彩子さんだった。まるでなんでもなかったかのように、ニコツと笑っていた……

「え……何……」

しかしドクンドクンと高鳴るこの鼓動が、今の出来事は嘘じゃないと教えている……

彩子さんは、僕の頬に、キスを……

多分、僕の顔は真っ赤なんだと思う……とても、顔が熱い……

「……何を……」

「はは……そんなに離れられたら傷つくなあ」

彩子さんは頭をぼりぼりと掻き、少し困ったような顔をして微笑んでいた。

その表情は……安奈さんに勝るとも劣らなく……美しい。

「え……だって急に……」

「お姉さんじゃ、不満かな? やっぱ安奈ちゃんが好き?」

……彩子さんは相変わらずいたずらっぽく笑っている。

この人は人をからかう癖がある……タチの悪い冗談はいつもこの笑顔で言ってくる。また、からかわれた……そう感じた。

「……彩子さん……タチの悪い冗談……やめてくださいよ」

「……冗談に聴こえるかあ」

彩子さんはそう言いながら少し悲しい印象をつける表情を作り、

うつむいてしまった。

「はは……」と笑っている。悲しそうな顔をして、笑っている。

なんだ……この反応は……今までの彩子さんからは想像も出来ない……

想像も出来ないほどに……可愛らしい……

「……あ……彩子さん……もしかして」

もしかして……

「もしかして……え……本気……？」

彩子さんは、少しだけ頬を赤くして、目を細めていた……うなずきもしないし、首を横に振る事もしない。ただ、眼を細めて顔を赤めた……

ドクンドクンと、今まで感じた事の無いほどに、血がたぎる……

「さ……彩子さん……ってば……」

「……はは……私ねえ……実をいうと昨日の夜、安奈ちゃん襲いそうになっちゃった」

彩子さんは突然ニコツと笑い、天井を見上げて「はは」と笑う。

「……え？……ええ！？きゅ……急に何言ってるんですか！？」

その言葉を理解するのに時間がかかった。だって、襲うって。

まさか殺そうとするほうの襲うでは無い。そんな理由が全然浮かばない。すると残るは……犯すほうの襲う……

女の人が女の人を、襲う。しかも二人とも紛れもなく美少女……って馬鹿か……

なんだこの変な感情は。変な妄想は。やめる自分、時と場合を考える。

「だって……愛しくなっちゃったんだ。あんまりにも無邪気で。可愛くて。したってくれて。本当に、性の対象として見ちゃった」

「あ……いやそれ……は……」

なんだ……なんなんだ急に……この人はなんで暴露話をしているんだ……？

そんな事、今の話の流れとは全然関係ないじゃないか。どこかお

かしくなっちゃったのかと、心配になる……

「さ……彩子さん……どうしたんですか？」

彩子さんは、天井を見上げたまま目をつぶって、口を半分ひらく。何か深く考えているようにも見える。

何を考えているのだろう……急にこんな話をしだして。突然固ま
って……

「でも今の私……安奈ちゃんも……けいちゃんも……同じくらい……
……好きだなあ……」

彩子さんは目をつぶったまま、小さく、小さく、そう呟く。

ただどその声のトーンは、とても冗談を言っているようには聴こ
えず、僕の心を激しく揺さぶった。

激しく、激しく……そう、好きに……なってしまいそうなくらい
に……

僕を、揺さぶる……

第五十九話：小さく叫ぶ

ベッドの隣に置いてある時計をしてみる。

もう時刻は夕方の四時を過ぎてしまっていた。

「そろそろ帰らないと」

彩子がそう呟く。どうやら窓の外から差し込む西日に気がついて、俺と同時に時計を眺めていたらしい。

「うん……そうですね……そろそろ」

いままでほとんど声を出していなかった安奈も一度時計をチラッと見て、椅子からそっと腰を浮かせた。

「明日で退院ですね……ちゃんと、迎えに来ますから」

「ああ……解った」

俺は少しだけ無機質に感じる声を自然と発してしまっていた……何を考えているのか、もっと嬉しそうに返事をすればいいのに。実際そう言ってくれて嬉しいのに……

「という事は、今日で私も安奈ちゃんとお別れなのね。さびしいわあ」

彩子は半分笑ったような顔を作り、安奈の腰にぐるりと腕を回して抱き寄せてた。彩子のこういった冗談めかしてやさしい事を言う癖、まさか安奈と二人きりの時にも言っただろうかと、少し心配になる。

「確かに今日でお別れですけど……私達、友達ですよね？」

安奈は彩子の眼を見て少し微笑みながらそう告げた。その瞳は輝いていて、本当にまぶしく感じる。

そうだよ、それが本来のお前の姿なんだよ。本当に人当たりが良くて誰からも愛される、天使。俺が心から惚れきっている、天使。

「うんにゃ。友達じゃない」

彩子はそう言って背伸びをしながら安奈の首に腕を巻きつけ安奈の顔を引き寄せながら頬と頬を擦らせた。

「私ら親友じゃん。安奈ちゃん以上に親しく感じた女の子、他にいないよっ」

……しかし彩子も、いい顔をするようになった。最初は義務のような形で安奈を押し付けてしまつて、彩子是不安のほうが大きいような顔をして安奈を連れて帰つていったが、こいつが今言っている事は嘘でも冗談でもなく、本当に親友だと思つてゐるんだなど、納得できるほどの笑顔を作つていた。

これも全て、安奈の力なんだと、思う。

「……素晴らしいぞ、安奈」

俺は誰にも聴こえないように、少しにやけながらボツリと呟いた。

「また明日来ますね。待つててください」

「おやすみ松本く〜ん」

「それじゃあ、失礼します」

三人は病室の出口付近で手を振りながら俺に挨拶をする。俺は「ああ、またな」と言つて小さく右手を動かした。

俺のこの姿を確認した三人はゆっくりと歩き出したのだが、俺との別れを惜しむようにチラチラと俺のほうを振り返つてはニコツと笑い、また小さく手を振つてくれている。

俺はそんな三人の後姿を、見えなくなるまでずっと見続けていた。……それにしても、なんて不思議な光景だと思ふ。

少し前なら俺が入院したつてお見舞いに来てくれる人なんて家族くらいのものだと思つていたのに。今では三人も、本当に俺を心配して来てくれる。

なんだか満たされる。すごく嬉しい気分になる。確かにまだ解決しなければならぬ事もあるんだが、なんだかそれも超えられそうな気がしてくる。

心の持ち方ひとつでこんなに変わるだなんて……今までいつ死んでもいいだなんて思つていた事が恥ずかしくなる。今は全然そんな事は思わない。むしろ、生きていたいと思う。

あいつらの笑顔が見たいから。あいつらともつと話していたいから。そして何より、安奈と一緒に居たいから。生きていたい。」

「……並んで歩いてみたいな……」
俺は小さく呟いた。

安奈……安奈の言う事も、解らないじゃない。解ってはいるつもりなのだが、いまひとつ納得できない。

俺が見た限り、安奈は性行為をする毎に狂っていつているように思える。いや、そもその思想が、狂っている。愛の尺度は狂う事。そして愛を表現するには性行為しか無いと……そういつていた。

安奈がそうなってしまったのは、おそらく過去に何かがあったんだと思う。だから俺はその過去を知りたい。元々が天使のような人間なのに何故あんな価値観を持つてしまったのか。その過程が、ものすごく気になってしまふ。だから、納得できるまではあの狂った安奈の相手は、とてもじゃないが俺には無理だ。

しかし安奈はやダと。話したくないと言う。俺だってそれは解っていた。話しにくいというレベルではなく、話したらどうにかなくてしまいそうなほどの過去なのだろう……

だけど、俺はどうしても知りたい。知らない……納得できない。頭かてえ……」

意固地になる事はないんじゃないのか？性の開放こそが愛だと言うのならいつそのこと身をまかせてしまえば。そうすれば確かに安奈をもっと感じられる。もっと深く繋がれる。ずっと一緒にいられる。それはまず間違いない。

間違いないのだろうが……同時にこの考えは違うという違和感を感じる。

眼を閉じていたら、何も見えない。眼を逸らしたら、見失う。そんな事じゃあ駄目だろう。そんな事じゃあ今までと同じだ。

「……あーっ！っ！」

……あ？　なんだ……？

誰かが小さく叫んでいる。

……いや、それよりも。俺は何故なんの脈絡も無く安奈の事を考
えてる？

「……あれ……？」

……何を考えていた？　あれ？

「……あー……っ……！！」

あれ？

第五十九話：小さく叫ぶ（後書き）

はい、どーも。第三章的なものはここで終了です。

ラストは今後への布石っぽくしてみたんだけど、ちよい失敗感が漂っていると思った。もうちよい上手くやればよかったと思ってる。うん、納得してはいない。

ブログのほうにも書いているのですが、この第三章で書きたかった事は「意思や信念」という部分。それぞれのキャラが持っている意思、信念。それを書いて見たかった。それらが少しでも伝わって欲したら嬉しいな〜と思います。

さあ〜て。次回からはもう「心を語る、心に問いかけるお話」とは呼べない展開になっていくかも知れない。どんな展開になっていくかは読んでからのお楽しみですが、ひとつだけ注意していただきたい事があります。

今までの「安奈」が好きな人には、あまりお勧めできる内容ではないかも知れません。自分が書きたい事を本当にただただ書いているだけです、メッセージ的なものはかなり薄れてきます。

第四章でのテーマは「狂気」。今までの流れでも多少狂った描写はありましたが、比じゃありません。なんせテーマそのものが「狂気」なんだから。ラストはその布石のつもりだったんだが……どうやら上手く行っていない。ぐんにより。

とにかくにも、第四章、お楽しみに。今まで読み続けてくれた人達、ごめんなさい。裏切ります。ですが絶対目を逸らさないでくださいね。

第六十話：疎外感（前書き）

注意：ここからのお話は、相当狂ってきます。なにせテーマが「狂気」ですから。そういったものが嫌いな方はブラウザの戻るボタンを連打してください。

第六十話：疎外感

過去……過去か。

過去を話さなければ、松本さんはもう抱いてくれない……しかし落ち着いて考えればこの交換条件は当然の宿命のような気がする。

むしろ今まで話していなかった事のほうが失礼だったろう。一緒に暮らして一年……よくも黙ったままでいられたものだと思う。

だけど、ちゃんと話せるだろうか。私自身もうずいぶんと遠い過去のような気がしていて、すぐにはハッキリと思いつけない。そもそも松本さんだって、彩ねえだって、けいちゃんだって、誰だって自分の過去を鮮明に覚えているのだろうか。しっかりと話せるのだろうか。

確かに私の過去は特殊だし、印象に残っている場面だって多々ある。けど、それは断続的で曖昧で主観的な記憶。正しいかなんて解らないし確認のしようもない。ちゃんと伝えられる自信は無い。

「……はあ……」

……いいや、言い訳か。これは話したくないという心のために理性が打ち出した言い訳だ。私はズルイから……話さないで済むなら一生話したくは無いと思っていた。松本さんだってむやみに聴いて来る事は無かったんだから、それでいいと思っていた。

だけどやっぱり気になるんだろうな。これからまた一緒に暮らし、ていこうという人間の過去を知りたいと思う事は当然の事だと思うし松本さんにはその権利がある。

私だって……出来れば全て話したい。話してスッキリして何の後ろめたさも無く松本さんと付き合っていきたい。でも、怖いんだ。ハッキリと思い出す事も怖いし、松本さんが引いてしまうのではないかと思うとまた身震いする。

……ああ、ジレンマだ。ジレンマが頭を支配して思考がまとまらない。

「……………はあ……………」

私は何度目かのため息を漏らして、空を見上げた。空はもう西日を通りこして蒼くなっている。透き通った空気が星を綺麗に見せていた。

キイ……………キイ……………という錆付いたブランコの揺れる音が、誰も居ない公園にさびしくこだまする。

「クシュッ……………」

さすがに少し冷えてきたらしい。さきほどからくしゃみが出る。

「あ……………もう帰ろうかな……………」

私はそう呟き、ブランコから腰を上げてお尻をパンパンと叩く。そしてもう一度「はあ……………」とため息をつき、空を見上げたまま歩き出した。

彩ねえにもけいちゃんにもこんな相談を持ちかける事なんて出来ないから、私は「ちょっと散歩に行つてきます……………」と言い、外に出て考える事にした。しかし考えたつて答えなんか出る訳も無く、ただただ自分の中のジレンマと戦う事しか出来ずに今アパートへと向かつて歩いている。

それで収穫は……………そうだな。普通に考えて過去を話す事が最低限の礼儀だろうとは思えた。決意は出来ないけど、思う事は出来た。散々お世話になつているんだし……………これからもなるんだし……………本当の意味で過去を清算するためにも、話しておくべき事なのかも知れない。

「……………引かないでよね……………松本さん……………もし話す時が来たなら、私を抱きしめておいてね……………」

そして話が終つたとしても、ずっと離さないでいて欲しい。

……………ずっと側に居ると、約束して欲しい……………

私は一時間ほどの外出を終えて、アパートの部屋へと帰ってきた。今日はけいちゃんも一緒にこの部屋にいる。

「ただいま」

私は玄関のドアをくぐり、中に居るであろう二人に声をかけた。真っ先に聴こえてきたのはけいちゃんの声。「おかえりなさい」という、普段より少しだけ低いと感じる声になんだか違和感を感じる。

「……おかえり安奈ちゃん」

続けて彩ねえも返事をした。彩ねえの声にも、なんだかいつもの元気が感じられない。私は何かがあったのかと思い、急いで靴を脱いでリビングへと駆け出していた。

玄関とリビングを仕切っているドアを開けると、二人とも布団の上に座り込んで、なにやら暗い顔をして押し黙っている。開いたドアに気付いて二人とも私を見てはいたのだが、なにやら本当に元気がないような印象を受けた。

「何？ 何かあったんですか？」

私はその雰囲気になんて耐えられず、少し明るい声を出していた。

「うっん、何にもないよ。あ、そうだ。今日はけいちゃんも一緒にご飯食べてくつて。泊まって行けばいいのに」って言ったんだけどさあ」

彩ねえは急にいつもの笑顔を取り戻し、「ははは」と派手に笑った。だけどその笑いも、なんだか白々しく感じてしまう。

「……彩子さん、冗談がだんだん悪質になってってますよ」

けいちゃんは少し呆れたような表情を作り「ふう」と小さくため息をついた。でもやはりそれも文字通り「作り」のような気がしてならない。

絶対に何かを隠している。そう直感した。

「……彩ねえ、何か隠してるなら、今のうちに話してください」

私のこの言葉を聴いて、彩ねえは一気に顔を青ざめさせていた。そして私から視線を外し、まるで助けを求めるかのような顔をしながらけいちゃんの手を握り締めていた。

.....
嫌だな.....
疎外感を感じる.....

第六十一話：業が、積み重なる

「安奈さん、本当に隠してる事なんて無いですから」

けいちゃんは私の手をギュツと握り返して弁解してくれた。その行動に、その言葉に、ものすごく心が温まる。本当にけいちゃんは頼りになる人間になったと、嬉しくもなった。

けど同時に、安奈ちゃんに対して罪悪感も湧き上がる。だって、本当は隠しているんだから。本当は携帯電話で脳挫傷について調べていた。そしてその症状を見て私達は落ち込んでいた所だったのだ。なんとも間の悪い時に帰ってきたものと、落胆してしまう。

「安奈ちゃん本当だってば。私が安奈ちゃんに隠し事する訳ないじゃない」

私は明るい声で業を積みかさねた。

思い返せば……安奈ちゃんに関わってから業ばかりが積み重なっている。安奈ちゃんを狂わせた事に始まり、えいちゃんを事故らせ、けいちゃんを巻き込み、そして……取り返しのない事をしました……

私に関わるきつとろくな事が起こらない。そんな風に感じてしまう。それでも私は、精一杯の笑顔で安奈ちゃんに話しかける。また業を積み重ねる。

業を積み重ねたら積み重ねただけ、償っていかねばならない。そして償うためにまた業を重ねる。矛盾と感じていてもやめてはいけない。だってけいちゃんの言うとおり、これは私の罪だから。

「……彩ねえ……なんで嘘つくの？」

安奈ちゃんは少し怒ったような顔をして私の目を見る。疑っているという目では無い。隠している事に対して怒っている目だ。

その目が、辛い……安奈ちゃんの視線が鋭い刃となり私の心をグザグザと突き刺し、引き裂いていく。

「嘘じゃないよ。今日は生理でちよつと気分が悪いだけ」

「さいねえ!!」

豹変し大声を上げる安奈ちゃんを見て私は思わず「ひっ」と声を漏らし、体を硬直させた。

その様子に気付いてか、けいちゃんはより強く私の手を握る。握ってくれる。

「親友つて言つたのは彩ねえじゃない!!　なんで嘘つくの!?!」

「安奈さん……聴いてください」

「けいちゃんにはきいてないでしょ!?!」

私は体をガタガタと震わせた……

普段の私ならなんとかかしていた。なんとか出来ていると思う。だけれど今の私は、駄目だ。

有香さんの話を聴いて以来、私の精神はどんどん小さくなっていつて、今じゃ笑顔を作る事にも難儀する。それほどまでに、落ち込んでいる。

「安奈さん……あのですね……」

「黙ってて!!」

……安奈ちゃんも、不安定なんだな。きっと私なんかより遥かに異常に近い存在。そんな気がする。

だって……顔がマトモじゃない。人間の、顔じゃない。

鬼。鬼だよ、今の安奈ちゃんの顔。自分の異状に、気付いてる……

……?　自分の顔、鏡で見た事ある……?

可愛いだけに、恐ろしいよ、安奈ちゃん……

「あつ……安奈ちゃん……」

私は震える声でゆっくりと話し出した。

「い……言うから……そんな……顔しないで……」

「彩子さん……」

けいちゃんが不安そうな顔で私を見る。強く握られた手を、私は

「大丈夫」と言うように、強く握り返した。

「やっぱり何か隠してたんだ」

「じ……ごめんね……ごめんなさい……でも……」

「やっぱり！！ 隠してたんだ！！」

安奈ちゃんは大声で叫ぶ。

「やっぱり！！ 嘘ついてたんだ！！」

鼓膜が破れる……

それほどに安奈ちゃんの怒鳴り声は、大きい。

以前私が自身の中に感じた魂の叫び……それを安奈ちゃんも感じているのだろうか。普段なら決して出ないような、大きい声。

「だっ…… だからそれは…… 本当にごめん」

「許さないゆるさないゆるうつっ…… ゆるさない！！」

安奈ちゃんは舌を噛んだらしく一瞬どもるが、すぐにまた「許さない」を連呼する。相変わらずの大きな声で。

相当深く噛んでしまったのだろっ、口から大量の血を流しながら「許さない」「ゆるうさない」「ゆるうつさねい」と、狂ったように、狂った表情で、叫ぶ。

業が、積み重なる。業が、積み重なる。業が…… 押し寄せる…… 業に…… つぶされる……

「けいちゃん…… 逃げよう」

…… 安奈ちゃんから逃げるのではなく、業から…… 逃げたくなっ
た。目を背けたくなっ

た。私は小さく、無意識のうちに呟いていた。

手は、握られたままだった。

第六十二話：僕が、構うんだ

走った。

彩子さんの手を引きながら、僕は無我夢中で走った。

後ろを振り返るのが怖い……怖い怖いこわい。

あふれ出る血と切れてしまった舌のせいで上手く喋れないのか「ゆぶざねい」と、言葉とは思えぬ言葉を叫びながら、安奈さんは狂ったように追いかけてくる。

なんで……なんでこんな事になってしまった……？ 一体何が……どうして……？

「うううっ……うううっ……」

彩子さんは泣きながら走る。だから彩子さんに聞く事は出来ない。そもそも僕だつてわからないんだ。彩子さんだつて、きつとわからないだろう……

「くそぉ……なんなんだっ……？ なんでこんな事に……」
誰に言うでもなく、蒼黒い空を見上げながら、ボソツと呟いた。

「……けい……ちゃ……ぜえ……ぜえ……」

彩子さんが話しかけてくる。

切れてしまった息で必死に声を絞り出し、僕の名を呼んだ。

「はい？」

「……けい……ちゃ……ごめ……ね」

「何がですか？」

「ま……巻き……込んだ……」

何を……何を言っているんだこの人は……？

今は逃げる事に集中しなければならいだろうに……そんな事を言うのは後にして欲しい。

いや、そもそも彩子さんに謝られるような事は何一つない。松本さんや……安奈さんに向けてならいざ知らず、僕に対して「巻き込

んでごめんね」なんて……

「彩子さん……いいから」

「ぜえ……ぜえ……」

「いいから」

……そう、いい。

僕は、いいよ。だって、なんだか満足しているんだ。

怖いけど……恐ろしいけど……責任も感じるけど。

それでも僕は……満足している。充実している。

「彩子さん……」

「ぜえ……ぜえ……」

「……今は、貴方が」

「ぜえ……ぜえ……」

「貴方が、一番好きです」

もう僕は、貴方の支柱じゃないか。そう言ってくれたじゃないか。

「ごめんね」なんて、言わないで欲しい。

「ゆぶざねい」は未だ追いかけてくる。むしろさっきよりも大きく聴こえてくるような気がする。つまりは、追いつかれつつあるという事……

安奈さんは走る事に疲れを感じないのか……僕もそろそろ息が切れてしまいそうだ。

「ぜっ！ ぜっ！」

「はあ……はあ……彩子さん……大丈夫……ですか……？」

彩子さんの表情がもう限界だと知らせてくる。呼吸も普通じゃない乱れ方をしだした。しかしそれも当然だ、もう五キロは走り続けているんだから。

「ぜっ！ ぜっ！ だ……！ じょ！」

そうは、見えない。

いくら笑顔を作ってみせても、大丈夫なようには見えないんだ……彩子さんの顔は赤をとつくの前に通り越して、今じゃ真っ青にな……

ってしまっている。大丈夫な訳が無い。

しかし強がるのが、この人を支えている。今までの人生でも、今でも。

「はあ……はあ……やっぱ格好良いですよ……彩子さん」

彩子さんのその姿が格好良すぎて、涙が出る。涙が、止まらない。きつとこれからも……彩子さんは抗う。とりあえず逃げ切ったら冷静な安奈さんにもう一度話をしにいく。清算しきれないほどの罪なのだろうけど、彩子さんは絶対にそうする。

だって彩子さんは……彩子さん……

「ぜっ……！ぜっ……！」

彩子さん……？

なんで、手を離すの……？

「さ……彩子さん！」

僕の後ろで前かがみになりながら手を膝に置き一生懸命息をしている彩子さんに向かって、僕は叫んだ。

「何……何をしているんですか！？」

彩子さんは、笑顔を作っていた。僕を心配させないように、苦しそうな笑顔を作っている。

その笑顔が、いい。愛しい。もし疲れてしまって足が止まっているのだとしたら、抱いてでも走って行きたい。

「疲れたんですか？　じゃあ僕」

彩子さんは手と首を横にふる。

「ぜっ……ぜっ……逃げちゃ……ぜっ……よね……」

「え？？　何ですか？？」

「にげ……ぜっ……ぜっ……って……かつこ……わる……」

ニゲルッテカッコウワルイ……？

逃げるって格好悪い……？

全身に、寒気。鳥肌。悪寒。

「だ……だって今安奈さん普通じゃないんですよ！？　話通じなかつたじゃないですか！」

「……ちが……わた……は……わたし……だから……」

チガウ、ワタシハワタシダカラ……？

彩子さんは……彩子さん……格好よく、いつも気丈に振る舞い、何事にも動じず、堂々としていて、意地っ張りなほど我俣な……

彩子さん。

涙が溢れる。駄目だ。そんな事許さない。全然格好悪くなんか無いから。彩子さんは相変わらず格好いいから。だから……駄目だ。その我俣は、きけない。

「……いいから！　逃げましょう！」

ああ……近づいてくる……「ゆぶざねい」が、もうそこまで……

「何されるかわかんないんですよ？？」

「なに……され……かま……ない」

「僕が！　構うんだ！」

僕は再度彩子さんの手をつかみ、引つ張る。

彩子さんは、ニコツと微笑み「はは……」と小さく笑ってから……前かがみに、倒れた。

彩子さんの横腹から、何かがはえている。

第六十三話：これで、四度目

「ゆぶざねい」

やめなよ、安奈……もう、やめなよ。

何をそんなに怒っているの……？ 彩ねえは別に悪気があって嘘をついた訳じゃないと思うよ……？

きつと話しにくい事があつたんだよ。私には話さないほうが良いって思ってたんだよ。彩ねえ、私には優しくかったじゃない。そうだよ、きつと、そうなんだよ。

認められたいの解る…… 安奈は人一倍その感情が強かったもんね…… だけど駄目だよ…… ころしちゃ駄目…… ころしちゃったら、認めさせる事も出来なくなるんだよ……

「ゆぶざにえ」

ほら…… もう満足に呂律も回らない。手当てしないと舌取れちゃうよ……？ すつこく痛いもん…… これ以上しゃべったら取れちゃうって……

「ゆぶざにえ」

しゃべらないで…… 今しゃべるとしゃべれなくなる……

「ゆぶざにえ」

しゃべらないで…… 早く手当てしてよレイナ。

「ゆぶざにえ」

礼奈…… もう本当にやめてもうやめてよ…… いつまで…… いつまで私を恨めば気が済むの？

「ゆぶざにえ」

礼奈…… 解った、もう他の人を見ないから…… 私が一生愛してあげるから…… お願いだから彩ねえを殺さないで……

「ゆぶざにえ」

けいちゃんも…… 殺さないで…… お願い…… 私が私で居られなくなる……

「……ゆぶざ……」

そう、私が、私で、居られなくなるんだ。

「ゆる……」

私が、私じゃ……？

私は。

私？

私は、礼……奈……？

「ゆる……して……」

私は、私に戻った。

「ああああああっつつ！！ ざいねえ！！ ざいねえ！！」

刺したのは、私……？ 私が彩ねえを刺した……？

私……私が……？

「ごべん！ ごべんぬえざいねえ！！ ざいねえ！！ ざいねえ！！」

私は必死に彩ねえの横腹の傷を押さえる。ドンドンと溢れてくる血がこれ以上出てこないように、必死に押さえる。

それでも指の間から血がはみ出してくる。水道の蛇口でもこれだけ押さえれば止まると言うのに…… 血は止まってくれない。止まらない。

「ごべんね！ ごべんね！ ごべんね！」

でも……この行動は初めてでは無い。良く覚えている。だって、印象深いから。

……四回目だ。この行動は、これで四回目。

「あ……あ……さ……彩子……さ……」

けいちゃんは、呆然としている。ただただ、呆然と、彩ねえの姿を、眺めている。

ああ……ああ……けいちゃん……しっかりして……「ごめん今までごめん頼りにならないだなんて思ってしまったってごめん。あとでいっぱい愛してあげるから。だから彩ねえを助けて。」

彩ねえが死んだら恨むよ一生頼りにならないって思うよけいちゃん
のせいだっと思うよ私は思い続ける事で信じる事が出来るんだか
ら自分に言い聞かせられるんだから。

ずっとそうやって生きてきたんだからあははすごいでしょうずっと
私は私と言いついて聞かせて生きてきたんだからこの四年間ずっと私は私
だっけ礼奈は安奈だっけ思い続けてきたんだから信じて疑わなくな
れるんだよねへすすごいでしょ？

それが嫌なら「だすけていじやん！」

ボロボロと、涙がこぼれる……私の目から、涙がこぼれる……

「だ……じょ……よ」

彩ねえは、呟いた。

「だ……いじょ……だから」

彩ねえは笑いながら呟いている。

「大丈夫な訳……無いじゃないですか」

けいちゃんも呟いた。大粒の涙をボロボロと流し彩ねえの手をし
っかりと握りながら、泣いている。

彩ねえの傷は内臓まで達している……一刻を争う事態だそうだ……
あれだけの出血をして今現在意識があるという事が奇跡と言える
ほどの、重症。

「け……ちゃ……」

彩ねえはまた呟く。救急車のサイレンの音で掻き消えてしまいそ
うなほどに、小さく呟く。

「け……ちゃ……わか……とおも……けど……」

「はい……？　なんですか？」

けいちゃんは彩ねえの口元に耳を近づける。そして彩ねえはけい
ちゃんにだけ聴こえるように小さな声で何かを呟いた。私には
聞こえない……きつと聴こえないように、呟いている。

聞きおえたけいちゃんが悲しそうな表情で「わかりました」と返
事をした後、彩ねえは明らかに無理してニッコリと笑う。けいちゃ

んを見る目には、涙が溜まっている。

そして彩ねえは強く目を閉じ、頬に口元に近づけていたけいちゃんの頬に、ゆつくりと、静かな、キスをした。

「……それで……こそ……けい……ちゃ……だね……」

……そうか、彩ねえは……けいちゃんを好きに……なれたんだ。今まで異性を好きになった事が無いと言っていた彩ねえが、けいちゃんを……けいちゃんもまんざらじゃないようで……

「……死なないでくださいよ」
けいちゃんが呟いた。

「……はは……うん……しな……な、あ……あ、あ、あ……！」
救急隊員の「ショック状態」という言葉が、重く、耳にのしかかる。

第六十四話：それで、終わるんだ

彩子さんは最後の最後、自分が自分である事を選択した。

自分が自分である事……それはつまり、気丈で、我侖で、頑固で、そして、格好良い彩子である事。

彩子さんは逃げるのは格好悪いと判断した。逃げるというのは現実から目を逸らす事。罪を受け入れないという事。それは彩子さんにとって我慢出来ない事。

それらが理由で今、彩子さんは手術を受けながら生と死の淵をさまよっている。

僕は許せるであろうか……？ 我慢できるであろうか……？

取り繕えるだろうか？ 嘘をつけるだろうか？ 発狂しないだろうか？ 憎まないでいられるだろうか？ 殴らないでいられるだろうか？ 陵辱しないでいられるだろうか？ 殺さないでいられるだろうか？

彩子さんとの約束を、守れるだろうか？

数分後、彩子さんの両親が到着した。

「彩子！ 彩子おお！！」

彩子さんの両親はすぐさま病院へと駆けつけたらしい。病院から連絡が入り仕事を切り上げ大急ぎで病院へやって来たに違いない。額には汗、目には涙を浮かばせていた。

ご両親は二人とも小柄。しかしとても整った顔立ちをしている。彩子さんはどちらかと言うと母方の遺伝子を多く受け継いでいたように、一目で親子だと言う事が解るほどにそっくりだ。

そりゃあ、美少女が生まれる……男の子が産まれても美少年になつてたな。なんて、そんな事を思っていた。

「彩子！ 彩子！！」

彩子……彩子……彩子さんのお母さんが延々と吼える。彩子という単語を、何度も、何度も、吼える。抱きつかれている彩子さんのお父さんは何も言えず、ただただ悲しそうな表情を浮かべながら彩子さんのお母さんの頭を撫でていた。

「彩子！ 彩子！」

彩子さんは、他にも罪があつたじゃないか。そもそも安奈さんへの償いは、まだ終わっていないじゃないか。だって安奈さん、まだ何も知らないんだよ？ 安奈さんが知って初めて償えるというのに、まだ安奈さんが知る前に彩子さんが死にそうになってどうするんだよ。

このまま死んでしまつたら何もしていないのと同じじゃないか。ただ安奈さんの逆鱗に触れ、そのまま殺されたという事になつてしまつじゃないか。そんなの……そんなの……

「そんなの……っ……」

……そんなの……無いよ……

警察のひとの会話は良く覚えていない。

僕自身本当に疲れていたから、半分意識が飛んだ状態で受け答えをしていた。

でもとりあえず安奈さんの名前は出していない。犯人は見知らぬ通り魔。暴漢。包丁を持ち追いかけてきたので僕達は必死で逃げ回っていたとだけ話した。そう話せと、彩子さんに言われたから……そう話した。

それ以外の話は、本当に良く覚えていない。終始ボーっとしていつ何を聞かれどう返事をしたのかも全然思い出せない。遠い過去のように、思い出せない夢のように、頭の中から抜け落ちている。

「……解りました。とりあえず後日また事情を聞かせていただきますので」

警察の人はそう言つて一度僕に頭を下げてからこの場から離れていった。僕を見ていた警察の人の目は、なんだか哀れみの視線のよ

うな、不快な感じがした。

「……はい」

僕の声は誰も居ない目の前に向けて発せられていた。もう警察の人は居ないというのに、とりあえず返事をしておいた。

警察との話が終わり、僕はフラフラと歩き出す。とりあえずエレベーターが設置されている場所を目指し一歩一歩ゆつくりと歩を進めた。

この病院は松本さんが入院している病院……というか、この街ではこの病院以外に入院や急患を受け入れられる施設は無い。必然的に、松本さんが入院している病院へと僕はやってきていた。

だから僕は、松本さんの病室へと向けて歩いていった。もう面会時間は過ぎているのだが、今現在僕は病院内に足を踏み入れているのだから構わないだろう。と、自分勝手な言い訳を考えながらフラフラとエレベーターに乗り込んだ。

しかし僕はエレベーターに乗ったはいいが四階のボタンを押す事をせず、そのまま隅っここのほうで腰を下ろしてしまい、膝を抱えてしまった。ガーという音を立ててエレベーターのドアが閉まり、完全な密室が出来上がる。

「……彩子さん……彩子さん……」

なんで立ち止まったのだ。立ち止まらなければならなかったのだ。意地を張ったって良い事なんか無いだろうに……意地を張って死んだら何にもならないだろうに……

確かに格好いいけど。彩子さんの選んだ道はまるで映画のようにドラマチックだけど。

そう、「けど」と「だけど」なんだ。すべてはそこに集約されてしまう。

格好いい「けど」死んだら終わり。ドラマチック「けど」死んだら終わり。

終わりなんだよ。死んだらそれで終わり。味わっていない感情、

感動、それらがまだあるというのに。これから僕ら二人で模索していこうとしていたのに。終わってしまうんだよ。

「終わるんだよ……死んだらそれで……」

憧れていた……尊敬していた……大好きだった……彩子さんのそういう部分……だけどそれが元で苦しんでしまった。そして今、死因になろうとしている。

正直、解らない……僕は……もう、何が、なんだか、わからない。
「彩子……さん……」

僕は膝を抱えてより小さく身を固めた。全身が、寒いから。寒くて、寒くて、凍えてしまいそうだから。

僕はガタガタと震えながら、エレベーターの隅で泣き続けた。

第六十五話：もう二度と届かない

「啓二君……？」

まるで死人……啓二君の顔を見た瞬間に抱いた印象はこれだった。そう、生きていない。昼間の啓二君とはまったく違う印象を受ける。啓二君の存在が朧に見えるような、魂が半分抜けかけているような、そんな印象。

顔を真つ青にして肩をダラツと落とし、体のどこにも力が入っていないかのように全身がブラブラとしている。本当に死人がそのまま動き出したかのように見えてしまう。

「……どうしたんだ？ 今は面会時間じゃないはずだけど」

啓二君は病室の前で俯きながらただただ立っていた。

俺は啓二君のあまりの気配の無さに啓二君の存在に気付く事が出来なくて、たまたまトイレに行こうと病室を抜け出そうとした時にようやく啓二君の存在に気付く事ができた。

いつからここに立っていたのかと考えると、少し怖くなってくる。

「……ま……松本さん……」

啓二君は顔を上げ、俺の目を見た。

啓二君は目にすら力が入っているとは思えず、本当に、死人のような印象を受けてしまい少し恐怖する。

「な……何だ……？ 何かあったか？」

「……松本さん……彩子さんが……」

啓二君はフラフラと体を前後に揺らしている。

「彩子？ 彩子はどうした？」

「彩子さん……死にそうです」

「……あ？」

彩子が、死ぬ？

殺しても死ななそうな、あの彩子が死ぬだって？ 何を言っているんだ、こいつは。

「……何言ってるんだ？」

「……何って……死ぬんですよ……」

「……なんで？」

啓二君は俺の顔をギロリと睨んだ。

青白い顔なのに、体には力が入っていないというのに、眼だけはギラギラと光っているような、そんな印象を受ける。

正直、怖い。

「……貴方の彼女に刺された」

「……俺の……？」

俺の彼女……

彼女と呼べる人間は、思い当たる中で一人しか居ない。

頭が、痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

なんだ……？ なんなんだ……？ 急に現実感が湧いてくる……

啓二君の言葉が嘘では無いと思えてくる。

なんだなんだなんだ……？ 安奈の名が出ただけなのに……それだけなのに、彩子は本当に死ぬんだと……理解できてしまう……安奈が殺すんだって、納得してしまう。

「……ほ……本当に……死にそうなのか……？」

「はい」

「さ……さした……って……な……なん……」

「……理由を聞いて、どうするつもりですか？」

「い……や、だって……」

「はは。だってじゃないでしょ？」

啓二君はフラフラと体をゆらしていたのに、突然、すばやく体を動かし、俺の胸倉を掴み、壁へとたたきつけた。ドンという低い音がやけに静かな病院の廊下に鈍く響く。

「だってじゃないだろ……今重大な事は安奈さんじゃなくて彩子さんの容態だ。違うか？」

啓二君の顔は一見無表情にも見える。しかし目が違う。目だけは

しっかりと怒りの感情が込められていた。瞳自体が光を発しているかのように、ギラギラとしている。

「……あ……あ……あ……」

「そう……ですよね。解りますよね」

啓二君は発達途中の中学生とは思えない腕力でなおも俺の胸倉を掴み壁へと押し付ける。ギラギラと瞳を光らせながら、俺の目を見続けている。

ヤバイ……啓二君は本気で怒っている……本気で……おかしくなっている……

「一応言っておきます。安奈さんは舌を嚙んでしまったので今治療してもらってます。たいした怪我じゃないです。心配いらないます。これで満足ですか？」

「……ああ……」

「そうですか。じゃあ彩子さんの状況を言います。彩子さんは安奈さんの後ろから右横腹を刺されてその傷は内臓まで達しています。かなりの量出血してしまつて危険な状態です。ほっとけば五分で死ぬような状況です。助かるかどうかは彩子さんの体力次第です」

相変わらず啓二君は無表情……声にも感情が籠っていない。ただただ淡々と安奈と彩子の状況を説明していた。

ああ……この子も狂つてしまったのか……そんな事を思つてしまった。

「彩子……の……両親は来てるのか……？」

「来てますよ。わんわん泣いていました」

啓二君はそう告げてさらに強く俺を壁へと押し当てる……

苦しくなつてしまったので啓二君の腕を掴み必死に引き剥がそうとするも、抗えるような力じゃ無い。絶対にスポーツか何かをやっている。太刀打ちできそうも無い……

「け……啓二君……苦しい……」

「……ですか」

啓二君はそう言つてようやく右手の力を抜き俺を解放してくれた。

それでもまだ胸の周りは痛いし息も苦しい。

「かは……はっ……は……」

ああ……それにしても……

それにしても……安奈……狂ったか……あまつさえお世話になった彩子を刺すだなんて……狂わなければそんな事到底出来る訳が無い。

一体何があつたのか……一体何が起こっているのか……知りたい。安奈に会いたい。安奈と話したい。安奈……安奈……

「安奈……」

「まだ言いますか。彩子さんの心配はしないんですか？ 元は彼女なんでしょ？ 彩子さんが 刺されたって聞いてまず彩子さんが今どこに居るのか聞いてくると思ったんですけどね」

「……安奈はどこに居るんだ？」

「……あんた」

「安奈は、どこに居るんだ？」

「いい加減にしろよ」

「教えてくれ」

「……狂ってやがる。お前ら二人とも、狂ってる」

「頼むから……」

啓二君は呆れ返った表情で俺を見て「もう会う事も無いと思います」と言い残し、ゆっくりとこの場から離れていく。

俺はその後姿を見ながらも一度「教えてくれ」とつぶやいた。しかし啓二君は歩みを止める事は無く、どんどん俺から離れていった。

「頼むから……教えてくれ……行かないでくれ……」

声は、もう二度と届かない。そんな気がする。

第六十六話：安奈は私、私の中に

この女医さんは二十代後半くらいの歳だろうか？ この病院で一番はじつこの小さな診療室で彼女は私の舌の診察をしてくれた。

軽くクスリを塗ってくれ「痛いだろうけどすぐに治るから」と言っ
てニコツと微笑む。

「なんでこんな強く噛んだかな。何か衝撃が加わらないと普通ここまで深く噛まないよ？」

女医さんは「あゝあ」といいながらノートのようなものに私の診療状況をまとめている。

その様子を見て、私は違和感を覚えた。

普通患者の診療記録として使うものはカルテ。カルテとして保存し後ほど保健所から保険料を貰うというのが普通だと思うのだが……

「……カルテ……じゃないんでふか？」

「あ？ これ？ はは」

女医さんはノートを指差して「はは」と笑う。そして少し複雑そうな表情を作り、ボールペンの先で頭をカリカリと掻く。

「貴方この業界じゃ有名人だからねえ」

「ゆうめいじん？」

「貴方、礼奈ちゃんでしょ？」

その言葉を聴いた瞬間、背筋に悪寒。そしてすぐに全身に寒気と鳥肌。次に視界がぼやけ、頭と顔が熱くなる。

何故この人は私を知っている……？

「え……あ、いえ、わたし、安奈……」

「あれ？ 安奈って……確か死んじゃったんじゃないの？ 逆だったかな？ まあ私も噂で聞いた程度で詳しくは知らないけどさ」

そう言っ
て女医さんはペンを置き、私の頭の耳を見る。

「貴方、何人も殺してきて感覚麻痺してるのかも知れないけどさ、もうあまり人殺さないほうがいいと思うよ。せっかく恩赦で自由に

なれたつていうのに、シャバで事件を起こしてもかばってくれる人なんか居ないんだから」

……この人は、どこまで知っているんだ……？

そして、噂……？　噂ってなんだ？　私の知らない所でいつたい何が起きている？　誰がどんな噂を流した？　なんだ……なんだ……？

「……私、ひどなんでごろづいてない……」

「……またまた。少なくとも過去に二人、殺してるじゃない」

……私が安奈だとしたらアイツを殺したのは私で私が礼奈だとしたら安奈を殺したのは私で……どちらにしても私は人を殺してころして

「ごろしてにあい！」

「え？　だつて現に」

「ごろじてないごろじてないころしてない！」

女医さんは驚いたような表情を作り私の顔を見る。見るな見ないで私を礼奈と呼ぶな。

ああああ、違う違う違う違う違うんだ。安奈は私。私の中に私の中に生きていてそしてずっと一緒だと誓ったんだから私は安奈で安奈は死んでなくて安奈は今でもこうして死なないで生きているんだよ誓ったんだ私が、礼奈が、安奈として生きていくつて。

死なないため。安奈が、死なないために。

安奈は、ずっと、死なない。死なないんだよ、安奈は。一生大事にするつて言ったもん。だから安奈は幸せにならなきゃいけないんだ。愛を与えなきゃいけないんだ。

なんだよアイツは礼奈ばかり可愛がりやがつて安奈にも愛を与えてやれよ安奈を大事にしてやれよ安奈は必死に生きているじゃないか醜い体を晒しながらそれでも一生懸命生きているじゃないか。

「ごろじてないごろじてない殺してないんだ死んでないしんであいじんでなんがいあいだろ見えないのか私が！」

「……ふうん。そつかそつか。マトモじゃいられないもんね」

「あんらよその言いかだ！ 私はマトモなよ！ 全然普通！ 頭にお耳どおじつぽ以外普通でしょ！？」

「普通っていうか、その耳むしる超可愛いよ」

「えへへ可愛いですよごく可愛いでしょ天使の羽なんかより全然こつちのほうが可愛いとおもうんだゝ羨ましい？」

「人間に、天使の羽……ねえ。そりゃ失敗するよね」

「失敗って言うな安奈の事を馬鹿にするにあ！ 貴方に何がわかるっていうんだ！」

ああああああ。

色が混ざる混ざって黒になる。

赤も青も黄色も緑も茶色も鼠色も金も銀も。

全部まざると黒になる。黒になると、あとからどんな色が入っても、やっぱり黒は黒のまま。

白が、欲しい。白が欲しくて、たまらない。唯一白だけが、希望を持たせてくれる。

松本さん愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛してくれたら白くなれるよう。

だけど、伝わった試しは、無い。

第六十七話：僕は壊れたのだろうか

家へと辿り着いたのはもう深夜と呼べるような時間帯で、玄関のドアを開けるなり母親が青筋を浮かべながら仁王立ちで待っていた。「今までどこに行ってたの？」

僕はそんな母親の事なんて気にもとめず「別に」とだけ答えて靴を脱ぎ家の中へと上がるうとする。

しかし母親には僕のこの態度が気に入らなかったらしく、僕の肩をドンと押し「別にじゃないでしょ」と少し声を張り上げながらにらみつけた。

それでも僕はそのまま家の中にあがろうとする。母親のその行動なんてお構いなしに、ずかずかと家へと上がりこんで階段を上っていった。

後ろで何か怒鳴っているようだが、関係ない。そんなの気にしてなんかいられない。

僕は自室へ戻ると、着ていたコートを乱暴に脱ぎ捨て、踏みつけた。何度も、何度も、踏みつけた。次第に踏みつける事に飽きてきたので、今度はカッターを取り出して切りつけた。規則正しく切るのではなく、この思いをぶつけるかのように、乱暴に、乱雑に、切りつけた。

「……ああああ……」

それでも気持ち晴れる事は無く、ただただイライラが積もっていくだけ。踏みつけるたびに、切りつけるたびに、余計、イライラしてくる。

「どんなっ……過去が……あっても……許されない……許さない……っ！」

絶対に、許してたまるか。

謝ったって、許してやるものか。

「啓二……?」

僕のこの騒ぎを聞いて姉が僕の部屋のドアから顔を覗かせた。僕はというと今は少し落ち着いて自分のベッドの上で膝を抱えながら座ってどこを見るでもなく、ただただボーッと視界を曇らせていた。

「……何?」

「何じゃないっけ……どたばたしてたしよ」

「姉貴には関係ない事だっけさ」

「……」

姉は寂しそうな表情を浮かべて、おそろおそろ僕の部屋へと足を踏み入れる。僕を刺激しないようにか、足音すらも立てずに、ゆっくりと入ってきた。

「……別に普通に入ってこればいいのに」

「ん? そっか……座ってもいい?」

「……だから、断らなくてもいいよ」

姉はなんだかやりずらそうな表情を作るも、机の前にある椅子へと腰をかけて僕のほうを向く。そしてジッと、僕の顔を見つめていた。

……忘れていた。そういえば昨日から姉は少しおかしい。今まで何が起こってもこんな風に部屋を行き来するような事は滅多になかったのに。一体何があると言っのだろうか。

「……そいやさ、姉貴昨日からちよいおかしいよね。なんかあった?」

「ん? ん……ちよつとね」

姉は虚を突かれたようで一瞬驚いた顔をした。そしてすぐに寂しそうな表情を作り、僕から目を離す。

俯きふせって、少し目をキョロキョロとさせている。その挙動不審な行動が、なんだか自分を見ているようで少しイライラしてしまう。やはり姉弟という事だろうか、変な所が似てしまった。

「へえ……そうなんだ」

「うん。そうなんだ」

この言葉を最後に、二人とも黙り込む。

お互い何を話すでもなく、何を聞くでもなく、ただただ時間が過ぎていった。

明日は、何をしようか……？

彩子さんのお見舞い……と言っても彩子さんの意識は結局戻らなかったし、しばらくは面会謝絶にするらしいし、そもそも手術が成功したのか助かるのか、それすらわからない状態だ。

僕は何もする事が無い。何もする事が出来ない。やらなければいけない事は沢山あるような気がしているのに、何をすればいいのか解らない。

結局は、あれか。僕には何一つ、出来る事は無いって。そういう事か。

「啓二……一緒に寝てくれない？」

僕には……彩子さんを助ける事も、松本さんを救う事も、安奈さんを正気に戻す事も出来ない。

「啓二……私寂しいんだ」

彩子さんに相談された時は嬉しかったし頑張ろうって思えたのに……今は、もう……

ほんの数時間前の事。本当に数時間前だと言うのに……まっさらだった僕の心はどす黒く変色してしまい、今では松本さんも安奈さんも嫌いに……

「啓二……見てほら……私震えちゃって……」

「……んだよさつきから……うるさいよ」

僕は不機嫌そうな声で姉にそう告げた。

しかし姉の表情を見て、一気に現実へと引き戻される。姉の顔は、笑っているのに泣いていて、何故か激しくガタガタと体を震わせて腕で腕を暖めていた。

「何してんの……？」

「ふ……ふるえてる……見てわかんない……？」

「いや……わかるけど」

「だ……だったら……暖めてよ……」

……何を言っているんだ、こいつは……

「あ……暖めて……は……やく……」

……姉のその表情は、まるで映画のワンシーンのようだ。恐怖に引きつった笑顔とでも言えがいいのだろうか、とにかく、普通じゃない。

ああ……疲れる……どうして僕の周りにはこう普通じゃない奴ばかりがやってくるのだろうか……一体、なんなんだというのか……神様はこんなに沢山僕に試練を与えてどうしたいのか……

「馬鹿じゃねえの……湯たんぼでも抱えて寝ればいいじゃん」

「だだ……だつてさ……ししし……信頼いいい……でで、できる人間が……もう居ない」

「それは姉貴がそういう連中とばかり付き合ってるからだろ」

「う……うんそう……そううつ……そうなんだ……ごめんごめん……」

……だ……だけど啓二は違うよね？ 私信頼していいいいんだよね……？」

……信頼できるかどうかは他人に聞くものではなく自分で決める事だろう。

それに、信頼できる人間がもう居ないという点において、僕だって同じだ……彩子さんの意識が戻るまで、僕だつてずっと孤独なんだ……

もし意識が戻らなかったら……僕はずっと孤独なんだ……

「……姉貴、甘えるなよな。僕や家族の事うつとうしく思ってたくせに。いざ自分が寂しくなった途端にそれかよ。やめろよそういうの」

「……啓二……そんな……そんな事言わないで……」

姉はうつすらと目に涙を溜めている。半分笑っているような顔で、必死に僕へと語りかけてくる。

……正直、涙はもう見飽きたよ。ここ最近見すぎてなんとも思えない。

「啓二じじ……私死ぬかもしれないよ……？」

「……そんな勇気も無いくせに」

本当の勇気は、彩子さんの中にこそある。この女程度が持ち合わせている訳が無い。

それに、思ってしまう。好きにしろって、思ってしまう。他に何も感じる事が出来ない。他に言葉が思い浮かばない。

僕は、壊れたのだろうか。

から。狂ってしまったんだから。

もういいんだ。全部、もういい。世間体なんて気にするな。筋道なんて考えるな。ケジメなんてつけようとするな。そうすれば安奈とどこまでも堕ちていける。ずっと安奈と一緒に居られる。

それでいい。それが、いい。

「安奈あつ！！ 愛してやるからここに来いっ！！ 安奈あつ！！

安奈ああああっっ！！」

愛は、すべからく、狂愛。

そうだな、安奈の言うとおりだ。今まで俺が間違っていた。何を格好つけていたのか。何を気にしていたのか。馬鹿らしい。そんなもの、ただの感情。一時の理性。

人間だって動物。求め合う際本能に従わなくてどうする？ 人間だけだろ、つまらない理性で倫理や哲学なんて事を考えてしまうのは。

安奈よ、お前が正しい。お前が、答えた。

「まづもどさん」

突然、後ろから俺の名を呼ぶ声。

聞きなれた、とても愛しい、あいつの声。

「安奈！」

俺はすぐさま振り返り、安奈の姿を確認して抱きついた。

ギョウツと、力強く抱きしめる。もう離さないもう離したくない。「知らない」なんて二度と言わないから。だからずっと一緒に居てくれ。

俺を、繋ぎとめておいてくれ。

「安奈…… 安奈安奈安奈…… ぐめんな俺お前を追い詰めていたよな…… もういいんだ。好きなだけ狂ってくれ…… 俺はお前の全てを受け入れるから……」

安奈…… 安奈…… 安奈……

「そつだ、誰も俺達を知らない所に行こう…… 外国だっていい。最

近人気のラブにでも行こう。そこでゆっくり過ごそう……ずっと二人で、生きていこう」

「まづもどさん……ホント……?」

「ああ……心配するな。ずっと一緒に居るから」

「まづもどさん……うれしい……」

ああ……安奈……

狂っていたとしても、人を刺したとしても、どんなに重い過去を持っていたとしても……

やはりお前は俺の天使だ。お前無しでは生きていけない。前は「安奈にとって俺が全て」と思っていたが、なんて事は無い。「俺にとって安奈が全て」なんだ……

「安奈……明日で退院だから、ホテル直行だな」

「あはは……うれしい……」

俺は安奈をより強く抱きしめる。

強く……強く……抱きしめて……

抱き……

しめ……

……

安奈………

第六十九話：カチカチ

ボールペンのカチカチという音が静かな診療室に響く。それ以外の音は存在しない。この場合はカチカチが支配していた。

「……………」

「……………」

松本君はどうやら錯乱を起こし、頭に負担をかけすぎて倒れたらしい。

本人に説明しておけばこうはならなかったのか？　などと考えてしまい、少し心が痛む。

「……………」

「……………」

そういえば、意外にも安奈ちゃんは冷静だった。

この診療室を飛び出して行った時は院内がパニックに陥るのでは無いかと思われたが……看護師と一緒に松本君の体を運んで来た時にはすっかりと落ち着いており、その冷静さがむしろ怖いくらいだった。

今だって。静かに松本君の顔を眺めている。カンシャクを起こしたり錯乱したりせず、しっかりとした目つきで、表情で、松本君を見つめている。

……私には理解できないな。人の死に毎日直面している私でも、今の安奈ちゃんの心境が全然わからない。悲しいのか辛いのか落ち込んでいるのか鬱なのか。もしかしてそのいずれでも無いのか。安奈ちゃんの表情からは、何一つ汲み取る事が出来ない。

私はしきりにボールペンをカチカチと鳴らす。静寂が耐えられない。

「……………」

「……………」

「……………」

「……あは」

「……ん？」

安奈ちゃんが突然小さく笑う。その声はとても乾いた印象を受けて、やはり怖い。

「……いえ、まづもどさんね、ざっき言っでくれたんですよ」

「……なんて？」

「ずっと一緒に居るって」

……なんて声をかければいいんだろうな。なんて言えば安奈ちゃんは納得するんだろうな。

嫌になるほど告げてきた言葉なのに。嫌になりすぎてもう何も感じなくなっていたと言っのに。

この子を前にしたら、何故だか急に感情が高ぶってしまう。今まで通りではいられなくなってしまふ。

「……良かったね、安奈ちゃん。安奈ちゃんにとってすごく大切な人なんだもんね」

「……うん。まづもどさんと一緒なら死んでもかまわないです」

この子の目は、本気だ。本気でそう思っている。

正直、狂っていると思う。松本君もそうだけど、安奈ちゃんも、そして安奈ちゃんを取り巻く環境も。全てが、狂っていると思う。

だから、安奈ちゃんは狂わざるを得なかったんだろうな。狂う事で、自分を保っていた。そう思わせられる。

「……そっか」

「うん、そう」

安奈ちゃん……いや、礼奈ちゃんの過去について、私は全てを知っている訳では無い。

むしろ断片的で不確か。噂程度の事しか知らないのだが、その「噂程度」の知識でも、礼奈ちゃんがどれほどの過去を生きてきたのか、そして何故狂ったのかは、良くわかる。

礼奈ちゃんは四年程前、交通事故にあった。ひとつ年下の妹であ

る安奈と一緒に学校から帰宅している途中に、ひき逃げにあつてしまい、某大学病院へと運び込まれた。

しかしその大学病院が、良くなかった。

その助教教授である当時四十二歳の飯田が彼女らの手術を担当したのだが、表向きでは手術は失敗したという事になり、二人とも死んでしまった事になっている。

しかし彼女らは、生きていた。礼奈ちゃんは本物の犬の耳と尻尾を付けられ、安奈ちゃんは天使の羽を模した装飾品を無理矢理背中に埋め込まれてしまったらしい。

……飯田は、こういった事を何度も繰り返し、闇バイヤーを相手に人身売買をしていたそうだ。交通事故すらも飯田の差し金だというもっぱらの噂だが……私はそれすらも本当のような気がしてならない。

しかし礼奈ちゃんと安奈ちゃんは売られる事は無く、飯田の研究室の奥の奥、まるで監獄のような場所にひっそりと隠されていたそうだ。

礼奈ちゃんは、飯田の最高傑作らしく本人が気に入ってしまい売るのが勿体無いと思ってしまったから。安奈ちゃんは、醜くて売り物にならなかったから。だそうだ。

実際にした訳では無いのだが……安奈ちゃんは、本当に酷いものだったらしい。

背骨が曲がってしまい、まっすぐに立つ事が出来ず、顎が膝についてしまうのではないかと、というほど極度な猫背になってしまったらしい。

しかも背中に埋め込まれた装飾品は上手く埋める事が出来なかったらしく、地面へと垂れ下がりがまるで汚いモップが背中からはえているように見えたらしい。

だから、飯田の態度も極端だったらしい。礼奈ちゃんを愛し、安奈ちゃんを拒絶した。

その後の事は良く知らない。礼奈ちゃんが飯田を殺したのか、安奈ちゃんが飯田を殺したのか。そして何故礼奈ちゃんが安奈ちゃんを殺したのか、何故礼奈ちゃんが安奈ちゃんを名乗っているのか、知らない。

知らないが、ひとつだけ解っている事がある。

それは、この子は、人を殺しても、決して訴えられないし、刑に服す事は無いという事。

少なくとも礼奈ちゃんは、二人の人間を殺している。

まずは安奈、そして飯田の息子。この二人は、間違いなく殺している。

しかし彼女は刑務所には決して入らない。何故なら医学会が表沙汰になる事を恐れているから。裏で絵を描いているのは医者が集まり。医学会。人が死んだってなんともなる。なってしまうんだ。

この病院にも、連絡が来た。礼奈を見かけたら、すぐに連絡をするように、と。しかし礼奈に事情を話す事は決して許さない、そして確保する事も許さない。自由にしてやれ、と書いてあった。せめてもの罪滅ぼしのつもりなのだろうか、まったく、胸糞悪い話だ。

再びカチカチが場を支配する。

カチカチだけが、この診療室の時間が動いている事を教えてくれた。

第七十話：僕の形をしている、屍

姉が、死んだ。

朝起きると、姉は自室で首を吊って自殺をしていた。

「……」

姉は、もう何も語らない。

ただ、死んでいる。

ただ、死んでいた。

「……」

聞いていた通り、首吊り自殺というものはかなり汚らしい。

姉の嘔吐に小便に大便……それらが床一面を覆いつくしている。

「……」

姉は、もう何も語らない。

ただ、死んでいる。

ただ、死んでいた。

「……おはよう」

僕は姉に話しかけてみた。死んだフリをして僕を驚かせようとしているのかも知れないと思った。だから、話しかけてみた。

だけど、返事はない。やはり、ただ死んでいる。

「……部屋かなり汚いっけ、掃除くらいしたら？」

僕は姉に話しかけてみた。死んだフリをして僕を驚かせようとしているのかも知れないと思った。だから、話しかけてみた。

だけど、返事はない。やはり、ただ死んでいる。

「……一昨日からなんかおかしいけど、何かあったの？」

僕は姉に話しかけてみた。一昨日から姉の様子がおかしいという事を今思い出した。だから、話くらい聴いてやろうと思った。

だけど、返事はない。やはり、ただ死んでいる。

「……なんだよ黙ってたってわかんないよ」

……僕は姉に話しかけてみた。死んだフリをして僕を驚かせよう

としているのかも知れないと思った。だから、話しかけてみた。

……だけど、返事はない……やはり……死んでる……

「なんでなんだなんでなんだよっ！！　なんで死ぬんだよおおっつ！！」

僕は姉に問いかけた。だけど、返事はない。だって、死んでいるんだから。

「おい！　なんで死ぬんだなんだっていうんだどうしたっていうんだ！！　答えろ！　答えろよ姉貴いっ！！」

「やめて啓二！！」

姉に殴りかかろうとした僕を母は必死に引き止める。

しかし僕は渾身の力を込め母を突き飛ばし、白目をむいている姉の目を睨み、殴りかかった。

「こんの野郎勝手に死にやがって！！　迷惑なんだよテメエは！！」

「啓二！！　やめなさい！！　何やってるのよ貴方は！！」

「僕がどれだけ辛いか解つてんのか！？　辛いのはお前だけじゃねえんだよ！！　死に逃げるなよ！！　死には立ち向かえよ！！　抗えよ！！　死にたくなって今必死に頑張ってる人だつていんだよ！！　自分の罪を清算するために死ねない人だつていんだよ！！　それなのにお前はっ！！　何やってんだよおおっつ！！！！」

あああああああ。

会いたい会いたいよ彩子さん会いたいよ会いたい会いたい。

寂しい辛い悲しい苦しい悔しいム力つく他にも他にも他にも他にも。全ての負の感情が僕を支配する。してしまふ。染まる。僕になつていく。

「あああああああああ」

とめてとめてとめてください彩子さん。とめてよはやく僕をとめて。

「啓二！！　啓二！！」

「あああああああああ」

僕が僕じゃなくなる僕はどうにかなくなってしまうもしかしたらもう

どうにかなってるのかも知れない。

「啓二！！ 啓二！！」

「あああああああ」

彩子さん彩子さん彩子さん。

あああああああああたまのながあああああああああ
あああああああしろくあああああああああそれられるああ
あああああああああああああああばくはあああああああ
ああもう僕じゃいられない。

……だってさ、本当に死ぬだなんて、思わないじゃないか……

……だってさ、僕は僕の事で頭がいっぱいだっただよ……だから仕方ないじゃないか……

……だってさ、彩子さんが死にそうになってるんだよ……僕が一番懂れているあの人が……明日をも知れぬ身なんだ……

……だってさ……だってさ……

……だったら、矛盾してるじゃないか、僕は。

僕は誰かに頼りにされるような人間になりたいとか、相談されるような人間になりたいとか、思っていた。

思っていたじゃないか。思っていただろ？ 否定するな自分。思っていたんだ、僕は。

それなのになんだ、この体たらくは。頼りにされたら拒絶し、相談されそうになったら断って。

結局は、死んじやってる。頼ってきた人間は、死んじやってる。

「はは……」

僕は笑った。

「……ははは」

もう一度笑った。

「……はははは」

彩子さん……ごめんね……

貴方が頼りにしていた啓二は、もう、居ない……

あるのは、魂の抜けてしまった、僕の形をしている、屍。

第七十一話：命を舐めるなよ

朝になっても、松本さんは動かない。ピクリとも動く気配が無い。今日はもう退院する日だと言うのに……こんな調子じゃあとてもじゃないがホテルなんか……

「……まあ、私ったら……」

私は自分の頬を強くパンと叩いた。

そうだ、何もホテルに行くだけが楽しみじゃないだろう。松本さんとの生活。これが私にとってとても大きなものになっていくはずだ。

一緒に買い物をして、一緒に映画を見て、一緒に散歩して、一緒に……愛を確かめ合って。

そんな幸せな生活がこれから待っているんだ。だから今日はもういいじゃないか。松本さんは病み上がりなんだし、おとなしくあの部屋に戻ってゆっくりテレビでも見ようじゃないか。

そう……焦る事は何も無い。私達にはもう乗り越えるべき心の壁は無い。

お互いに、狂っているんだから。私達にはもうお互いしか居ない。

「まづもどさあん……」

私は松本さんの胸に頭を乗せた。

すると確かに感じる松本さんの鼓動……体温……呼吸……生きてる証。

それらが愛しくて愛しくてたまらなくなる。

愛しくて愛しくて、欲しくなる。

「まづもどさん……」

「安奈ちゃんさ、そろそろ帰ったらどうかなんて思うんだけど」

机に座って何か書き物をしていた女医さんが何度目かの同じ言葉を私にかけてきた。

「嫌ですよ。だって、ぎょうでまづもどさん退院なんだがら。だか

ら、まっでいたいんです」

私は松本さんを待っているという事を繰り返し伝えていた。何度も帰らないと伝えているのに、何故何度も同じ事を言ってくるのか、理解できない。

「……そう」

女医さんは少し複雑そうな表情を浮かべ、ボールペンを力チ力チと鳴らしながら机へと視線を移した。

私はその様子を確認し、再び松本さんの名を呼びながら松本さんの胸へと頭をうずめる。

……ああ。幸せだ。幸せだよ、松本さん……

もう私には松本さんしか居ない……彩ねえも、けいちゃんも、もう二度と会ってはくれないだろう。私はそれだけの事をしてしまったのだから。

だけどいいんだ。私は松本さんがいてくれるだけで充分なんだ。

満たされるんだ……

松本さんは、私の、希望なんだから……

この診療室の椅子に座り続けて何時間が経過しただろう、早朝7時頃。この診療室に置いてある電話機が突然鳴り出した。女医さんはすかさず受話器を取り「小林です」と答え、受話器に向かって何度か相槌を打つ。

「……はい。はい。あ、そうなんですか。はい、解りましたそう伝えます」

手短に会話を終えたかと思うと女医さんは笑顔で私のほうを向き「喜んで安奈ちゃん」と弾んだ声で嬉しそうに話しかけてきた。

「彩子さんの意識が回復して、今貴方をよんでるってさ」

女医さんのその言葉を聴いて、私の体は無意識のうちにビクンと跳ね上がる。

「……え？」

「だから、彩子さんの意識が回復したって」

「彩ねえ……助かったんですか」

「詳しくはわからない。会って確かめてきたら？ 本人も呼んでるみたいだし」

女医さんは「本当は面会謝絶状態なんだけど、特別だって」と付け加えた。

そうだった。

私、彩ねえを、刺したんだった。

優しくて、気丈で、強くて、格好よくて、我侭で、先導的で、頼りになって……素敵な。

彩ねえを、刺した。

優しくて、気丈で、強くて、格好よくて、我侭で、先導的で、頼りになって、素敵なのに、私を認めてくれないから刺したんだった。親友だって言うてくれたのに。抱きしめあいながら眠ったというのに……認めてくれなかったから刺したんだった。

安奈が……刺した。安奈が私に、刺させた。

お腹の中が、うずく。安奈が自己主張する。

痒くて、痒くて、仕方がない。お腹というより、中が痒い。内臓を取り出してかきむしりたくなるほどに、中が痒い。

「……会わせる顔なんて」

「そうだよね、今まで彩子さんの事なんてすっかり忘れてたもんね。松本君の事で頭がいっぱいになってたもんね」

「……え？」

私に背を向け、右手でボールペンをカチカチ音を立たせながら、女医さんは少し怒ったような口調でそう言い放った。

その後ろ姿の印象は、やはり少し怒っているような印象を受ける。「命を舐めるなよ」礼奈

「……れ……礼奈じゃない」

私は小声で否定する。命を舐めている事をではなく、私が礼奈ではないという事を否定する。

「ずれた事言つて誤魔化さないでよ。そもそも自分の事を安奈と名乗っている地点で、礼奈は命を舐めているよ」

女医さんが握るボールペンから発せられる力チ力チが、徐々に早く力強く聴こえてくる。

「だ……だから私は礼奈じゃないよ」

再び、小声で否定する。

「まあ、礼奈ちゃんが安奈と名乗るのは別にどうでも良い事なんだけどさ、とにかく今、彩子さんの所に行つてきなよ。せめて筋は通さないかね」

女医さんの私を見る目が、悲壮なものへと変わっていった。

……いや、私を哀れんでいるようにも、見える。見えて仕方が無い。

「……はい」

私は女医さんの迫力に負け、小さく、返事をした。

第七十二話：たまらなく、感じている

熱い。熱いのにな、寒い。

お腹が燃えるように熱い。熱い。熱い……だけど体は寒い。凍えそうなほどに、寒い……

気を抜いたら意識が飛んでしまいそうだ。いや、間違いなく、飛んでしまうだろう。体は「だるい」を通り越して、やばい。体が体の動かし方を忘れてしまったかのように、動かない。

こんな所で寝ている場合じゃないのに……私にはまだやる事が山ほど残っているというのに……

私は、もっと、もっと、清算していかなければならないんだ。最初のひとつでこれじゃあ先が思いやられるではないか。

根性を出して、腕に力を込める。そうだ、ベッドから起き上がるなんて毎日やっている事じゃないか。力を込めて、体を動かせ。それだけで、いいんだ。

「彩子さん無理しては駄目ですよ」

ぼやけた視界なので良くは見えないが、白衣をまとった看護師らしき人物が私の肩に手をあててベッドへと押し戻そうとする。

何故だ、起き上がる事を手助けするのなら解るが、何故私を再び寝かしつけようとするのか……

「貴方は大怪我をしているんです。意識が戻ったのだから不思議なほどなのです。ですから今は安静にしてください」

「……関係ない」

「え？」

「そんな事は、関係ない」

ここが病院だというのなら好都合だ。えいちゃんの病室ならわかっている。とりあえずそこに行かないと。

えいちゃんに、話さなければならぬ。えいちゃんは脳挫傷だと。伝えたうえで、謝罪しなければならぬ。一生を賭けて、見守らな

ければ。

そしてそこで安奈ちゃんが訪れるのを待ち、同じ事を伝えなければ。そして隠していた事をちゃんと謝らなければ。

これで、ようやく四分の一くらいなんだ。私の業は、これedyouやく四分の一くらい……

けいちゃんも、有香さんも、無関係なのに巻き込んでしまった……この人達にはどう償っていけば良いのかすらまだ解らない。解らないが……償わなければならない。私の業なんだから。私が、なんとかしないと。

再び腕に力を込める。ベッドがギシギシという音を立てて軋んでいる。その音が私の腕に力が込められている事をあらわしてくれているようで、なんだか嬉しい。

私はまだ、大丈夫。私はまだ、頑張れる。生きて清算しなければ。生きて全て償わなければ。

そう、生きて、生きて。えいちゃんに、安奈ちゃんに、有香さんに、そして、けいちゃんに。借りを、返していかなければならない。

……生きて……

「生きて」借りを返す？

「生きて」清算する？

……あはは。

「はは……あはは……」

私は笑った。笑わずには居られなかった。

罪なのに……業なのに……私を今動かしているのは、そういったもの。私を今生かしているのも、きっとそうだった意識。

罪なのに……業なのに……私にとっては生きる意味。行動する動機。

「あははっ……はははっ……」

笑ったたびにお腹の傷がズキズキと痛む。一回笑うと痛みが頭にま

で響いてくる。だけど、笑いが止まらない。笑いがこみ上げてくる。だって、おかしいもの。こんなの、普通じゃない。

矛盾。矛盾の渦だ。何故罪が、業が、生きる意味にあたるのか。行動する動機に繋がるのか。

「ははは……ははは……」

不思議だ……不思議な感覚だ。行くも絶望、戻るも、絶望。そんな板挟みの状態なのに、私は、なんだか……なんだか……生きてるという実感を、たまらなく、感じている。

「……生きるんだ」

大丈夫、生きるんだから。

腕に力を込める。そしてベッドから這い上がれ。腰を浮かすんだ。地に足をつけて、歩き出せ。

行くも、戻るも。生きるも、死ぬも。

どちらも地獄なら、せめて生きて、清算しよう。

そのほうが、私らしい。岩本彩子らしい。

「ざいねえ……だめだよねでなきゃ」

視界がぼやけていて良くは見えないが、どうやらここに安奈ちゃんがいる。安奈ちゃんの声が小さく、私に聞こえてきた。

何故だろう……突然現れた安奈ちゃんに違和感を感じない。そこに居ることが、まるで当然のように感じる。

「……寝てなんかいられないよ。私は彩子だから」

「……ざいねえ……」

「……ごめんね安奈ちゃん、私隠してた。松本君の事について、言ってない事があった」

「……ざいねえ……」

「松本君は、頭を強く打っている。脳挫傷……しかも、脳内出血の疑いすらあるの」

私は全身に力を込めてベッドから起き上がり、地面に足をつけた。……」

「もしかしたら障害が残るかも知れない。おかしくなるかも知れな

い。でも安心して安奈ちゃん、私、絶対に清算してみせる」

ぼやけた視界のまま、私は安奈ちゃんの眼を見た。いや、正確に言つと、安奈ちゃんの眼付近を見た。なにせ視界がぼやけている。焦点が定まらない。まだ立ち上がっていないというのにクラクラする。

怪我をしているのはお腹だと言うのに……何故他の部分までこんなに影響を受けるんだろう。満足に動けない体が、良く見えない目が、本当に、疎ましい。

「青白い顔して、何いつでるんですか」

「……今はね。でも、こんなすぐに治るから。ちょっと休めばすぐに良くなるから。だから安奈ちゃん」

私は安奈ちゃんを手招きして自分のもとへと呼び寄せた。

安奈ちゃんはどうかやら困惑しているらしく、キョロキョロと顔を動かしている。どうかやら私に近づいてくる様子は無い。

なら、私から、近づいていくだけ。

足に力を込める。いつもやっている通りに。ほんの数歩だ。大丈夫。

これが、私にとっての……

私にとっての……

「安奈ちゃんは、罪の意識なんて……」

私にとっての、生きる意味。

「感じなくて……いい……だ……」

どうかやら足は、届かなかった。

第七十三話：どなってしまうのだろうか

姉の携帯電話には誰の電話番号もメールアドレスも登録されていなかった。

入っているのは、ブックマークに登録されている掲示板のアドレスだけ。それ以外は一切のメールも、着信履歴も消去されている。

僕はただなんとなくその掲示板へとアクセスしてみた。本当になんとか。特に深い意味など持たずに、半分死んでしまった意識の中、僕は決定ボタンを押していた。

この掲示板は、俗に言う学校裏サイト。姉の通っている高校の在学生達が毎日飽きもせず「匿名」という名の下に書き込みをおこなっていた。

その中で、異様なほどのレス数を有するスレッドがあった。そのスレッドのタイトル欄に、姉の名前が使われていた。

僕は、そのまましばらく固まってしまった。

「ああ……あ……あ……」

スレッドの最初の一文。『長谷川さとみて絶対ヤリマンだよな』
続いて『セックスフレンドが二十人突破したらしいぜ。俺も一回ヤッた事あるし』

さらに『担任の植原とも寝たらしい』

あとも延々、姉の、悪口。弁護する書き込みは一切無い。延々姉の悪口がつづいている。

最近の書き込みはさらに酷い。僕の名まで出てきている。弟とヤッただとか、弟を調教しているだとか。

書き込みからリンクされているブログもあり、そのブログのタイトルは『長谷川さとみのヤリマン日記』と書かれていた。内容は、やはり酷いものだ。

……信頼できる人が学校のどこにも居ないのだから、最後の最後、藁をも掴む思いで、恥をしのんで、家族という最後の希望に頼ってきた。それなのに僕は……僕はなんて事を言っただ……姉には居なかつたんだよ、信頼できる人間なんて。姉の周りはおるか、学校にも、どこにも。僕以上に、孤独だったんだ。

なのに僕は、言ってしまった。「甘えるな」と。「そんな勇気もないくせに」と。

しかも姉の死体を目の当たりにし怒り狂い「迷惑だ」とか、良くは覚えてないけど、かなりの暴言を……

「あ……あ……あ……」

僕は……僕は……

僕は……どうすればいい？

彩子さん……僕は一体どうすれば……

会いたいよ……会いたいよ……彩子さん……会いたい……

「ちょっと啓二！ どこにいくの!？」

僕は無意識のうちにフラフラと外出していた。本当に、いつの間にか僕は外に居た。

後ろから慌てて母が僕の名を呼び引き止める。だけど構ってられない。僕には行かなければならない場所がある。無意識だったけどそれだけは解っていた。

行かなきゃ……彩子さんに会わなきゃ……僕はどうすればいいのか、彩子さんに会うだけで解るような気がする。

面会謝絶だろうと、彩子さんの意識が無かろうと、関係ない。顔を見るだけでいいんだ。それだけで僕は落ち着くはず。何をすべきか解るはず。

僕は追いかけてくる母を振り切るように、全速力で病院の方へと走っていった。後ろから聞こえてきていた声は徐々に遠くなり、すぐさま聞こえなくなっていくた。

「はあ……はあ……」

家から病院まで、一切の休憩も取らずに全速力で走ってきたので息が乱れている。だが僕はそんな事に構っていられず、病院のドアノブに手をそえ、一気に開こうとした。

しかしどうやらまだこの病院は営業時間を迎えてはおらず鍵がかっている。この病院のドアは二重構造になっており、内側は自動ドア、外側は手動開閉のガラスのドア。僕は必死にそのガラスのドアをバンバンと叩き、大きなジェスチャーで中に居る人間へアピールした。

「あけてください！！ お願いしますあけて！！ あけて！！」

僕は両腕をぶんぶんと振り回す。そして誰も気付いてくれない事が解ると再びドアをバンバンと叩く。

それらを何度か繰り返していたら医者らしき女性が迷惑そうな表情を作り中から僕の様子をうかがいに出てきた。僕はここぞとばかりに大声をあげる。

「お願いします！！ あけてください！！ 彩子さんに会いたいんです！！ お願いします！！」

その医者は一瞬驚いた表情を作り、急いで自動ドアのスイッチを入れ、次に僕が叩いていたドアの鍵を開けてくれた。僕は鍵の開いたドアを乱暴に引き開け、大きな声で「ありがとうございます！！」と叫んだ後に走り出そうとする。

「ちよつと待つて！」

女性の医者は僕の服を掴み、引っ張り、引き止める。思った以上の力に僕の首は服の襟に引っ張られ、息が切れていたのも重なり、むせた。

「がはっ……ごほっ……ごほっ……な……何するんですか……」

「あら……ごめん。でもちよつと私の話を聞いて」

「ごほっ……ごほっ……僕ちよつと急いで……るんですけど」

「彩子さんに会いに来たって言つてたけどさ」

女性の医者には、少し言葉をつまらせた。

「言いましたけど」

「ん……」

「何ですか？」

「彩子さん危篤状態で、もしかしたら……」

「関係ないです」

「……関係ないって」

「顔見に来ただけですから」

「……あはは。あんたらさあ、本当に狂ってる人間の集まりだね」
「なんとでも言うてください。それじゃあ」

僕は女医さんの目を一度も見ず、ただただ前を見ていた。
早く行かなきゃ……それだけが僕の頭の中を占拠する。だから、
僕はもう止まってはられない。「それじゃあ」と言い捨てた瞬間、
無意識のうちに足を前へと突き動かしていた。

部屋の場所は、どこだ？

彩子さんは、どこに居る？

見つけ出せたなら、僕は……

僕は……

どうなってしまうのだろうか。

「はは」

どうなってしまうのだろうか。

第七十三話：どなってしまうのだろうか（後書き）

第四章的なものはここで終わりです。

この章でのテーマは「狂気」でした。それらを少しでも感じていただけていれば幸いです。

他にも色々書きたい事がありますが、それはブログのほうにでも書いておこうかと思っております。暇があればブログのほうにも目を通してくださいな。

さて、次章が最終章。この小説のまとめのようなお話が続きます。暇で暇で他にやる事が見つからなかった時にでも読んでやってくださいな。

第七十四話：最後の日 その一

罪を償うという事とは、一体どういった事なのだろう？

自分を知るという事とは、一体どういった事なのだろう？

狂ってしまうという事とは、一体どういった事なのだろう？

そして……愛するという事とは、一体どういった事なのだろう？

礼奈……いや、安奈ちゃんが旅立ってから約半年の歳月が流れた。極寒のあの時とは打って変わって、今は日に日に暖かくなっていき、外出する際に半袖にするか長袖にするか迷うという、大変微妙な季節。

私はどちらかと言うと夏が嫌いで、毎年この微妙な季節が来るたびに憂鬱な気分になっていた。何故なら容赦無く降り注いでくる紫外線。この夏で三十歳になる私にとっては本当にこの紫外線というものが大敵である。肌は荒れるし染みなんかも最近気になりだしてきた。百害あって一利なしとはまさにこの事。

それに暑い。ジツトリとした空気がどこに行くにも纏わり付いてきて、常に生理状態のような感覚に陥る。本当に不快。

「イライラしてんですか？」

隣を歩いていた松本君が私の顔を不思議そうな表情で見つめていた。その純粹無垢で綺麗な瞳に、少しだけドキッとさせられる。

好意からではない。心を見透かされたようで、ドキツとした。

「ん？ うっん、なんでも無い」

松本君は首を小さく傾けて「……ならいいんすけど」と呟いた。

そして再びポケットに手を入れて、空を見上げながらブツブツと小さく独り言を始める。

「あゝ……いい天気だ。いい天気なんだけど、まだちょっと肌寒いんだよね。寒いのは本当に嫌だよ。嫌だ嫌だ……嫌なんだけど、そんなに嫌な事ばかりあった訳じゃ無いんだもんね」

松本君のその言葉を聴きながら「うん」「うん」と相槌を打った。松本君は別に相槌を期待して独り言を話している訳では無いのだが、なんだか私は相槌を打たなければならぬ義務があるように感じる。この半年間、ずっと私はそうしてきた。

「冬ってさ、嫌いなんだけど、冬になったらさ、天使が舞い降りるんだよ。本当に可愛くて、綺麗な天使。だからさ、早く冬になつて欲しいって思う事もあるんだよね。不思議なんだよね、嫌なのに、待ってるんだ。冬になるのを、待ってるんだよ」

「うん。うん」

「そうだよ」

後ろを歩いていた彩子ちゃんも、小さく呟く。少しだけ暗い表情を作り、俯きながら、元気の無い声で松本君の独り言に対して私と同じく「うんうん」と相槌を打っている。

「なんかさ、去年と一昨年はいつも寒かったような気がするんだよ。春になつても、夏になつても。だけど不思議なんだ。冬が近くにつれて、暖かくなつて行つたような気がするよ。きっと天使のおかげなんじゃないかな」って思うんだ」

私と彩子ちゃんは、同時に「うん」と呟いた。

「さあ、着いたよ。ここが貴方のお部屋」

私は左手を掲げて古い二階建てのアパートを示唆した。決して部屋の玄関までは連れて行かない。私が出来るのは、ここまで。

あとは、松本君本人が行かなければ。松本君本人に、自分で選んでもらわねばならない。そうしないと、きっと松本君は、ずっとこのまま。しかし、もし自分で正しい部屋を選ぶのなら、松本君は、回復の兆候を見せるような気がする。

これは予感ではなく確信。何も根拠の無い、確信だった。

「うん。ここ……だね」

松本君はアパートから少し離れた歩道に立ち、アパートを舐めるように見続けた。

その姿は懐かしんでいるようにも見える。目を少し細め、微笑みを浮かべていた。

「……えいちゃん……」

「彩子ちゃん」

私は不安そうな表情を浮かべている彩子ちゃんの肩をポンと叩いて笑顔を作ってみせた。私のその笑顔につられてか、彩子ちゃんはぎこちなく、少しだけ微笑む。

「大丈夫だよ。彩子ちゃん」

私は、絶対の自信を持って彩子ちゃんにそう告げる。しかし罪を清算しようとしている彩子ちゃんにとってこの瞬間は気が気では無いのだろう、微笑んではいるのだが、彼女の目は決して笑ってはいなかった。

「……はい」

彩子ちゃんはそれだけを言い、両手を合わせて互いの指を絡ませた。

アパート前に到着して三十分は経過しただろうか……松本君はようやくアパートを眺めるのをやめ、小さく「チッ」と舌打ちをした後、黙り込んでいた口を開いた。

「……先生。鍵ってかかっているんですか？」

「かかってないよ。彩子ちゃんに頼んで開けておいて貰ったから」「そうですか」

松本君は「ふう〜」と肺の中に溜まっていた空気を全て吐きつき、すぐに大きく深呼吸をする。

「んじゃ、いつてくる」

ポケットにはもう、手を入れていなかった。

後姿は、さきほどとはまったく違う印象を受けた。

足取りも、軽やかとは言えないが決して危うくも無い。

そして何より、彼はまっすぐに、自分の部屋へと向かって歩き出している。

「……ほら。言ったとおりだ」

私がそう呟くと、彩子ちゃんは泣き出してしまった。

号泣という言葉がもっとも適切だろう。彼女は、両手で顔を覆いながら、号泣していた。

「どう表現したらいいんだろうな……ちょっと前まで、霞がかつていた意識だったとも言えいいのか……自分は自分なのに自分じゃないとも言えいいのか……どれも適切な表現じゃないけど、どれもが正しいような、そんな感じだ」

松本君は部屋の中央に立ち、耳の後ろをポリポリと掻き毟りながら、鋭い視線で部屋をキョロキョロと見渡していた。

これが素の松本君なのかと思うと、なんだか嫌な気分になってしまふ。

「今だって……少し霞がかっている気がする。少し自分が自分じゃないような気がする。だから眠るのが怖い。朝起きたら、また完全に頭に霞がかっていたらどうしようって、自分が自分じゃなかったらどうしようって、思うというより、感じる」

「そんなんっ……！！ えいちゃん……！！ しっかりしてよっ！！」

彩子ちゃんが必死な表情で松本君の体へと抱きつく。抱きつきながら、泣いている。

「……頑張っではみるつもりだ。だけどよ……」

松本君は左手を上げて、もともと薬指があつた場所を右手で撫でる。

「……だけど、もう安奈は居ないんだ……安奈が居ないから俺は狂った……」

松本君は愛しそうに、もともと薬指があつた場所を撫で続けた。

彼の目には、彩子ちゃんも、私も、映ってはいないようだった。

第七十五話：最後の日 その二

私は、償いきれぬ罪を償いながら、生きている。

「えいちゃん……っ！！ 私……何か出来る事ないの……！？ えいちゃんがえいちゃんて居られるんなら……私なんでもするから……！！！」

私は泣きじやくりながらえいちゃんの胸を抱きしめ、大きな声でそう叫んだ。泣くという行為につきまとうシャツクリに負けないように、精一杯大きな声で叫んだ。

「……彩子……お前は精一杯頑張ってくれたじゃねえか。だから、もういいよ」

えいちゃんは私の頭をポンポンと優しく叩く。そしてとても優しく声で「今まで、ありがとうな」と言ってくれた。

「あああああ……！！ うわあああ……っ！！」

ああ……駄目だよ……私は許されちゃいけないんだから……もともと償っていかねばいけないんだから。だからそんな言葉を投げかけないで欲しい……優しい言葉を投げかけないで欲しい……決意が歪むじゃないか……開放された気分になつてしまっじゃないか……

そんなのは、駄目じゃないか……

「俺の世話をするためにお前大学やめただろ……毎日俺の病室に来て話し相手になってくれただろ……自分も重傷で辛いつつのに、歩けない俺に肩を貸してくれただろ……お前が退院してからも毎日お見舞いに来てくれただろ……本当は泣きたかっただろうに、ずっと笑顔で接してくれただろ……もう、いいよ。もういいから」

「うあああ……！！ わああああ……！！」

えいちゃんはおも泣き続ける私の頭をまたポンポンと叩いた。「高校時代のお前からは、想像も出来なかった事だから……うれ

しかつたよ、本当に。今まで、ありがとう」

「うあああああつっ……！！ 駄目だよおっっ！！ そんな事お
おっっ！！」

そんな事言ったら駄目だよ……

満たされるよ……心が……体が……私が。私の存在が。

満たされちゃいけないんだ。開放されちゃいけないんだ。私の罪
は、私の中で処理しなくちゃいけないんだ。まだまだ償いきれてい
ない。えいちゃんに対しても、けいちゃんに対しても、そして、安
奈ちゃんに対しても。全然、まだまだ、足りていない。

それなのに。それなのに。

満たされて、しまうじゃないか……

「ああああああつっ……！！ うわあああああつっ！！」

「それに、お前にはやる事がいっぱいあるじゃないか。俺にばかり
構ってられないはずだ。お腹の子供、幸せにしてやれよ」

「あああつっ……！！ ううううつっ……！！」

「だから、俺の事はもういい……もう気にやむな。お前は」

えいちゃんは私の肩を掴み、優しく、引き離す。

えいちゃん自身も少し後ずさり、私の顔を見ながら「開放され
んだ」と、強く、言い放ってくれた。

「松本君、霞が取れて感激している所悪いんだけど、今のうちに聞
いておかないといけない事があるんだよね」

美香さんはボールペンとメモ帳を取り出してえいちゃんの顔を冷
たく睨んだ。今までのえいちゃんへの態度から一変、本当に、冷た
いと感じる視線をえいちゃんに向けていた。

急に……どうしたのだろう。

「えーと、貴方の言う所の自分が自分だった時の記憶の最後、それ
っていつなの？」

「……そうだな、今色々と混乱しているけど……はっきりとした記
憶っていうのは……今思い出せる限りでは、啓二君と二人で話した

時が最後かな……」

美香さんは「ふ〜ん」と何の感情も籠っていないような印象をうける言葉を呟きながらメモ帳になにやら書き込んでいた。続けて「その時の会話の内容は覚えてる？」と質問し、えいちゃんが答える。とまた「ふ〜ん」と言いながらメモを取る。

……美香さんって、こんな人だったかな……と、思ってしまった。この美香さんという人は、精神科医でもないのに忙しい中私の相談に乗ってくれたり、えいちゃんの看病を手伝ってくれたりしてくれた、いわば私にとっての頼りになるお姉さんのような存在であった。確かに今までも少々機械的な印象をうける場面があったが……だがしかし、ここまで感情の籠っていない言葉を発せられる人だとは思っても見なかった。

「左手の薬指の事は覚えてる？」

……あ……そういえば私、その話知らない。えいちゃんは教えてくれなかったし、美香さんも決して教えてはくれなかった。

その時丁度私は生死の境をさ迷っていた時だったから……私には知る術が無かった。

確かに、その質問は気になる。どうしても指が無くなってしまったのか、私も知りたい。

「……ああ。覚えてるよ」

「安奈ちゃんが切って食べちゃった事も？」

「え……」

思わず私は声を出していた。

「……ああ。覚えてる」

……何を言っているんだ？

「その時、射精してた事は？」

「……先生、そんな話どうでもいいじゃないか」

「どうでも良くない。貴方が異常か異常じゃないか。それを計るための質問なのよ。もし異常なのだとしたら、貴方は退院しても施設にいかなくやいけない」

美香さんは一切えいちゃんの眼を見ず「さあ、どうなの？」と詰め寄った。その様子を見てえいちゃんは小さく「チッ」と舌打ちをし、目をキョロキョロとさせながら少し考え込んでいる。

「覚えていないならそれでも別に構わないわよ。そのまま書いておくから」

「……待てよ。解った……」

えいちゃんは左手をじっと見つめた。いや、正確には左手ではない。左手の薬指のあった場所を、だ。

なんだかとても、愛しいものを見つめるような、そんな視線を送っている。

「覚えているし、この傷を愛しくさえ感じている」

「うわ……」

私は再び思わず声を出した。考えていた単語をそのまま口に出されて、ギョツとしたというか、ビクリしたというか……

「ふうん……きっちり異常って事だ。というか、自分がマトモに見られるように嘘をつくって事、しないの？」

「……それは、安奈に対して失礼になるだろ。言わない事は出来ても、嘘はつけない」

「狂わされて、惑わされて、あげく指をちょんぎられて、失礼になる……か」

美香さんはメモ帳をパタンと閉め、持っていたハンドポケットに入れた。ノック式のボールペンはそのまま右手に握られており、何度も何度も力チ力チとノックし続ける。

「やっぱあんたら、最高に狂ってるね」

なんとも棘のある言葉という印象を受けてしまう。

一体、どうしたと言っのだろうか……こんな人では無かったはず

……

第七十六話：最後の日 その三

僕は狂いながら生きている。正常とはなんなのか。異常とはなんなのか。僕にはもう判断がつかない。

姉が死んでから、そして安奈さんが居なくなってしまうってから、約半年の月日が流れた。

もうそろそろ頃合かな。と考えただけで、死んでいた感情が息を吹き返すのを感じる。

「はは……」

夏が近づくにつれて、汗をかく量がどんどん多くなってきた。百回程度の腕立て伏せで鼻のてっぺんから汗が滴り落ちる。

「いいぞ……いい調子だ……」

代謝も申し分ない。筋肉痛も無い。体はこの所すこぶる快調。たった今計画を決行したとしても、いとも簡単に想いは達せられそう。何人襲い掛かってこようと絶対には負ける気がしない。勝つことは、絶対にできるはずだ。

「はは……」

それはそう。僕は勝つために、この半年間鍛えてきたのだから。いつもの倍以上の訓練を、続けてきたのだから。

こんなに苦勞して失敗なんてしたら……本当に僕は無価値な人間だと思い込んでしまい、死んだ感情は二度とよみがえないような気がしてならない。

だから。自分のためにも、僕は何度だって腕立て伏せをするし、スクワットもする。もちろん腹筋運動だってやるし、走りこみだってしてるんだ。全ては強くなるため。そして、感情を取り戻すため。……けいちゃん。少し休んだら？」

最愛の人が、僕に話しかけてくる。

いや……最愛の人と思っている人。がもっとも適した表現のよう

な気がしてしまう。

駄目だな……この感覚は駄目だ。最愛の人だと感じなければなら
ないのに。感情が死んでしまっただけ以来、どうも僕は全てがリアルに
感じられなくなってしまうている。

「すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで」

「……もう充分強いよ。もう、休んでもいいと思うよ」

「駄目なんですって。万が一にも僕は負けられない。僕の負けは、
姉の負けなんですから」

最愛の人は少しだけ困った表情をして、僕が普段勉強する時に使
用している椅子へと腰をおろした。小さな頃から使っている椅子だ
からか、相当ガタがきていらくギチギチという金属のきしむ音
が少し体を動かしただけで聴こえてくる。

「はは……少し太ったんじゃないですか？ 前まではそこまで音は
出なかったはずですけど」

「……うん。少し……ね。本当に少しだけ……太ったよ」

僕は腕立て伏せをしながら最愛の人の顔を見る。

「はは……またまた冗談を……でもまあ……彩子さんはもう少し太
ったほうがいいですよ。貧弱を絵に描いたような体してるんですか
ら」

僕は冗談めかして最愛の人へそう言い放つ。その時の僕の顔は、
冗談を言っているような顔をしているのかどうか、知らない。知ら
ないけど、最愛の人は「クスッ」と笑ってくれていた。

「そっかなあ……私そんなでもないって。特に……お腹とか……
最近気になるんだ」

最愛の人はお腹をさすりながら目を細めて笑って見せた。続けて
「このままじゃあどんどん大きくなっていつちやうかも」と言い、
また笑った。

「……それでも、僕は構わないです。彩子さんは、彩子さんなんだ
から」

待っててくれるなら、なんでもいいさ。

僕が感情を取り戻すまで待っていてくれるのなら、どんな容姿になろうとも彩子さんは彩子さんだ。我俣で、自分勝手。だけど芯が強くて頼りになり、僕を好いてくれている、彩子さんなんだから……

「……もうちよつとですから……待っていてください」

僕はより力を込めて腕立て伏せをする。

「もうちよつと……もうちよつと強くなったら、僕は奴等を倒しに行きますから……警察に捕まるかも知れないけど、僕はまだ未成年だし武器を使うつもりも無い。だから、すぐに出てきます。そして……そして、彩子さん」

何度腕立て伏せをしても、もう汗は垂れてこない。体は熱いというのに、もう汗は止まっていた。

「僕は、僕に戻るから。僕を、また愛してください」

最愛の人は、一瞬表情を曇らせたがすぐに笑顔に戻り「うん」と、弾む声でそう言ってくれた。

最愛の人は最近僕の母親と妙に仲が良くなり、二人で食事なんかをして来た事さえあるらしい。最愛の人いわく「将来義理のお母さんになる人かも知れないからね」だそうだ。今夜もテーブルを僕と母と最愛の人の三人で囲み、談話しながら晩御飯を食べる事になった。

「今日もご飯はそれだけ？」

最愛の人が僕の目の前に置かれているトマトを見てそう言った。

僕の体を気遣ってくれているのか「もっと食べなきゃ駄目だよ」といつてくれる。

「……いえ、これだけあれば充分ですから」

嘘ではない。本当に僕にはこれだけで充分なのだ。

この半年、欲が湧かなくて困る。食欲も、睡眠欲も、性欲も、今の僕には欠片程度のものしか残っていない。

最後に満足に食事をとったのはいつなのか……思い出せない。最後に満足に睡眠をとったのはいつなのか……思い出せない。

唯一、性欲だけは覚えている。半年前の十二月二十七日を境に僕の性欲は尽きてしまい、それ以来僕は性行為も自慰行為もしていなかった。

今の僕は、本当に、無欲だ。

「でもさ……けいちゃん体壊しちゃうよ？」

「大丈夫ですって。凄く調子良いですから」

僕は小さく「いただきます」と呟いてトマトを掴み、口まで運び、小さくかんだ。

「ご馳走様」

僕はたべ残したトマトをゴミ箱へと捨てて、自室へと続く階段を上り始める。

後ろから「死んじゃうよ……」という彩子さんの声が聞こえてきた。

返答は、しない。

第七十七話：最後の日 その四

俺は、自分を探しながら生きている。

いや、自分に探させながら……が一番適切な言葉だろう。自分に自分を探させながら、生きている。

彩子がこの部屋を出て行つてから六時間くらいが経過しただろう。今の時刻は夜の九時を過ぎたあたり。

彩子はおそらく啓二君の所に行っているのだろう。彩子にとって心のより所だから仕方ない。それに俺自身も、もうあまり彩子とは関わりたくないと思つてゐる。本当に彩子によくやってくれたから……もう、俺に関わらせちゃいけない。

「私が思うにだけどさ、眠つても別に支障無いと思うんだけど」

この数時間沈黙を維持してきたのだが、テーブルの上にノートや資料を並べて物書きをしていた先生が突然静寂を突き破り、俺に話しかけてきた。

「眠いんですよ？ だったら眠ればいいと思うよ」

俺は確かに眠たくなつてきていた。痛くは無いのだが、頭の左後方から円柱状の風穴があいているような感覚があり、何を考えてもそこから思考が抜け落ちてしまつてゐるような、そんな状態だ。

「だけどさ、怖ええんだ……眠つたらまた俺が俺じゃなくなつてゐるような気がする」

「貴方何か勘違いしているかも知れないけど、貴方がおかしくなつたのは安奈ちゃんが居なくなつて精神的に参っちゃったからじゃないよ。脳挫傷や脳内出血の影響。意識がハッキリしてきているんだつたら回復しつつあるつて事だと思うよ。今日ここにつれてきたのはあくまでキツカケだし」

先生はボールペンを力チ力チとノックして「もう大丈夫だよ」と後姿のまま棒読みでそう言つてのけた。

しかしこの先生……俺がおかしくなっていた頃とはまるで別人のような態度だ。俺がおかしくなっていた頃は年の離れた弟に接するように振舞ってくれていたというのに。

今ではまるで厄介者を見るような目で……いや違う。見てくれさえしない。たまに目があつてもすぐに視線をそらされてしまう。その上おそらく意識して冷たいと感じる声を発している。

初めてこの人と顔を合わせた時の印象そのままだ。

「……先生は帰らねえのか？ もう九時過ぎてるよ」

「帰らないよ。明日貴方をまた病院に引っ立てなきゃいけないし」

「……逃げも隠れもしねえって」

「ふうん」

先生はゆつくりとノートを閉じ、天井を見上げて「ふう」と大きなため息をついた。そしてそのまま伸びをし、後ろへと倒れこんだ。それでもやはり視線はあわせてくれず、依然として天井を見上げている。

「……泊まってくのか？」

「……」

先生は天井を見上げたまま、何も答えてはくれなかった。その時の先生の表情は、冷たいとも、怒っているとも取れない、無表情を絵に描いたような顔をしていた。

「……答えてくれよ」

「……」

やはり、先生は黙り込んだままだった。

……困るな。本当に泊まっていくつもりなのだろうか。

未婚の男女が同じ屋根の下に……とかを言うつもりは無い。そんなものにはもう慣れた。俺が困るのは、先生が居ると思いい出に浸り、泣く事も出来ないという事。

そう、俺は……俺は、泣きたいんだ。

安奈を思い出し、安奈に懺悔し、安奈を叱咤し、安奈を想い……泣きたい。

「……いつでもこの部屋へ帰ってこれるっていうのなら、それでも構わないけど……どうやらそうもいかないみたいだし、出来れば出て行ってくれると助かる」

「……安奈ちゃんについて、調べたんだよ」

先生は俺が話し終わると間髪いれずに話し出した。表情は、やはり無表情のまま。

それでも、さきほどとは違うという事は解った。この台詞を発した声のトーンが、あきらかに下がっている。

「……え？」

「……少しだけだね。調べたんだよ」

「……調べたって……今いる場所が解ったとか……？」

俺は鼓動が早くなるのを感じていた。ドクンドクンと、血液がものすごい早さで体内を駆け巡っているのが解る。

俺は久々に興奮している。こういった感じ……久々だ。

「違う。今の安奈ちゃんじゃなくて、昔の安奈ちゃんについてだよ」

「……昔の安奈……って」

昔の安奈について……？

何故今更昔の安奈について調べるんだ……？ そんな事しても何の意味も無い。調べるとするなら、今の安奈の居場所だろう。

「……なんで今更……」

「しっかりしろ松本。今更なんて事は無いだろ。少なくとも、安奈ちゃんの事を考えるという事は、今の松本にとって大事な事のはずだ。違うとは言わせないよ」

「……違うとは言わないけど……正直、期待していた事とは違うし興奮しただけに、肩透かしをくらい心のどこかに穴が空いてしまったように、全身を虚脱感が襲ってくる。」

……やはり、俺は安奈が大好きで仕方ないらしい。安奈の事を知りたいという欲求は今でも健在だ。けどそれは、安奈が側に居てこそ意味のあるもの。とにかくにも、俺は安奈に、今すぐにでも会いたい。

「……確かに俺にとって安奈が全てなんだけどさ……その話は、また今度にしてくれないか？」

「そう？　じゃあこの話は彩子ちゃんと」

……彩子って。何を言うんだこの先生は。

俺は彩子という単語が出た瞬間「それは駄目だ」と脊髄反射のごとく口にしていた。彩子をこれ以上巻き込むのは駄目だろう。彩子は彩子でやるべき事があるんだから。もう俺や安奈に関わらせてはいけない。

「あいつの腹ん中には子供が居る。あいつはもう俺の事に構っている余裕なんて無いって事くらい、先生も解っているだろう？」

「違う違う。これは松本の話じゃない。安奈ちゃんの話なんだから」

「一緒だ」

「一緒じゃない。松本は彩子ちゃんの事、何もわかつちやいない」

先生はそのまま目をつぶり、小さく鼻で深呼吸をする。

そして、また黙り込む。

先生の言葉には、きつと続きがある。何故言わなかったのかは解らないが、続きがあると思う。だから俺は「……わかつちやいないって、何ですか？」と聞いてみた。

「……」

案の定、黙殺された。

第七十八話：最後の日 その五

「あの子の事なんだけど……」

けいちゃん母親が食器を洗いながら私に話しかけてきた。

食器についている水滴をフキンでぬぐっていた私の手は止まり、寂しそうな彼女の目をみつめる。

私の視線に気がついたのか、彼女は一瞬だけ私の目を見て、すぐさま手元へと視線を戻した。

「あの子、私には何も話してくれないのよ……なんで毎日へとへとになるまで体を鍛えているのか……なんで食事をほとんどとらなくなったのか……なんでいつも無表情なのか……教えてくれないのよ」

彼女の手は、何度も同じ場所を磨いていた。

何度も何度も何度も何度も、同じ場所を繰り返しスポンジで擦り続ける。

やはりというかなんというか……狂った人間に関わった人間は少しずつその影響を受け、自分の知らない間にいつの間にか狂ってしまっているらしい。この人も、少しずつ狂い始めている。

「貴方になら、話しているんじゃないかと思って……あの子は何も言わないけど、私が見てる限り貴方あの子の良い理解者みたいだから」

私は全てを知っている。

けいちゃん何故あんなふうになってしまったのか？ その疑問に対する答えの全てを、私は詳しく説明できる。

「……さあ……解りません」

でも、教えてあげない。教えたくない。

貴方は、まず貴方の異常に気がつくべきだから。教えた所でぶち壊すに決まっているから。絶対に教えてあげない。

「そう……そうよね……あの子、必要な事以外話してくれないものね……」

……

まず、けいちゃんの事を「あの子」と呼ぶのを辞めるよな……名前を口にするのが怖いのか？ 自分の尺で計れなくなった地点で「啓二」ではなく「あの子」呼ばわりか。本当に無責任。

それと、自分から聞く事もせずに私をつてに聞きだそうとするなよな……そんな卑怯な自分に気付けない……いや、目を逸らして気付こうともしないなんて、卑怯の上塗りだろう。

私は内心イライラしながらも、笑顔で「そうなんですよね。ほんと、困ります」と答えておいた。

食器を洗い終わり、私はそそくさとけいちゃんの居る部屋へと向かった。手には霧吹きとペットボトルの水を握り締めている。

部屋の前に立ちノックを二回。そして「はいるよけいちゃん？」と声をかけた。

数秒ほどしてようやく「……うん……」という低い声が聞こえてくる。その声はすでに息あがっており、もう限界といった印象を与えさせる。

「ああ……やっぱりね」と、私は小さく呟いてドアノブを回した。キィ……という音を立てながらドアがゆっくりと開く。そしてまづ目に飛び込んできたのが床にへばりつきながら肩で息をしているけいちゃんの姿だった。

私はすかさずけいちゃんへ水を手渡す。けいちゃんは無言でそれを受け取ってゴポゴポと音を立てて一リットル全てを飲み干した。体が少しでも何かを吸収しようと必死になっているのがよくわかる。「ぜつ……ぜつ……」

昔のけいちゃんはこのなにすぐ疲れる体じゃなかったのに……明らかに栄養不足。成長するのに……いや、生きていくのに必要な栄養すらも摂っていないのだから、こうなる事は必然である。

それにこんなに疲れているのに、汗は一滴も流れる事が無い。もうけいちゃんの体には汗をかくほどの余裕すらない。

だから私は、けいちゃんの死角から霧吹きをかける。あたかもけいちゃん自信が汗をかいているかのように思わせるため。

普通、こんな事をしていたらすぐにばれてしまうだろう。シュツシュという音がしているし、いくら死角といっても一切が見えていない訳ではないのだから。

だけどそれはあくまで「普通」での話。けいちゃんは、普通じゃないから、本当に、気付かない。

「……はは。やっときた」

……けいちゃんは、この時だけ少し笑顔を見せるようになっていた。

「ふっ……ふっ……」

けいちゃんは、ガツシリとしていた半年前の体からは想像も出来ないほどに、痩せてしまっている。今ではきつと私くらいの体重しかないと思う。つまり、四十キロを切っている。

ご飯は食べないし、毎日狂ったように運動しているし、全然寝ないし。健康でいられるはずがない。

「……けいちゃん。少し話さない？」

「……すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで……」

「……けいちゃん。えっちい事しない？」

「……すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで……」

「……けいちゃん。私そろそろ帰ろうと思うんだけど」

「……すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで……」

「……けいちゃん。やつぱり私泊まっていこうかな」

「……すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで……」

最近気付いた事がある。

最初の言葉を「けいちゃん」にすれば、全ての返答が「すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで」になる。まるで壊れたCDプレイヤーのように、何度でも繰り返し「すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで」と呟く。

この事に気付いた時、本当に、狂ってしまったているんだなど、ものすごく悲しくなった。

「……けいちゃん。私のお腹の中に、けいちゃんの子供がいるよ」

「……すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで……」
私はお腹をさする。

「……けいちゃん。はやく成就させて前のけいちゃんに戻ってね……
私出来る限り協力するから」

「……すみません。僕まだまだ強くなきゃいけないんで……」
私は涙をこぼす。

「……約束だからね……お姉さんの無念を晴らしたら、絶対前のけいちゃんに戻ってね……」

「……はい」

けいちゃんは無表情のまま、低い声で、それだけを呟いた。

「けいちゃん……せめてこの子が生まれる前に元のけいちゃんに戻ってね……」

「……すみません。僕はまだまだ強くなきゃいけないんで……」

第七十九話：最後の日 その六

チツ……チツ……という音を立てて時計が針を進める。

急ぐ事もせず、サボる事もせず。一定のテンポで時を刻み続ける。

「……もうそろそろ、今日が終わるね」

私は少し蒸し暑いこの部屋に唯一ある時計を見つめながらしばらくぶりに声を発した。

それと同時に私は地面にあずけていた体を起こしひとつ「ふぁ」と小さくアクビをもらす。

「……」

返事をしない松本君の顔をなんとなく見つめてみた。どうやら、いつの間にか眠ってしまったらしい。寝息も小さく、イビキも出さないのが気がつかなかった。

しかし器用に眠るものだ。座った状態で右足を立て、そこに右手を乗せてそこに全体重を預けるように眠っている。

その格好から推察するに、眠るその瞬間まで私の事を見つめていたのだろうな。

「……起きたら首痛いだろそれ」

私は返事が無い事がわかっていながら、松本君に話しかけてみた。やはり、返事はない。

「……まったく」

私は呆れながらも松本君の体に毛布をかけてあげた。

「松本君が安奈ちゃんについてどこまで知っているかわからないけど、一応私の知っている事を話しておくよ」

私は座りながら眠っている松本君の隣に座り、身を寄せる。

「松本君はまだ入院しなきゃいけないし……いつ退院できるかわからないし……もしかしたら施設に送られるかもしれないし……だから、今話しておく」

聴いてはいないだろうが……意味の無い事なのだろうが……本当は教えたくはなかったのだが……

それでも私は、まず松本君に話しておくべきだと感じていた。

「なんでさっき詳しく聞いてこなかったのかな……本当はあの時ちゃんと話しておこうと思ってたのにさ」

私はチツ……チツ……と音を立てながら進む秒針を見つめた。あの針があと数十回時計の周りを回っただけで、もう今日が終わってしまう。

今日は半年振りに松本君が外界と触れ合えた日なのだから、今日のうちに全てを伝えておかなければならない。そんなふうに感じてしまい、話す事に意味なんて無いのに、私は焦る。

「……私達が知っている安奈ちゃんの本当の名前は、礼奈っていうの。苗字まではさすがに解らなかったけど、あの安奈ちゃんの本名は礼奈っていう事だけは間違いないよ。そして礼奈は、過去に少なくとも二人殺してる。他にも洗えば余罪は沢山ありそうだけど、はっきり礼奈ちゃんが殺したって言える人間は、二人もいるんだ」
私の顎から汗が滴り落ちる。

この部屋は暑い……本当に、暑い。

握り締めている拳にもじつとりと汗をかいている。本当に、不快。

「……ひとりは、礼奈ちゃんの妹……アンナって、いうの」

暑いな……もう……

背筋に鳥肌を立てているというのに、やはり、暑い……

「れ……礼奈ちゃんね……アンナを殺して……そして……た……」

……暑い。

汗が、不快だ。

「……食べたんだよね……」

暑いつて思っているのに。

全身が、凍えそうだ……

伝えてはいけなかっただろうか。言葉にしてはいけなかっただろ

うか。

もし松本君が起きていたら、一体どんな反応を示していたのだろうか。

ああ……暑い。暑いはずだ。だってこんなに汗をかいているんだから。

暑いんだから、震えよ、止んでくれ……

「お……お腹の肉のほとんど……と……な……内臓のほとんど……あと……右手の親指以外全部……た……食べたんだって……」

……本当は、伝えたかったんだ。言いたくて言いたくて、仕方が無かったんだ。私の中だけでとめておく事なんて、到底出来なかったんだ。

私は、当事者じゃない。過去の「礼奈ちゃん」にも現在の「安奈ちゃん」にも、あまり深くは関わっていない。

だけど、深く関わってしまった人間と、深く関わってしまっている。そしてその深く関わってしまった人間は、すべからず、狂ってしまっている。

……怖かった。怖かったんだ私は。怖くて怖くて、仕方が無かったんだ。

興味本位だった。最初は、ほんの好奇心で調べてみただけ……まさかあの礼奈ちゃんにこれほどの過去があったなんて、思ってもみなかった。私も……私も狂ってしまうのかと思うと、もう隠してなんかいられない。たとえ狂った人間だとしても当事者の誰かに話してしまいたかった。

知って欲しかった。

「私……興味本位で調べて……興味本位で貴方達と関わって……今は後悔してる」

時計の秒針があと二周すれば、今日が終わる。

「調子に乗っちゃったんだ。まるで映画やドラマの中に入り込んだような感覚になっちゃって、私が全てを説明するんだ、とか思っ

やって……」

あと、一周で、今日が終わる。

「……私も、狂うのかな」

今日が、終わる。

最終話：こころにやみ

まるで、呪い。

愛とは、まるで、呪い。

愛ゆえに、盲目になり。

愛ゆえに、人を傷つけ。

愛ゆえに、狂気に目覚め。

愛ゆえに、全てを巻き込む。

「……」

空は、黒い。本当に、黒い。

星のひとつも見えはしない。ただただ、黒が一面に広がっている。

黒は、嫌いだった。私の好きな色は、白だった。

白い翼が日に日に黒く染まっていく様を見るのは、本当に辛かった。

かと言って、私には何も出来なかった。洗ってあげる事も、優しい言葉をかける事も、出来なかった。幼かった私は、醜い安奈に恐怖していた。ただただ、毎日震えていた。

「安奈……寂しかったんだよね」

私はお腹をさすった。

ふと、ある曲のフレーズが頭をよぎる。

「この寒い季節だから貴方の側にいられる。冬の風はより一層二人の距離を短くした。貴方の右手から感じるぬくもりは、心も、体も、私を温めてくれる」

……松本さん……

松本さんは、安奈を愛してくれたよね……

本当に、嬉しかった……私も、安奈も、凄く嬉しかったよ……

だけど、私が愛する事は許されなかったんだよね。私の愛は、呪いだから……

……色々な想いが頭をよぎる。

安奈の事。アイツの事。彩ねえの事。けいちゃんの事。松本さんの事。そして、私の事。

グチャグチャになりすぎて、もう何がなんだか解らない。私は安奈？ 私は礼奈？ もしくは新しい私？ 解らない。解らない。

混乱しているはずなのに。錯乱しているはずなのに。何でだろう。心は、とても穏やかな気分だ。

「先に行つて、待ってますね、松本さん」

私は、一歩、足を踏み出した。

空は、やはり、黒かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997d/>

安奈

2011年7月12日03時34分発行